

---

# 機動戦士ガンダム S E E D ブリュナーク

ニーチェ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

機動戦士ガンダムSEEDブリュナーク

### 【Nコード】

N5384C

### 【作者名】

ニーチェ

### 【あらすじ】

CE71年から二年後。戦火はいまだに止むことはなかった・・・。全ては『アーモリー・ワン』MS奪取事件から始まったのであった・・・前作『ブーステッド』の続編。クロト視点から描く、もう一つのガンダムSEEDデスティニー

## 登場人物

O・M・N・I（地球連合軍）

クロト・ブエル      A g e    20歳

地球連合軍少佐。特殊部隊“ファントムペイン”所属。副指揮官。

元生体CPU。全大戦でAAに保護され

アークエンジェル

以後、オーブに渡り 再び連合に戻る。薬物投与を止め、狂気な一面は消える。

ステイング・オークレー      A g e    17歳

“ファントムペイン”所属のパイロット。エクステンデット。

ナチュラルとは思えない戦闘能力を持つ少年。少尉。

アウル、ステラの兄貴分。リーダー格。

アウル・ニード      A g e    16歳

“ファントムペイン”所属。少尉。ステイング等二人と同様

優れた戦闘能力を持つ。

ステラ・ルーシェ      Age   16歳

“ファントムペイン”所属。少尉。普段は茫洋としているが  
恐るべき戦闘能力を持つ。

ネオ・ロアノーク      Age   31

地球連合軍大佐。特務部隊“ファントムペイン”の指揮を執る

仮面の男。      AAのクルー『ムウ・ラ・フラガ』に似ているが・

イアン・リー

地球連合軍少佐。“ファントムペイン”の母艦

『ガティール』の艦長。

Z・A・F・T（ザフト軍）

シン・アスカ      A g e    1 6

元オーブ国民の少年。先の大戦で家族を失った後、プラントに渡りザフトに入隊。

ルナマリア・ホーク      A g e    1 7

少女でありながら、自分専用のザクウォーリアーを操る。  
ザフトのエリートパイロット。

レイ・ザ・バレル      A g e    1 6

ザフトのエリートパイロット。常に冷静な判断力を持ち  
シン達のリーダー役を務める。

メイリン・ホーク      A g e    1 6

ミネルバの艦橋でMS通信管制を担当する。

ルナマリアとは姉妹で妹にあたる。

タリア・グラデイス

ザフトの新造艦『ミネルバ』の艦長。決断力、判断力、行動力に優れたクルーの信頼を集める。プラント最高議長であるギルバート・デュランダルとは

昔の恋仲同士。人前では言わないが、互いに名前で呼び合う。

アーサー・トライン

ミネルバの副長。時に型破りな決断をするタリアの元で

苦勞をする青年。

ヴィーノ・デュプレ      Age   16

シンの友人で、ミネルバのMS技術スタッフを担当する少年。

ややお調子者。

ヨウラン・ケント                      A g e    17

ヴィーノ同様、ミネルバのMS技術スタッフを務める少年。

やや斜に構えた性格を持つ。

ギルバート・デュランダル

プラント最高評議会議長。ナチュラルとの融和政策を

推進するいわゆる穏健派の政治家。『ミネルバ』の艦長である

タリア・グラディスとは昔の恋仲。常に彼女を名前で呼ぶ。

O・R・B                      （オーブ連合首長国）

カガリ・ユラ・アスハ                      A g e    18

現オーブ連合首長国代表首長を務める少女。前大戦でキラ達と共に

愛機『ストライク・ルージュ』で戦場を駆け抜けた。

アスラン・ザラ                      A g e    1 8

元ザフトレッド（赤服）。前大戦後、オーブに亡命し  
カガリのボディガードになる。カガリとは恋仲同士。

キラ・ヤマト                      A g e    1 8

アスランの親友でカガリの弟。『フリーダム』のパイロット。  
前大戦で活躍した伝説的パイロットだが、今は隠棲中。

ラクス・クライン                  A g e    1 8

前大戦の終結に力を尽くしたプラントの歌姫。  
現在はキラと共にオーブで隠棲している。

マリユール・ラミアス

元地球連合軍軍人。前大戦後、オーブに亡命。マリア・ベルネスを



名乗り

技術者となっている。

アンドリユー・バルトフェルド

前大戦では“砂漠の虎”と恐れられた元ザフト軍人。現在は  
オーブに亡命している。

## 第一話『奪取』

宇宙に無数の砂時計が見える。プラントと呼ばれたその建物は、  
人間もどき』、

コーディネーター達が住む世界だった。

シャトルの中で、サングラスをかけた青年は  
隣にいる、小奇麗なドレスを着た少女に喋りかけられる

「クロト！外、綺麗・・・」

「ん？」

青年と少女は窓をのぞく。無数に存在するプラントの  
外壁が白銀に輝き、綺麗だ。

少女はうつとりとその砂時計を見て、ニコリと微笑む。  
その中、機内でアナウンスがなる。

『当機はまもなく、アーモリーワンに到着します。  
お忘れ物が無いようご注意ください。』

『クロト』と呼ばれた青年は、アナウンスを聞くと  
前の席で眠っていた『お仲間』の二人を起こす。

目付きの悪い少年と一見、無邪気で女の子のような顔立ちの少年は  
欠伸や軽く体を伸ばした。

少し軽い振動が起きると、シャトルはアーモリーワンに着陸した。  
数十人の人々がシャトルから下りていく。

この中で『ナチュラル』は何人乗っているだろうか。彼らも、その後に続いてシャトルから下りる。

しばらく、空港の中を見物する四人。

「作戦時間まで、結構時間があるな。」

『ステイング』と呼ばれた少年は左腕の腕時計を確認してクロトに言った。

「じゃ〜どつかで何か食べる？俺、腹減ったよ」

青髪の少年『アウル』はシャトルに乗ってから

ほとんど食べ物をお口にしなかったため、そうとう空腹状態のようだ。

彼は軽く自分のお腹を触り、顔色悪そうに言った。

クロトは右腕で髪の毛をクシャクシャにする。

「我慢しろよ。」

「あゝ！自分の金を消費したくないからって、そうゆう事を言う！ひで〜」

アウルはクロトにからかうように言った。

彼ら三人にお金は無かった。一銭も。

三人のお金を管理しているのは『保護者』であるクロトに任せられているからだ。

「これから暴れるのに物を食ったら吐くぞ。絶対」

厭きた顔でクロトはアウルに言った。しかし、隣で

ステラのお腹から小さな音が鳴ったので、クロトはさらに厭きれて、仕方がないと思ったのか自分の財布の中を確認する。

「ステラ、お腹すいた」

「あ~~~~はいはい。」

「ずるいよ！ステラの時だけ“ひいき”してさ！」

駄々をこねるアウルをスティングは見ると、スティングはアウルを叩いて言う。

「アウル、見苦しいぞ。こういうときはな、女の子が優先されるんだ」

アウルにはその意味が解らなかった。

ただなんとなく、ステラのほうが偉いと思った。それだけだった。

アウルの顔が理解が出来ていない顔だったので、スティングは軽く苦笑した。

クロトは適当な店にしようと、喫茶店に入ろうとした瞬間、アウルに制止される。

「こんな所じゃ、満足しないよ！！あそこがいい！な、ステラ！」

「うん！！！」

「.....」

アウルが指を指した方向は喫茶店から3軒隣の『ステーキハウス』だった。

何故、彼がステーキハウスを選んだのかは解らない。  
たぶん、匂いに誘われてだろう。

わざわざ高いところに行きたくない。クロトは思うが『妹分』のステラも行ったそうだったので、しぶしぶ行くはめになった。

ステラは別にどこでも良かったのだろう。お腹が満たされれば。ただ、アウルに同意を求められたから、答えただけだと思う。

「いらつしゃいませえ。何名さまですか？」

「四人です」

「禁煙席でよろしいですか？」

クロトは最近、煙草を吸うようになった。  
と、言っても一日に5〜6本だけだが。

彼ら三人の体を気にして、クロトは禁煙席を選ぶ。  
テーブル一つに席が四つあった。

「えへへ・・・何を食おうかなあ・・・」

アウルは笑いながら、メニューを確認している。  
すると、店員が四人分の水を運んできた。

水が入ったグラスの中には、水が氷結して出来た『氷』が入っていた。

氷を見るのが初めてなステラは、まじまじと氷を見つめた。  
アウルは食べたいものが決まったらしく

「こいつに決めた!!」

「……げっ……」

アウルがメニューに指を指したのは定価9800円で400gの最高級ヒレ肉らしく、この店のオススメと書いてある。

メニューに載せてある写真の中で確かに、美味しそうに写してある。クロトは別にもどうなっても良かったので

「……もう何でも食え。」

飽きれ口調で言った。

ステイキングはそれを見て、苦労してるなあと思い、共感してくれた。

「ステラも、アウルと一緒に!」

決まったと思い、ステイキングは目の前にあったボタンを押すと、チャイムが鳴り

店員がここに来た。

アウルが急ぐように店員に言った。

「ボクね、これね。これ」

「はい。当店自慢の400gヒレステーキですね。焼き方は?」

アウルは、はて焼き方って何?と思い、少し黙る。

困ったアウルはクロトに助けを求める。

クロトはアウルに好きな肉の硬さを聞くと、アウルは柔らかいの、と言った。

「じゃあ、ミディアムレア（やや柔らかい）で。」

店員は自分の持ってきた電子計算機に入力する。  
次にステラに聞かれる。ステラもただと考えるが  
やはりクロトに助けを求めた。

「ミディアム（中くらいの堅さ）で」

「かしこまりました。」

スティングは別に食べたそうでもなかったのでクロトと同じに  
コーヒーを選択した。

「ご注文の品は以上で？・・・ごゆっくり」

店員が別のテーブルに行く。

アウルは早く来ないかと待ち遠しく、メニューを  
ひたすらと見て、お腹を満たそうとする。

すぐに店員は戻ってきた。コーヒーを二つ持って  
クロトとスティングはコーヒーをすする。

スティングは再び、時計で現在の時刻を確認する。

「あと、2時間と17分ですね」

彼らが時間を確認しているのはわけがあった。  
それはアーモリーワンに存在する

『新型MS』

彼らの任務はその『新型MS』の『奪取』だった。

この情報は一ヶ月ほど前に察知されていた。

そこで、任命されたのが彼ら『第81独立機動群ファントムペイン』だ。

特にファントムペインの中でも『実験段階』である『エクステンデット部隊』を

採用している。エクステンデット。名前から察するとおり、全体戦で使われた

『ブーステッドマン』の別種類にあたる。戦闘前にブーステッドマンは薬物投与を

行うのに対して、エクステンデットはそれをしない。

かわりに、精神的な処置が行われる。それにより、ブーステッドマンよりも

思考能力が確保が出来た。秘密工作、潜入といったより高度な作戦が立てられるようになった。

肉が焼ける音と香ばしい匂いが彼らの席を包むと

二人が注文したステーキが来た。

店員は自らが持ってきたレシートを、クロトの目の前に伏せた。

二人がステーキを自分が食べやすい大きさに切って一口食べる。

「うんめえ〜！」

アウルが歓喜の声を上げる。

そしてまた、肉をほおぶり続ける。

二人はしばらく無言で肉を食べた。

まるで、お腹を空かした獣のように。



「ステーキも食うか？うめえよ」

「いや・・・俺はいい。」

ステーキはステラを見ると、ステラのドレスがステーキのソースで汚れそうだったので、彼はナプキンで前掛けを作り、彼女にそれをつける。

「ドレスが汚れるぞ。」

30分もすると、ステーキは無くなった。400gは相当な量だと思ったのだが、二人は後一皿ぐらい、いけそうな顔をしている。

「そろそろ出るか。」

クロトはレシートを持ってレジに向かった。

彼はお金を支払い、外にでて繁華街をぶらつく。

「後、1時間50分かあ・・・」

アウルは不機嫌そうに空を見上げ、立ち止まる。

ここには太陽がない。

「それにしてもさー、ここって雨ふんの？」

ステラは黙って頷く。

「さあ？どうだろうな。降るんじゃないの。」

スティングも口を挟む。

「降ってもさあ、うざくね？雨が降るの嫌だなあ〜ボクは」

アウルが不満そうに言った。そしてまた、歩き出した。

途中、ステラはショーウィンドに映る自分の姿を見つめる。  
ドレスを着たのはこれが初めてだった。

自分が小綺麗なドレスを着ていると、まるで人形のように可愛い。  
少し回ると、ふわりとドレスの裾は宙を舞う。

ステラはそれがうれしくて、くるくると回る。袖もふわりふわりと舞う。

まるで、お姫様のようなだった。

先を歩いていたアウルはスティングに訊いた。

「何やってんだよ？あれ」

「浮かれた馬鹿の演出」

スティングは答える。アウルはますます、解らない顔になる。  
するとスティングは軽薄な笑みを浮かべて肩をすくめる。

「お前も馬鹿をやれよ。馬鹿を・・・さ」

スティングもいつもより解放的な気分になっている。  
しばらくピリピリとした張り詰めた空気の中で『戦闘』をしていた  
せいで

常に警戒心を高めていたのだが、ここアーモリーワンに着いてからは

それは無くなつてリラックスしている。

ステラは浮かれた気分のまま、踊るように彼らについていく。道行く人々の視線に気づかずにくるくると回りながら角を通ると誰かにぶつかった。

「うおっ・・・と！」

買い物袋がどさりと地面に落ちる。はずみで跳ね飛ばされそうになった。

ステラの体を誰かの手が後ろから抱きかかえて、それを止めた。

「大丈夫？」

無造作に頭上にかけられた声を聞いたので、ステラは振り向く。すぐ目の上に、鮮やかな紅い瞳と吸い込まれそうな黒髪が見えた。自分と同じくらいの年齢の少年だ。

「誰？」

ステラは紅い瞳が嫌いだった。自分の嫌いな言葉に似ているからだ。そして彼女は山猫のように豹変して、少年の手を振り払い、ステイニングたちの方へ走り去る。少年は少し驚き呆然として彼女を見た。理不尽だと思った。

向こうだつてよそ見していたくせに、これではまるで自分が悪人のようなのだ。

すると、少年の後ろから彼の友人らしい人物から声をかけられる。

「・・・胸、つかんたよ。お前」

「いつ・・・!？」

まるで、ではなく自分は完全に悪役だったらしい。  
これではあの子も怒って当然だな。  
少年は思う。

「このラッキースケベ！」

「え・・・ち・・・ちがつ！」

少年は真っ赤になって弁解しようとする。  
とっさの出来事だったので胸をつかんでいたとは思わなかった。  
どうせなら、ちゃんと感触を味わっておくのだった。  
不埒な事を考えつつ、自分がさっき胸をつかんだ手を見つめた。

「あつ・・・すいません。怪我はありませんか？」

少年達の横から声がした。紅い瞳の少年はそちらを向いた。  
クロトは彼らに謝罪する。

「いえ、自分の不注意だったので・・・」

「すみません、馬鹿な『妹』で」

「妹さん・・・ですか？」

「そうですね。今年で16です」

クロトは礼儀正しく答える。これも、オーブで教わった事だ。

少年は年齢を聞くと、自分の年と同じだということにビックリする。

（じゃあ、俺と同じ年なんだ）

クロトは再び軽く頭を下げて、ステラ達3人の方に向かった。

四人は町外れの大きな看板の前に居た。電子ボードはザフトのマークを映し出し

宇宙空間にあるプラントをでかでかと映し出した。さつきからスティングは腕時計ばかりをみつめる。

先ほどから数十分待っていたので、四人はのどが渴いていた。

クロトはすぐ近くの自動販売機で四人分の飲み物を調達してくると三人に一本づつ、飲み物を手渡した。

プシュっという音共にカンのフタをあける。

クロトの飲み物がだいたい半分くらいになった頃に、バギーが一台彼らの目の前に停車する。どうやらこれが、待ち合わせている相手らしい。

ザフトの軍服を着た男がスティングと目を合わせ、黙ってうなずく。四人はバギーの後部座席に座る。

バギーは街からさらに離れ、軍事工場の敷地内に入っていく。

入り口のゲートで前座席の男が『偽』のIDを見せ、

VIPを案内する係り員のように振舞う。誰もが彼らを不審に抱か

なかった。

見学客の姿を見つつ、バギーは工場を走りぬけ巨大なハンガーの前に停車した。

重圧なシャッターが音を立て開く。それと共に、5人は工場の中に入っていく。

案内役の男が武器を渡す。4人はすぐに渡された武器に弾倉を装填する。

ステラは鞘からナイフを抜き放った。白く光る刃を見ると、彼女に『スイッチ』が入る。これからが本番。今まで見たいに、のんびりとした

彼女はもういない。

クロトは小声で4人に言った。

「あんまり殺すなよ。MSを奪取するまで、動けなくするだけでいい。」

あまり人は殺したくない。なるべく被害は最小限に。

四人は納得しない顔でクロトを見る。

アウルとステイングは舌打ちをするも、理解は出来たようだ。

ステラはキョトンとした顔でクロトを見て、頷いた。

ステイングが目で合図して、みな、一斉に物陰から飛び出す。誰もが彼女らの進入に気づかないうちに、銃声がこだまする。ステイングの連射を食らった兵士達は、なぎ倒される。

アウルは空中で側転しながら両手の機関銃から弾をばら撒く。

ステラは兵士達の中を叫びながら飛び込む。片手のナイフで兵士達の腕や足を切り裂く。兵士達は悶えながら空しく天上に銃を撃つ。

ふわりと白いドレスが舞うたびに、血しぶきがまだらに描く。

クロトは両手のハンドガンを数発、数人の兵士に発射する。

兵士の間接部分を狙った攻撃に彼らは持っていた武器を落とした。正確なこの攻撃は、昔、アスランに教えてもらったものだ。

「アウル、上だ！！」

周囲に機関銃を連射しながらスティングはアウルに声を飛ばす。アウルはその声を聞くと、クローラーの上に立っていた兵士達に振り向きもせず背中越しに両手の銃口だけを向けて撃ち落した。

数分のうちにハンガーの内部は制圧された。奇襲であったとはいえコーディネーターの兵達がたった5人の男女に敗北した。

ハンガーの中の兵士達はみな、虫の息では合ったが死んでなかった。クロトはそれを目にすると、いささか自分が恥ずかしくなった。

昔の自分だったら、上の言う事も聞かず好き勝手やっていたからだ。クロトは周囲を確認して三人に声をかける。

「いいぞ、お前ら！」

三人はすぐに三基のクローラーに飛び込む。彼らは開いたままだったコクピットの中に入り、シートに着く。OSを起動させると、手元のモニターが

明るくなり、OS名が浮かび上がる。

「どうだ？」

スティングは二人に訊く。

「OK。情報どおり」

アウルが応じ、ステラも起動作業を行う。

「いいよ」

まるでいつも乗っている機体のように、格スイッチを押して起動シークエンスをこなす。

「量子触媒反応スタート。パワーフロート良好。全兵装アクティブ、オールウィポンズフリー。システム、戦闘ステータスで起動。」

エンジン音が低く響く。三機のMSはクローラーごと起き上がる。ロックが外れて、電子ケーブルがはじけ飛ぶ。MSがついにクローラーを離れ  
ゆっくりと歩行する。

重傷の兵士が力を振り絞って、警戒ボタンを押す。しかし、遅かった。

クロトは三機が起動するのを確認すると、自分も脱出用の機体を探す。

ちょうど、訓練用なのか『ゲイツR』がある。

使ってほしいといわんばかりに、都合よくコクピットが開いている。すぐにゲイツに飛び込みシートに座ると、クロトもOSを起動させ、機体を



クローラーから起き上がらせる。

三機の“ガンダム”と“ゲイツ”は警報音の鳴り響くハンガーに立ち並び、

その威容である姿を堂々と見せ付けた。

## 第二話『衝撃』

工場の敷地でサイレンが鳴り響く。

その中、一つのハンガー（格納庫）から

巨大な扉を数条のビームが貫いた。

扉は吹き飛ぶように溶け、ビームが飛び込んだ向かい側のハンガーが誘爆する。

「カガリっ！」

とつさに藍色の髪的青年『アスラン』はオーブ連合首長国代表

『カガリ』を抱いて、物陰に飛び込んだ。

「なにっ・・・？」

カガリはもがくように身を起こし、爆発があつた方を見上げ呆然と声を上げる。

風で吹き流されていく爆煙の後ろから、見慣れた巨大なシルエットが目に入る。

「『カオス』、『ガイア』、『アビス？』」

議長の随員が、煙から現れたシルエットを目にして驚愕する。

外見から判断すると前大戦で連合から、

奪取した『G』の流れを組まれているのであろう。

特徴のある二つの目、2本の角を持っているそれは、『ジン』や『ゲイツ』とは

全く違うフォルムだ。

「あれは・・・！」

アスランが思わず絶句し、カガリも驚き呟く。

「・・・『ガンダム』？」

『カオス』のシートに着いている少年、スティングは他の『G』タイプに乗っている二人に声をかける。

「まずハンガーを潰す！MSが出てくるぞ！」

『アビス』のアウルがそっけなく、ステラに命じた。

「ステラ。お前は左」

「わかった」

ステラは答えると、言われたとおり左方へ『ガイア』で駆ける。黒いモビルスーツは空中で変形し、四速歩行型に形態を変える。それはザフトの『バクウ』に酷似したものであった。

『ガイア』は四本の足で大地を蹴りハンガーを駆け抜ける。そして背部ビーム砲を放った。ビームはハンガーの中に並んでいた『ジン』を貫き、さらに誘爆を起こしてハンガーが崩れ去る。

『アビス』は両肩の貝殻のようなシールドから、二本突き出した砲

口から

火を噴き、別のハンガーを容赦なく破壊する。

ステイングの『カオス』はビームライフルで、式典用装備の『ジン』を

片端から狙い、破壊する。

次に背中に装備されている『機動兵装ポッド』を開き、数十ものミサイルが

高い弧を描き放たれると、並んだハンガーに次々と命中して爆発を生む。

強襲用機体である『カオス』にとって、うってつけの仕事だろう。

敵も反撃の狼煙を上げようとしていた。

『デイン』は翼を開いて飛び立ち、『ガズウート』が戦車形態から二足歩行に切り替わり、こちらに攻撃を集中させる。

ステラはすかさず大地を蹴り『ガイア』でそれらの頭上に飛ぶとお返しにビームライフルで鈍重な『ガズウート』を破壊する。

たくさんの炎と煙がアーモリーワンを焦がす。

躍動する機体を動かし、鋼鉄の人形達を破壊する。

ステラの血がどんどん熱くなっていく。

（最高だ・・・！この機体は！）

同じ頃、クロトの『ゲイツR』も空中の『デイン』をビームライフルで

狙撃する。デインは羽と、武装をもっている腕を破壊され、もがくように落下する。

さらに、地上の戦車形態である『ガズウート』を

『ゲイツR』の足で側面から勢いよく蹴り飛ばして横転させる。

クロトは中で小さく「必殺！」と呟いた。

MSに乗ると、落ち着かなくなる自分がいる事に気づくと彼は苦笑した。

やはりMSに乗って敵を倒す事は最高だ。この上ない喜びだ。クロトの口が引きつり、口元に笑みが浮かぶ。

彼もまた、ステラ達と同じなのだ。

再び『デイン』が数機、彼の『ゲイツR』をロックオンする。ロックされたのでコクピットの内部で警報音が鳴る。

クロトは『ゲイツR』を振り向かせ、腰部にマウントされているレールガンを『デイン』のコクピットに向ける。

トリガーを引こうとした瞬間、キラの顔が脳裏に浮かぶ。

「・・・・」

クロトはコクピットから、やや左の左翼部分にロックを向けレールガンを発射した。飛行能力を失ったデインは地面へと落下して戦闘能力を奪われる。

殺してはいけない。そんな事すれば、また『あの頃』に戻ってしまう。

殺戮と破壊を楽しむ悪魔のような戦闘兵器だったあの頃に・・・。

瓦礫の渦の中、アスランは力ガリを連れて避難場所を探す。黒い機体が変形し、背中の二枚の翼を展開すると

『デイン』のコクピットを両断した。

その爆風が二人を襲う。アスランはすぐに力ガリを自分の体で押さえ込み

彼女を爆風から守る。『デイン』の破片が周囲に飛び散るが

運良くもアスランの体には突き刺さらなかった。

カガリは恐る恐るとアスランの無事を確認しようと、彼に訊く。

「アスラン・・・!」

彼は彼女を安心させるように、微笑む。

「大丈夫だ」

なんでこんな事になってしまったのだろう。

アスランは苛立ちながら思った。あの三機の『G』タイプの中に乗っているのは

いったい誰だ？連合・・・？

『連合』と考えた瞬間、クロトの顔が頭に浮かぶ。

違う絶対に違う。彼がいるはずがない。アスランは否定してもクロトの顔が頭から離れなかった。

考えれば考えるほど彼を混乱させる。

だが今一番大事なのは、カガリを守る事。

彼は周囲を見渡す。そして路上に倒れていた機体に気づいた。

『ザク』だ。先に見た新型だ。

「来い!」

彼はカガリを連れて、駆け出した。

幸運にも『ザク』はコクピットのハッチが開いていた。

「乗るんだっ!」

「えっ・・・!?!」

カガリを強引にコクピットに乗せ、彼はシートに座る。  
彼は慣れた操作で機体を起動させる。  
忘れようにも忘れられない、体に染み付いた動き。  
彼は皮肉に思う。

「お前・・・」

カガリは不安気に彼に身を寄せる。  
アスランがMSに触れるのは先の大戦以来だ。  
彼には二度と触れて欲しくなかった代物。  
アスランは短く吐き捨てる。

「君をここで死なせるわけにいくか！」

この状況ではむしろ、ここが安全だ。  
外よりマシな避難所だ。

さいわい、『ザク』にはどこも以上が無い。  
操縦系統も旧型とさほど変わりも無い。

エンジンが低く唸り、頭部のモノアイが光る。  
モニターが周囲を映しだし、胸の排気口から熱せられた排気が  
噴出し、機体の上に積もる瓦礫がバラバラと落ちる。

「よし、いける！」

が、その動きが敵の注意をひきつけてしまった。  
目の前に先ほどの黒い『G』が映った。  
黒い機体がビームライフルを構える。  
アスランはとっさにレバーを操作して、ペダルを踏み込む。  
『ザク』はスラスト・を噴射すると共に横へ飛ぶと

背後のハンガーに放たれたビームが壁を焼く。

黒い機体は『ザク』のショルダーアタックをまともに受けて背後に吹き飛ばされる。

アスランは息を呑む。

予想以上のパワーとスピードだ。最初に自分が乗った『G』と変わらない

戦闘能力だ。

黒い機体が起き上がり、今度はビームサーベルを構える。

アスランはそれに応える様に、自らもシールドからビームトマホークを構える。

下がりながらビームサーベルをシールドで受け、ビームトマホークを振り落とす。黒い機体もシールドでそれを受ける。

「くっ・・・」

このままでは不利だ。いくら『ザク』といえど、このまま長期戦になれば

『G』の方がパワーもある。それに戦う為に、これに乗ったわけではない。

元々はカガリを守り、避難場所を探すため。

黒い機体はビームサーベルを打ち込み続け、『ザク』はそれを受けるので

精一杯だった。

ピーツとコクピットの中で警報音が鳴り響く。

（しまった！後ろを取られた・・・！？）

黒い機体と同じ新型の『G』である『カオス』が背後から接近して



いる。

アスランは背筋を凍らせる。脳裏で「やられる」と絶句した。

『ザク』を必死で防御姿勢を取るとするも遅すぎた。

だが、『カオス』の攻撃はコクピットから大きくずれて、ビームサーベルが

『ザク』の左腕をもつていく。

『カオス』の背中で放たれたミサイルが炸裂したのだ。

「ふん、これでおあいこだ！」

棒立ちになった『カオス』の横を戦闘機が過ぎ去る。

後から戦闘機に続いて二つの機影もやって来る。

それらの三つの機影は元々一つであったかのように

『合体』してMS形態に変化する。そして最後に四つめの機影が合体したMSの

背部に装着して、灰色だった機体色は鮮やかな赤色に変わる。

フェイズシフト装甲が起動したのだ。

そして、背部にある二本ある長大な大剣を抜き放ち、地上に降り立つ。

大剣は柄の部分で結合して、大きく頭上で振りかぶる。

合体した新型の『G』の中で黒髪の少年は憎しみを込めて叫ぶ。

「また戦争がしたいのか！？あんた達は！」

### 第三話『恐怖』

「こいつ・・・！」

突如と現れた紅いMSをみてステイングは啞然とする。

特徴的な頭部を見れば、自分たちが乗っている物と同系統なのだろう。

だが、この紅いMSは自分たちの目の前で『合体』したのだ。

ステイング達が啞然としてる中、紅いMSは長刀を降るってステラの『ガイア』に斬りかかる。

「なんだ、これは!？」

ステラは紙一重でその刃をかわし、後退しながら頭部バルカンを乱射する。

しかし紅いMSにバルカン等効くはずも無い。

PS装甲は通電する事によりその強度を高め、物理的攻撃を無効にする。

このPS装甲を持つ機体を倒すにはビームかレーザーを使うしかない。

紅いMSは腰部に備えたビームライフルを抜き放ち、滞空中にいた『ガイア』を狙う。

ステイングは援護のためにライフルを発射する。

モニターには、その機体のデータが照合され

『Impulse』

と映りだされていた。

「インパルス？　どういうことだ、あんな機体の情報は……！　アウル！」

不意に『上司』が言っていた言葉を思いだす。

（アーモリーワンに製造された『新型MS』三機……それを獲って来い）

としか彼等は告げられていない。四機目？　話が違う。ステイングは急いでもう一人の仲間を呼び寄せる。

その間にも紅いMSと『ガイア』は剣を交えている。

ステラは『ガイア』を獣型に変形させ、飛び上がり、紅いMSとすれ違い

『ガイア』が空中で背部のビーム砲を放つ。

しかし紅いMSは、左手に装着してあるアンチ・ビーム・シールドを掲げて

それを防ぎ、分離して片手にある長刀の一本を『ガイア』に投げつけた。

『ガイア』はすかさず変形して人型に戻し、こちらも

左手に装着したアンチ・ビーム・シールドで防ぐも、重量のある長刀を防いだ

衝撃はごまかせず、反動で機体は大きく弾き飛ばされる。

「よぉーし！　行こう！」

時計を確認した男が号令し、後にあどけた調子で付け足す。

「慎ましく・・・な？」

仮面をつけたその壮年こそスティングたちの『上司』である

『ネオ・ロアノーク』その人だ。

“ファントムペイン”の母艦『ガティール』のブリッジはその指令を耳にして活気付く。

『ガティール』の艦長『イアン・リー』は射撃指揮官に命令を下す。

「ゴット・フリート一番、二番を起動。ミサイル発射官、一番から八番、

コリントス装填」

ネオはモニターを見ると、宇宙空間に一つザフトの『ナスカ級』戦艦が見える。

距離にしては遠くはないが、こちらの事は気づいていないようだ。

なぜなら、『ガティール』が存在するはずの宇宙空間にあちらのモニターには

何も映ってはいないのだから。

そう。それは視覚的にも、レーダー等の探索機能を持ってもしても  
だ。

ネオはまたも陽気な調子で命令を下した。

「主砲照準、左舷前方ナスカ級。発射と共に“ミラージュ・コロイド”を解除。

機関最大。さて、ようやく面白くなるぞ。諸君」

隣に座した艦長のイアン・リーが固い顔に、かすかな笑みを浮かべた。

そしておもむろに声を張る。

「ゴット・フリート！てえーっ！」

『ガティール』の主砲が火を噴く。何も無い空間から二筋の光が放たれる。

太い熱線は真っ直ぐに『ナスカ級』をとらえ、一瞬のうちに大きな爆発が生まれた。

別の頃、密かに『ガティール』から発進した『ダガーL』がアーモリーワンの港に潜入する。

港口には先ほど『ガティール』の存在に気づき、それに対応しようとする。

『ナスカ級』が二隻、発進を急いでいる。

徐々に、港口を出航しようとする二隻の艦の目の前に

二機の『ダガーL』が躍り出た。

『ダガーL』はバズーカを撃ちこむと、両方の艦は小規模な爆発を起こし、港口を戦艦の残骸で埋め尽くす。

ここまではネオ・ロアノークの計画通りだ。

アーモリーワンにかすかな振動が、踏みしめた大地に伝わった。

クロト達4人にとって、それは『時間切れ』の合図だった。

『カオス』『アビス』『ガイア』はまだ、新型の紅いMSに手こずっていた。

『ガイア』の両翼のビームブレイドきらめかせ、『カオス』が

着地した瞬間を狙って攻撃する。二段構えの攻撃にも敵は機敏に反応し

それらを避ける。

別方向で紅い新型MSを支援に来た『デイン』が空中から叩き落される。青の『G』、『アビス』だ。

ステイングのスピーカーからアウルが声をかける

「ステイング、さっきの！」

アウルもさっきの振動に気づいたようだ。

「わかってる。『お迎え』の時間だろ！」

「遅れてる。『バス』行っちゃうぜ」

「わかってると言っただろうが……！」

「だいたい、何だよあの紅いの！新型は3機のはずだろ？」

「俺が知るか！」

アウルが非難がましく言うから、ステイングはむっとして言い返した。

「どーすんの？あんなの予定に無いぜ？チツ・ネオの奴」

アウルは内心、指揮官に対して毒づく。それはステイングも同感だ。この三機の情報は手に入ってるのに、なんであんな情報が無いんだよ。

「でも、ほおつちや置けないだろ？追撃されても面倒だ。」

言いながらステイングは背後に接近した『シグー』を撃ち落とす。ザフトは奇襲から立ち直りつつある。そろそろ、紅いMSと同じ『新型』が現れるかもしれない。

ここで退却したほうが良いことはわかっている。

ステイングは『カオス』を駆って、紅い機体に躍り出る。

「はん、首でも土産にしようって？」

馬鹿にしたように言いながら、『カオス』の後に続く。

「かつこ悪いって言うんじゃない？そういうの」

「こいつ・・・何故落ちない!？」

ステラが憎々しげに吐き捨てる。

彼女の目に映るのは、例の新型の『G』のみだった。

さつきからこれでもか、というぐらい攻撃しているのに

いっこうに落ちる気配が見えない。逆に痛手を見せられた。

こちらは4機だというのに。こんな目障りな敵には出会ったことが無い！

「ステラ、ここは一旦退くぞ！お前のエネルギーもヤバイだろ？」

『ガイア』のコクピットから信頼する上官の声が聞こえる。

「・・・すぐに沈める・・・！」

クロトの声も届かない。彼は彼女が既に『切れ気味』だと解った。完全に頭に血が上ったステラは、エネルギー切れも近いのにビームライフルを『G』に撃ちこむ。

「こんな・・・私は・・・！私は・・・」

紅いMSが長刀を構え、『ガイア』に突っ込む。

『ガイア』はシールドで長刀を受け止める。『ガイア』はすかさず離れて、ビームライフルを撃ちこみ続ける。

「やめろ、ステラ！離脱だ！クロトの声が聞こえなかったのか！？」

『お仲間』のステイングの声が一瞬、耳に止まる。

だが、私のような『最高の戦士』に『汚点』は残せない。

汚点、つまり新型の『G』を落とせない事。しかも3機がかりでだ。ステラのプライドを傷つけた、このMSだけは許せない・・・！！

「私がつ・・・こんなああ！！」

苛立ちに沸騰しそうな彼女の耳に、アウルが皮肉げに投げつけた言葉が

突き刺さる。

「じゃあ・・・お前ここで死ねよ！」

死・・・！死又！



熱くなっていた体が一瞬で氷のようになる気分になった。  
まるで血液に液体窒素でも流し込まれた気分。  
全身を満たして一気にバラバラ砕け散る。

「ネオには僕から言っていおいてやる。さよならっ・・・てさ!」

死又・・・私ガ・・・死又・・・?

「アウル!お前!!」

「だって止まらないじゃん。ステラの奴」

「黙れ馬鹿!余計な事を・・・!」

『お仲間』二人の声がコクピットで響いたが、ステラに届く事は無い。

呆然とステラはコクピットでずくんでいた。

死ぬ。忘れていた感情を一気に呼び起こし、圧倒的な強さで身に迫る。

それは、『恐怖』だった。

「嫌!嫌あああ!」

彼女は絶叫し、機体を振り返す。

急加速して天頂方面に離脱しようとする。それに続いて『カオス』と『アビス』

が『ガイア』の後に続く。

「結果オーライだろ?」

アウルが悦に入ったようにスティングに言い放った。

クロトは三機の『G』が天頂を目指すのを確認すると、パイロットスーツの

腰のポケットから小さな管を取り出す。

クロトのパイロットスーツだけ少し特別で、首筋辺りに穴がある。

彼はその穴に管を突き立てる。チクツと小さな痛みと共に何かが割れる

音がする。

クロト専用の　・グリフェプタンだ。と言っても、依存性が無く禁断症状には

ならない。この薬はアドレナリン、脳内麻薬を一瞬で起こす事が出来る。

クロトの瞳が白色に変わる。彼は『ゲイツR』を駆って  
紅い新型の方へ向かう。

「俺が時間を稼ぐ。お前たちは早く脱出しろ！」

『ゲイツR』の防盾からビームサーベルを形成する。

例の紅いMSの友軍機『ザク』が増えている。

それぞれにパーソナルカラーがあるのか『赤』と『白』の『ザク』だ。

三機のMSに『ゲイツR』一機で立ち向かう。

久しぶりに『興奮状態』である中、口癖である言葉を張り裂けるほど叫ぶ。

「でりゃあああああ!!瞬殺!!!!!!」

#### 第四話『感覚』

『ゲイツR』が一機、空中で新型MS郡に猛攻を仕掛ける。  
その動きは並みの『ゲイツR』をはるかに凌駕していた。

『ゲイツR』が紅いMSにビームライフルで牽制し、隙を狙ってはサーベルで斬りかかる。紅いMS『インパルス』は『ゲイツR』にてこずる。その時、『ゲイツR』の背後から、赤色の『ザク』が超射程距離ビーム砲オルトロスを構え、『ゲイツR』に発射する。  
『ゲイツR』は辛うじてその攻撃をかわすものの、右肩部分にビームがかすり

融解した。赤色の『ザク』に腰部のレールガンを返そうとするが、横から

白色の『ザク』が肩を突き出し、ショルダータックルをする。

『ゲイツR』はその反動で吹き飛ば。『ゲイツR』が圧されている。

そんな事は最初から解っていた。

このままだと、隊長が袋叩きにされる。

「・・・やっぱり、ほうつちゃおけねえ！」

『カオス』の背部に装着されている機動兵装ポッドを2つ発射するとそのポッドの砲口は『インパルス』と白色の『ザク』を狙いつける。

『インパルス』と白色の『ザク』はそれに気づき、回避行動をとるが『インパルス』が回避を取った先に

防盾からサーベルを伸ばして待っている『ゲイツR』が目映る。  
防御をとる間もなく、『インパルス』の長刀は折られた。

「こいつら、連携が・・・」

『インパルス』のパイロット、シン・アスカは内心で驚愕する。しかも、盗んだ機体をここまで操るとは一体何者なのだ。

『カオス』の背後を預けるように『ゲイツR』が立ち並ぶ。

「ちっ・・・まだなのか？」

クロトは苛立ちながらステイングに訊いた。

他の2機は何をモタモタしてる。早く『穴』を開けて脱出しなければならぬのに。

ステイングに喋っている余裕は無かった。

考えてみれば、彼等は初陣なのだ。

どんなに腕が立つからとはいえ、実戦ではまるっきり初心者。

しかも、新型MSの登場で困惑している。

相当なストレスがたまっているはずだ。

（俺も・・・そうだったか・・・最初は）

クロトが最初に出撃したことを思い出す。

オノゴロ島だった。

『レイダー』を駆って『オーブ』のMSを狩る。

その時、現れたのがキラが乗る『フリーダム』だ。

『カオス』が機動兵装ポッドを動かして、『インパルス』と白い『ザク』を狙う。

「しつこいつ・・・!!」

筒型のポッドからビームやミサイルが飛び出す。  
白い『ザク』はシールドで防御するが、『インパルス』は盾を  
投げつけて、ビームとミサイルを防いだ。

シンは『カオス』の先にいる、他の2機を見た。

『ガイア』と『アビス』は内壁に穴を開けようと、立て続けに  
攻撃をしている。

このままではアーモリーワンに穴が開いて、脱出されてしまう。  
まずい、と思つて新型戦艦『ミネルバ』に要請する。

「ミネルバ！フォース・シルエツトを！！」

通信でミネルバに要請すると、通信管制を担当する

メイリン・ホークがパネルを操作して、戦闘機を射出する。

すぐに戦闘機は、戦火が広がる戦場に淡々と現れた。

そして『カオス』の頭上を通り過ぎた。

スティングは一瞬、その戦闘機に注意をはらう。

「何だ？戦闘機・・・？」

その戦闘機は先端部分をパージし、機体後部に装着されているユニ  
ットが

『インパルス』に向かう。

すかさず、『インパルス』も背部に装備されているユニットをパー  
ジして

先ほど分離したユニットを背部に装着する。

それは、赤外線を通じて行われた。

『カオス』と同じ原理なのであろう。『ドラグーンシステム』で行われているのだ。

「な・・!？」

ステイングは内心、舌巻く。

またしても目の前で合体した。

彼はまさかと思った。

「装備を換装出来るのか!？」

『インパルス』が新たにユニットをマウントすると、機体の配色を変え

紅色から蒼色に変わる。

『インパルス』はビームライフルを装備し、『カオス』に構え撃つ。その攻撃をシールドで防ぎつつ、返すようにビームライフルを撃つ。『カオス』はビームサーベルを抜き放ち、『インパルス』に近づきサーベルを振り下ろすが、『インパルス』は今まで以上の運動性能で飛び上がり、かわした。

「早い!! 気をつけるアウル、そっちに行った!!」

アウルはステイングの声を訊くと、機体を旋回させて

『インパルス』に砲を定める。

両肩のシールドが開くと、両方にそれぞれ3門づつ内蔵されているビームを発射する。『インパルス』はそれを回避して、ビームサーベルで

『アビス』に斬りかかるが、『アビス』は肩のシールドで剣を受け

た。

「うおおおお！」

『カオス』に乗る、ステイングが咆哮すると

変形し、全武装を展開させてアーモリーワンの内壁に攻撃する。

今まで、『アビス』と『ガイア』が攻撃していた内壁は赤く融解して

その上に火力の高い『カオス』の全武装が火を噴いたので

ついに融解していた壁は爆発と共に破壊されて、穴が開いた。

「しまった！」

ぼつかりと開いた穴に漆黒の宇宙が広がるのが見える。

急速に減圧されたせいで、アーモリーワンの空気が外に流出し始める。

3機の『G』はそれと同時に外に押し出されるようにして、脱出した。

「くっそお！逃がすかあ！！」

シンが必死に機体を立て直しながら三機を追いかけよう、『インパルス』も

宇宙空間に流れていく。

『インパルス』に続いてレイ・ザ・バレルが乗る白い『ザクファントム』が

躍り出た。



「くっ・・・逃がすもんか！」

ルナマリア・ホークが乗る赤色の『ガナーザクウォーリアー』が3機の『G』を

追いかけてようとするが、目の前には奪われた『ゲイツR』が邪魔をして

行かせようとしない。

「なんなのよ！　いつたい！！」

ルナマリアが『ゲイツR』に長射程距離ビーム砲『オルトロス』を構えるが

『ゲイツR』の動きに翻弄されて狙いが定まらず撃つことが出来ない。

『ゲイツR』は防盾ビームサーベルを伸ばし、赤い『ザク』に近づいて

長距離射程ビーム砲を斬りつけた。武器が爆発してルナマリアの目の前が一瞬、見えなくなると次に大きな振動が襲った。

『ゲイツR』が『ザク』の腹部を蹴り飛ばしたのだ。

「きゃっ・・・！」

ルナマリアが声を上げる。『ザク』は建物の陰に座るように転び動かなくなる。

「えっ・・・ちよつと！」

ガチャガチャと機器を動かすルナマリアであるが、今の衝撃でどう

やら

機体が壊れて、動かなくなったらしい。

それもそのはずである。整備中の機体を動かしたのであるからすぐに壊れてもおかしくはない。

## 死

ルナマリアの脳裏にその言葉が過ぎるが、『ゲイツR』はそれをせず、そのまま三機の『G』の後に続くように宇宙空間に飛び出しに行った。

ルナマリアは恐怖が胸に詰まって声が出せずそして、そのまま『ザク』の中で救援を待つしかなかった。

『エグゼス』と呼ばれた戦闘機のフォルムは前大戦で使用されていた『メビウス・ゼロ』に酷似したものであった。後部には『ガンバレ』と呼ばれた

兵装ポッドを搭載してある。これは『ドラグーンシステム』とは違い、無線式では無い、優先式である。

『エグゼス』のcockpitの中でネオは奇妙な感覚を覚えていた。その『感覚』に導かれるように『エグゼス』を動かしてアーモリーワンに向かっていく。

彼等が失敗するわけが無い。

あるとすれば何か、不測の事態が起きたのであろう。

アーモリーワンの周辺に來ると、目の前に小さな穴が開いているの

が分かった。

その穴の近くに6機のMSが交戦しているのが分かる。

その内の三機は奪ったMSであろう。

『ゲイツR』が三機を支援しているようだ。どうやらあれには味方が乗っているらしい。

そして残りの2機。

一機は白い『ザク』。だがもう一機は見た事も聞いたことも無い。まさしくUNKNOWN（未確認機）だ。

四機目の『G』？

「こりや確かに、俺のミスかな。」

ネオは彼等が遅れた理由を悟り自嘲した。

キーボードを操作する。“ガティ―・ルー”へ通信文だ。通信文を書き終えて、ネオは戦闘モードに入る。

「さて・・・その機体も頂こうか!？」

赤紫色の戦闘機の後部から『ガンバレル』と呼ばれた筒型のポッドが新型の『G』に対して飛び出した。

シンは誰かに見られる感じがした。次に熱い感覚に襲われる。

「下?!」

『インパルス』は横に回避すると回避した場所にビームが飛んでいた。

どこからの攻撃だ？

再びさっきの感覚に襲われると、赤紫色のMAが『インパルス』に

突っ込んでくる。

「モビルアーマー!?!」

マゼンタ色の『エグゼス』は先端に装備されているビーム砲を撃ちながら

『インパルス』に突っ込む。『インパルス』はビームをシールドで防ぎながら

かわすと『エグゼス』は『インパルス』を通り過ぎ、ガンバレルを操作して

『インパルス』に砲口を定める。

「当るか!?!」

シンはそれを回避するが、ガンバレルは一個ではない。全部で4つあるのだ。

彼が回避した場所に2つのガンバレルは待っていた。

そしてビームが『インパルス』を捕らえるが、コクピットには直撃せず

全てシールドで防いだ。

「なかなかの腕前じゃないか。ザフトのエース君」

ネオのコクピットで警報音が鳴り響く。『インパルス』の両機の白い『ザク』が『エグゼス』にビームトマホークを振り下ろす。

「ちいつ!?!」

ネオは被弾を覚悟した。

「そりゃああ激殺!!」

クロトが駆る『ゲイツR』の腰部にマウントされているレールガンが火を噴くと

白い『ザク』の背中に被弾した。

「くうっ・・・」

『エグゼス』の中でネオは内心、驚く。

「まさかねえ・・・ザフトにここまでやる奴等がいたなんて」

『エグゼス』の中でクロトの声が聞こえる。

「ネオ!このままじゃ!!」

「分かってる!!」

ネオは先ほど被弾した『ザク』にガンバレルを向けようと再び操作する。

白い『ザク』は体勢を立て直して、『エグゼス』と向き合う。

向き合った瞬間、二人は何故だか解らないがお互いの存在を認識する事が出来た。

その奇妙な感覚の中で二人は口をそろってコクピットで言った。

「ネオ・・・ネオ・ロアノーク・・・?」

「レイ・ザ・バレル・・・?」

2機は一瞬、呆けて『エグゼス』は『ザク』の後ろを通り過ぎた。  
ネオは不思議に今の共鳴を思う。

「この感じは・・・？」

さっき、クロトが割って入る前に不思議な声を聞いた。

（この敵は普通とは違う！！）

通信の混線ではない。はつきりと脳に直接とどいたセリフ。  
その『レイ』とか言う男の声と同じだ。  
戸惑いつつネオは好奇心を覚える。

（この感じ・・・まさか・・・奴が？）

ネオは久しぶりに『あいつ』の感覚を思い出した。

「確かに・・・この敵は普通とは違うな」

ネオは笑いながら『エグゼス』を駆った。

## 第五話『睡眠』

「戦艦？」

ネオはアーモリーワンから回り込んでくる戦艦に気づいた。  
新造艦であろう。港が復旧したのか？それにしても早すぎる。

先ほどネオが戦闘に入ってまだ数分しか経っていない。  
足が速いようだ。

「欲張りすぎは・・・よくないか。」

ネオは『エグゼス』を旋回させて、母艦に帰還する。  
それと同時に『ゲイツR』も反応して『エグゼス』の後に続く。  
突然の退却でシンとレイは反応できず、あっという間に距離を開ける。

それにしても、ネオが乗る『エグゼス』と互角に戦えるあの  
白い『ザク』は一体何者なのだろう。  
クロトは疑問に思いながら“ガティー・ルー”に帰還するのであつた。

“ガティール”のフリールームで息を整えている

エクステンデットの三人。そのなか、余裕な顔をして入ってくるのが赤髪の青年、クロトであった。

クロトは自動販売機のボタンを押して飲み物を買う。

紙コップに液体が落ちて、適量まで浸ると同時に小さい扉は開き紙コップを手にとり、それを口にする。

暖かいコーヒーが乾ききった喉を潤し、体が温まるのが分かる。

クロトは飲み物をすすりながら、三人の方へ振り向き見る。

息を整えている三人を見てみると、若かった自分を思い出す。

薬の禁断症状に苦しみ、息を整えるどころでは無かったあの頃を。

「ふう」

紙コップの中身が無くなると、三人に言った。

「そろそろ、行くぞ」

三人はクロトの方に首を傾げ、立ち上がりクロトについていく。

向かった先は薄暗い部屋を中心に三つドーム型のベッドが置いてある。

彼等三人は手前の部屋で服を脱ぐ。

ステイングとアウルは、上着を脱いだけで、シャツとズボン姿だ。

しかし、ステラはドレスを脱ぎショーツと下着姿だった。

脱いでいる最中はクロトとネオはまじまじと見つめ、

アウルとステイングは赤面しながらそっぽを向いていた。

ステラはその男四人を不思議そうにいつも見ていた。

三人はベットに向かい『寝る』準備をする。

ステラはいつか街に行ったとき、クロトに買って貰った

小さなクマの人形を抱いて寝る。



三人の寝顔はとても愛らしい。

「ま・・・成功！って所ですか？ネオ」

クロトが昔の調子でネオに訊いた。

「ああ。しかしまあ・・・こうして、こいつらを見てみると  
いっちゃ悪いが、連合軍って嫌な事ばかりするよな。」

クロトの方を見ながらネオは微笑しながら言った。

「そうですね・・・正直、俺もそう思ってます。」

クロトも同意する。ネオは再び三人の方を見て、何かを思う。  
連合軍の非道さは、誰にだって明らかだった。

自分たちがしている事は確かにいい事かもしれない。

だけど、クロトや彼等三人の経緯に至ってはやりすぎている。

コーディネーターを倒すためとはいえ、数多の犠牲と失敗を重ねて  
作り出した

人間兵器でコーディネーターを討つ。馬鹿げた話だ。

「だから俺は戻ったんですよ。連合に」

数ヶ月前に言ったクロトの言葉。

（俺は・・・俺のような奴らを救いたい）

二人はその場を後にしながら会話を続けた。

ブリッジに二人は着くと、艦長のリーが出迎えた。

ネオはリーに尋ねる。

「ポイントBまでの時間は？」

「二時間ほどです。」

オペレーターが変わりに答えて、リーが探るように尋ねる。

「まだ追撃があるとお考えですか？」

「わからんね」

軽い口調であつさりと答える。

リーは再び尋ねる。

「彼等の最適化は？」

「おおむね問題は無いようだ。皆、気持ちよさげに眠っているよ」

エクステンデットは暗示によって死への恐怖を忘れ、潜在能力を高め  
コーディネーターを超える力を身につけたパイロットだ。

ブーステッドとは違い、インプラントと薬での強化では思考能力と  
判断能力を失い

作戦行動時間をオーバーすると使い物にならなくなるが

エクステンデットは精神的な強化なので判断力、思考力を確保し  
作戦を行う事が出来る。

「ただ・・・アウルがステラに“ブロックワード”を使ってしまった  
らしくてね

ちよつと厄介と言う事だが・・・」

「あれは、仕方なかったですよ。ブロックワードを使わなかったら  
ステラはやられてましたからね。」

クロトが弁解するようにネオに言った。

彼等三人には禁句が設定されている。ステラの場合は『死』という単語だ。

ブロックワードとはエクステンデットの暴走を抑えるものだ。

例えば、二年前のクロトのように作戦に支障がでるほどの無駄な破壊行動

裏切りなどだ。ブーステッドは薬での禁断症状を恐れて戦っていたがエクステンデットは薬物を使用しないので裏切る事が可能だ。

なのでブロックワードは必然と設定しなければならないのであった。そして、この禁句を言われると、今までに溜めて込んでいた

恐怖を呼び起こし、パイロットの精神を衰弱させてしまうのである。ブロックワードによって蘇った感情は睡眠中に消去される事になる。

恐怖だけでなく、次の戦闘に支障がでるマイナス要因を全てリセットすることも出来る。

この『メンテナンス』によってパイロット達は常に最高の状態を維持して

戦うに臨めるのである。

・ 「何かあるたびに、ゆりかごに戻さねばならないパイロットなど・

・ ラボは本当に使えると思っているのでしょうかね？」

「それでも、前のよりは十分マシだろ？こっちの言う事はちゃんと理解している」

クロトはネオの台詞に反応し、ムツとして言い返した。

「皮肉・・・ですか？」

ネオは軽く笑い、クロトに返す。

「ま・・・本当の事だろう？」

クロトは言い返せずに沈黙した。

彼はブスつとした態度でネオ達がいる後ろの席に座って携帯しているゲームを取り出して、始める。

「今は何もかもが試作段階みたいなものだからな。艦もMSもパイロットも・・・

そして、この世界も」

「ええ。わかっています。」

「やがて全てが本当に始まる時が来る。」

ネオは微笑み、リーの目を見つめる。

「・・・我等の名の下にね」

「やはり、来ましたか・・・」

リーが淡々とつぶやき、肩をすくめた。

新造艦“ミネルヴァ”は予想よりも早く、こちらとの距離を縮めている。

「あー。ま、ザフトもそう寝ばけてはいないようだ」

ネオは微笑しながら、“ミネルヴァ”を見て、その感想を言うと彼は声を張り上げて命令をする。

「ここで一気に叩くぞ！総員戦闘配備、パイロットをブリーフィングルームへ」

ネオが命令すると、やれやれといった感じでクロトはゲーム機の電源を

切って、三人の元に行った。

アラートが鳴り響く中、ステラは目覚めた。

他のベットを見ると、二人がいなかった。先に行ったのだろう。軽く目をこすると涙の雫が指先についた。何故、泣いていたのだろうか？  
なにも泣く事はないのに。

「起きたか？ステラ」

「クロト・・・」

大好きな人達と一緒にいる自分は快適なのに。  
自分は幸せなのに。

「出撃だ。行くぞ」

「うん・・・！」

二人がパイロットロッカーに入っていくと、すでにほとんど着替えた姿の

ステイングとアウルが楽しそうに会話していた。

「あの新型艦だつて？」

アウルがステイングに笑いながら訊いた。

「ああ。来るのはあの合体野郎かな？」

ステイングとアウルは機嫌がいい。戦闘前はいつもこうだ。ステラ自身もMSにこれから乗ると思うと、ワクワクする。

「なら・・・今度こそ生け捕るか・・・」

「どっちにしろ、また楽しい事になりそうだな、ステラ」

ステイングに話を振られ、ステラは少し戸惑った。話をよく聞いていなかったの、どう答えればいいのか分からなかった。

二人の仲間はぼーとした彼女の顔を見て、苦笑した。

「おいおい、あんまりステラを虐めるなよ」

含み笑いをしながらクロトは二人に言った。

「ま、ステラからまともな答えが返ってくるはずがないか！」

アウルは茶化すようにしてステラを見ながら言った。

ステラはアウルが笑っていたので、キョトン、としてアウルを見る

しかなかった。

クロトと他の三人はMSデッキに着くと、彼等の愛機の前まで行った。

左から緑色の『カオス』、鮮やかな青色の『アビス』、黒色の『ガイア』

そして、黒と白の色が特徴的で見た感じは『ストライク』に似ている。

しかし装備は両手には拳銃、背部のストライカーパックは今までに見たことがない

物だ。『ストライクノワール』と呼ばれたその機体が、クロトの新しい武器なのだ。

「OSは『レイダー』に近い物に変えてあります。

少佐なら機体のスペック以上の戦果を発揮できると思います」

クロトは整備兵の話を聞くなり、軽くジャンプしてコクピットに向かう。

シートに座るとすぐに、OSを起動させる。

機体は発進準備が整う。

「クロト・ブエル。ストライクノワール。出るぜえ！」

『ストライクノワール』は漆黒の宇宙に飛び出し、3機の後続に続いた。

4機のMSは小惑星を巧に避けながら、相手が出るのを待った。

攻撃の合図は、戦艦が“ミラージュ・コロイド”を展開させたらだ。4機のリーダーに例の『合体野郎』と赤色の『ザク』、及び『ゲイツR』が2機と小隊を組んでいる。

母艦が“ミラージュ・コロイド”を展開させた。

合図だ！

「よし！攻撃開始だ、派手に暴れてやれお前ら！！」

小惑星の陰から4機の『G』が一斉に飛び出す。

『アビス』が胸部と両肩に内蔵されているビーム砲を同時に発つとミラーの残骸の後ろにいた『ゲイツR』を蜂の巣にする。

『カオス』が機動兵装ポッドを二つ射出して、『ゲイツR』を捕らえる。

ポッドから放たれたビームは頭部とコクピットを貫くと、推進剤に火がついて

『ゲイツR』は爆発した。

「あつという間に二機も・・・そんなバカなっ！」

ルナマリアが悲痛な声をあげ、シンは怒りをかみ締める。

その時、手元にレーザー通信で送られた電文が入った。

それに目を走らせたシンは呆然とする。電文は敵艦の奇襲を受けた

“ミネルヴァ”が

帰艦を促すものだった。

「“ミネルヴァ”が！？」



ルナマリアはその電文を見て、驚愕した。

「私たち、まんまとはまっただけ!？」

「ああ、そういうことだね!」

ヤケになるようにシンが返す。

とたんに前方から、『カオス』の兵装ポッドが目の前に現れる。

「くっ!」

シンは声を上げて、シールドでポッドから放たれたビームを防ぐ。

「けどっ・・・これで戻れって言ったって!」

シンは次々と追いかけてくるビームをかわすのが精一杯で母艦に戻る所ではなかった。

焦れば焦るほど、シンの手元を狂わせる。

戦況は一方的に不利な状況に置かれた。

「逃がさないよ!捕縛!」

クロトの言葉と共に、『ノワール』の両掌に装備されているアンカーを飛ばす。

赤色の『ザク』はアンカーに足を絡められて、体勢を崩した。

「きゃああっ!」

ルナマリアが悲鳴する。

「ルナア！くつそ！新型か！？」

「へへへ・・・逃がすかよ赤いの！！」

『カオス』が変形しMA形態に変わると、先端の部分からビーム（カリドウス改）が放たれる。

だが間一髪のところ、『インパルス』がシールドを掲げて防ぎ、両肩に装備されている“オルトロス”を構えて『ノワール』に放つ。『ノワール』はすかさず、アンカーを切り離して高出力のビームをかわした。

「さすがエースって所かな」

クロトが感心して感想をもらした。

「さて・・・遊んでやるかな・・・どいてろ！お前等！！」

クロトが罵声を飛ばして3機の『G』を一旦下がらせる。

アウルとステイングはそれに苛つき、無視しようとしたが、ここで命令無視したら

『禁句』を言われると思ったのでやめた。

しかし、たった一機で2機のMSに立ち向かうなんて馬鹿なことをすると思った

彼等ではあったが、次には啞然していた。

『ストライクノワール』が“ショーテーター”と呼ばれる小型拳銃型ビームライフルを

連射し赤色の『ザク』を牽制する。赤色の『ザク』が後退するのを確認すると

次に両肩に装備されているビームブレイド“フラガラツハ3”に装備を持ち変える。

『ストライクノワール』は『インパルス』に突進してビームブレイドを振り下ろす。

『インパルス』は“ビームジャベリン”に持ち替え、応戦する。

二つの得物が交差してスパークを上げる中、遠距離から赤色の『ザク』が

超長距離ビーム砲からビームを発射して『ストライクノワール』を下がらせる。

「大丈夫、シン？」

「くっ・・・遊ばれてる・・・！」

今のうちに仲間の機体が攻撃すればいいのに、高みの見物をするかのごとく

何もしてこない。作戦の内とは考えられない。

たった一機のMSにこうまで、てこずるなんてシンは思えなかった。シンが『インパルス』のパイロットに選ばれたのは努力と才能だった。

アカデミーでは他の候補生を差し置いて、だんとうのトップであったのに・・・

「こんなああー!!」

『インパルス』は腰部にマウントされているビームライフルを連射するが

『ストライクノワール』には、かすりもしなかった。

「ちえ・・・クロトばかり、ずるいぜ」

アウルがコクピットで愚痴を溢す。

「しかたないだろ・・・？まあ・・・少し癪だけどな。」

ステイングもアウルに同意する。

確かに上官だからといって、これは無い。

彼等三人が出た意味が無いからだ。

「次の戦闘になったら、隊長は俺たちに華を譲ってくれるはずさ。アウル」

その直後。三人の背後で綺麗な花火が三つ打ち上げられた。

「あぁん？」

クロトも機体を動かすのをやめて、花火を見上げる。

「ネオの奴・・・しくじったか？」

コクピットの中でクロトは呟き、三人のほうへ下がり距離をとる。

「ずりいよ！クロトばっか！」

アウルが溜めていた文句をクロトにぶちまける。  
ステイングはモニター越しでやれやれ、といった顔で呆れてアウルを見る。

「悪い悪い。ちょっと調子に乗ってな」

クロトはその場から逃げ出すように母艦に戻る。

「あー・・・」

ステラはうつとりとしながら、花火を見ている。  
3つの花火は赤色、青色、黄色と分かれて、どれも純粹に綺麗だった。

「ステラ、ネオが呼んでるぜ。「帰って来い」ってさ」

『お仲間』のステイングの声を聞き、ステラは機体を動かして三人の後に続いていった。

シンはコクピットの中で息を整えながら、帰還していく四機を見つめた。

三機の『G』は単体で戦えば自分と互角ぐらいであるので何とか対応できる。

しかし、隊長機なのか黒い『G』は無理だ。  
機体越しに何か違和感が来る。

「大丈夫？シン・・・」

ルナマリアがシンを心配そうに問う。  
シンはとりあえず、ああ、と答えた。

「追撃はしなくていいのかな？」

「黒い『G』タイプが強いよ。今、追撃しても勝ち目ないし・・・」

「そう・・・。私たちも帰りましょう。“ミネルヴァ”へ」

『インパルス』と『ザク』も機体を動かして  
母艦に帰還する。

シンは帰還途中に妙な違和感を漂わせていた、あの黒い新型機のことを考えていた。

フォース・シルエットを装備させた『インパルス』でも歯が立たなかったと思った。

しかも、攻撃するときに重圧感を発せられていた。  
それは以前にも感じた事があった。

（この間の紫色のMAと同じような感じだった）

この妙な敵との遭遇がシンにとって、大きな成果になる事は  
彼にはまだ知る由も無かった。

## 第六話『恋心』

『ユニウスセブン落下から数日がたった。

私、クロト・ブエルはユニウスセブン落下の際、一機のザク・ウォーリアーと戦闘を

行っている。そのザク・ウォーリアーのパイロットは、いまや伝説的パイロットである

ザフトの元フェイス、アスラン・ザラ。

私は彼が戦闘ではなく、破碎作業を行っている事に気づくと、その場で命令を無視し

独断で破碎作業に参加するも、ユニウスセブンを完全に破壊する事は不可能だった。』

キーボードのキーを押すのを不意にやめるクロト。

何故、あんなところにアスランがいるんだ？

アスランはオーブにいるはずだ。何の理由があってザフトの艦に？  
クロトはため息を漏らす。

現在、クロトと他のエクステンデットを含めた4人は地球に降下し、それぞれの

休暇を楽しんでいる。休暇を取っている地域は非戦闘地域だからだ。

外はもう暗くなっていて、波のせせらぎがなんとも美しい。

何年も見ていなかった気がする。

他の三人はそれぞれ別々の趣味に浸っていた。

緑髪の少年、スティングは自分のパソコンを動かし、ザフトの新型機『インパルス』の戦闘シミュレーションを行っている。

青髪のアウル・ニードは今、外から戻ってきたらしく、汗をかいて

いるから

走ってきたのだろう。

唯一の少女、ステラ・ルーシェは自らが飼っている熱帯魚をうつとりと見ている。

その顔は何とも言えないくらい幸せそうな顔だ。

兵器として生まれた彼女に『戦場』というステージを与えなければ、極普通の少女なのだ。

「明日、ザフトの基地にラクス・クラインが来るみたいだぜ」

アウルが唐突に口を開いた。

スティングは肩をピクリと動かして、パソコンを閉じ、彼に真剣な顔で訊いた。

「それ・・・本当か？」

「ああ。外で走ってたときにザフトの奴らとすれ違いに聞いた。」

実はスティングは、ラクス・クラインのファンなのだ。

その事は、クロトと本人しか知らない。

「明日、ザフトの基地を見に行こう。戦力とかも気になるし・・・」

「見に行きたいだけだろ・・・」

アウルが皮肉気に呟いた。

あんなコーディネーターの歌声の何が良いのだから・・・

所詮は作られた存在だろ？あの容姿も、声も、体も！全部が作り物だろうが。

アウルは複雑に思いながら、冷蔵庫の扉を開けて飲み物を手に取っ



た。

一方、ステイキングはキーボードを操作して、とあるホームページを開いて見ている。

トップページには、派手な服装のラクス・クラインが映っていた。

『ラクス・クライン ファンクラブ』

アウルは飲み物を飲みながら、パソコンの画面に目を向けると嫌な顔をしてステイキングに訊いた。

「そんなにいいの？その、コーディネーターは・・・」

ステイキングはそんな、アウルをちらり、と見るがすぐにパソコンの画面に顔を戻した。

アウルは気分を害したのか、舌打ちをして、隣にあるソファアの上に寝転がる。

そんな、アウルを見てステイキングも、嫌な気分になった。

「なーにふてくされてんだよ？」

「なんでもねえーよ！」

「ふんっ・・・！」

お互いに苛立った二人。

ステイキングにしてはよく、噛み付いてくる。

いつもは、はいはい、と適当に済ませて、アウルをなだめるのだが・・・。

憧れのアイドルに対していちゃもんをつけられたからであろうか？

「みなさ〜ん！ラクス・クラインです！」

空中からド派手に降下してきたのは、ピンク色のザクの掌の上に乗るザフトのアイドル、ラクス・クラインだった。

ピンク色のザクに乗るラクスの声を聞くと、回りのザフト兵達はそれに応えるかのように歓喜の声を上げる。

いや、ザフト兵だけでなく、この町『ディオキア』の住人もそうだし、そして一人だけ、連合軍のにもかかわらず、満面の笑みで

「ラ・ク・ス！」

と叫ぶ者もいる。

クロトを含めた4人は『ディオキア』のザフト基地施設の近くでジープを停車して

ラクス・クラインのコンサートを眺めている。

と言っても、スティング以外はまるで興味を示していないわけであるが。

ピンク色のザクの手の上でラクスが歌いだすと、ラクスのファン達は一斉に

手拍子を合わせる。スティングもそれに乗って、自らも手を叩き始める。

アウルは呆れ果て、終わるまでジープの中で眠っているしステラは海を眺めている。

が、クロトだけは眉を細めてラクスを見ていた。知っているからだ。あれが本物のラクスでは無い事が。

本物のラクスは今頃、オーブにいるはずだ。

コンサートが終わった時はもう日が少し暮れていた。  
スティングは満足気にジープを運転している。

「でも、なーんか楽しそうだったよな。ザフトの奴ら」

アウルはシートを後ろに倒して、眠そうに言った。

「それで、結局また戦うの？あの艦とさ？」

結局のところ、スティング達4人はラクス・クラインのコンサートを観に行った訳

では無いのだ。『ディオキア』に停船中のザフト艦『ミネルヴァ』の情報を

自分たちで確認したかっただけなのだ。

実質、その仕事は1割で、9割がたはコンサートだったのであるが。

「そうだろうな。まあ、ネオはその気だろう」

「ふゝん・・・何か面倒くさいな。」

「俺たちにとって必要なのは、この戦争の行く末とかじゃない。  
ようは、勝つか負けるか、だ。」

「わかってるよっ・・・俺たちに負けは許されないんだろ？」

アウルは面倒くさそうに答えた。

だが、スティングは念を押して再び言い放つ。

「そうだ・・・！ファントムペイン（俺たち）に負けは許されねえ。」

スティングはアクセルを踏み込んで、スピードを上げた。

俺たちは勝つために生まれてきた。コーディネーターに勝つために。でも俺は違う。勝つのではなく負けない存在になる。

負けない。負けちゃならない。絶対に・・・絶対に。

負けなければ、いつかは勝てる。そう信じている。

コーディネーターだとか、ナチュラルだとか関係ない。

ようは、負けなければいい。

幼少の頃からコーディネーターを倒せ、倒せと研究員に教えられてきたけど

でも、実際は違うのではないか？自分たちは確かにコーディネーターを

倒すために生まれてきた。けど、それは存在理由であって

自分たちの考えは違うのだと思う。自分たちは自分たちのやり方で任務を遂行すればいい。

スティングは子供の頃を思い出した。朝から晩まで戦闘訓練。

コーディネーターは敵だと洗脳される毎日。

そして、ファントムペインに所属するまでの日々を。

よくよく思い出せば、幼少の頃からずっと一緒だった二人と

まさか、同じ部隊、同じ指揮官の下で仕事するとは思ってもいなかったし

運がいいと思ってもいる。

それに、クロトもどこかで会っている気がする。どこだったろう・・・最近、物忘れが酷いのか？仕方が無いか。

いつも、アレで眠ると嫌な事やどうでもいいことは忘れてしまう。

きつとクロトとも会った事があるのだろう。

クロトもロドニア出身だっていうし、研究所であつたのかもしれない。

アクセルを踏み込み、シフトを変える。

今日のステイキングはご機嫌だ。

ラクス・クラインのコンサートもあつたからだろうか。

翌朝、気持ちよく眠れた4人は同時に目が覚めた。

テラスから射す光は部屋を明るく照らして、4人は爽快な気分になった。

「うーん・・天気、いいね」

「そうだな。久しぶりにいい天気だな、ステラ。」

ステラとステイキングの会話も会話として成り立つのはやっとだったが受け答えが長くなった気がする。いつもは一言、二言で終わるのだが。

「つうか・・今日も休暇？飽きちゃったよ僕」

「しょうがねえだろ？ネオから何も聞いてねえし」

「あんた、俺たち（ファントムペイン）の副指揮官だろ？何か聞いていないわけ？」

「だあかあらあ！聞いてねえって！」

アウルは戦闘が無くてつまらない様子だ。それもそうか。  
クロトはため息を漏らして、備えてあるコーヒーポッドの中身を  
カップの中に入れて、それを飲む。

「あゝあ！つまんねゝゝ。散歩してこよつと！」

「っておい！アウル！ゝ々方までには戻って来いよ！」

返事は返ってこなかったが、伝わったであろう。  
しょうがない奴だ。あいつの散歩は長いからなゝゝ。  
と、言っても俺も戦闘がなければ何もやる事が無いし  
どうしようかゝゝ。

「ステイングー。チェスでもやらねゝか？」

「ああ。いいですよ。」

クロトはいい暇つぶしになりそうだ、と思うと  
ソファアーの上に座って、テーブルの上を片付ける。  
テーブルの中央にチェスのボードを置くと、黒と白を分けて  
チェスを始める。

ステラはそれを、じーっと見ている。

二人はボードの上で華麗な戦闘を繰り広げている。  
頭脳戦だ。ポーンの位置、ナイトの移動、クイーンの封じゝゝと  
縦横無尽に駆け巡る。クロトは3手、4手と脳内で読むが  
それが限界にもかかわらず。

ステイングはそれの10倍以上の手が読める。  
天才的な能力だ。全ての駒の配置、移動を全て考えた結果、駒を一  
つずつ

動かしていく。IQ測定で180以上を叩き出したのは伊達ではないようだ。

数十分するとスティングがたたみかけ一言

「チエツク」

と呟いた。クロトはまだ中盤戦だと思っていたがスティングにとっては終わっているのだ。

「どうして？」

「よく、ボードを見てくださいよ。」

「え？・・・あつ」

どう動かしても、負ける。それが答え。クロトは負けたのだ。

「くそー！今度こそ！もう一回だー！」

スティングはやれやれ、と思いながら、クロトに付き合った。

「もう！何よアスランさんのバカあー！」

ルナマリア・ホークは海岸でふてくされていた。アスランとラクスが一緒の部屋で寝ていたからだ。ルナマリア自身、アスランに恋心を抱いていたし、アスランが言い

訳したもの

何だか嫌な気分だった。

「ホントッ！信じられない！！」

怒りしんとつする彼女だった。

その時、海岸をふと、誰かが走っているのが見えた。

綺麗な青髪の少年。だぶだぶのシャツに首にペンダントをたらしめて砂浜を走る。

彼女はそれに興味を示したのか、少年の近くに行くと

急に少年は走るのをやめて、今度は腕立て伏せと腹筋を始める。

「58、59、60、・・・」

「何してるの？」

「ああ？見ればわかんたろ？運動だよ。う・ん・ど・う」

ネイビーブルーの瞳は何か吸い込まれそうだと不思議な感覚。

「で？何？勧誘？ウザイんだけどさあ？」

「あつ・・・えつ・・・と・・・その」

「ハア？はつきり言よ。」

ルナマリアは顔を赤らめているのを隠そうと必死で下を向いて答えた。



「暇だったら、付き合って!!」

「え？ナンパ？何だ。はっきり、言えればいいじゃん」

アウルは笑うと、ルナマリアは顔を紅葉のようにさらに赤くした。何を言っているのだろう。この少年と話していると、何を言っているのか

分からなくなってくる。調子が狂う・・・。

「で、どこ行くの？僕は暇なんだけど・・・？」

自らが言い出したことを今更、無かった事にしてなんて言えないし・

「え・・・えつとお・・・」

口が上手に動かない。緊張しているんだ私は。

何で？わかんない・・・。うー・・・どうしよう。唐突に変な事言っちゃったな・・・

「僕、お腹減ったな？食べ物、食べに行きたいんだけど。」

「えーうん。そうだね。そうしましょう」

「ところで・・・」

アウルはチラリとルナマリアを見つめて

「お金持ってる？僕さー、お金持って来てないんだー」

「・・・しょうがないわね」

二人は『ディオキア』の街の繁華街に行く事になった。

ザフトの基地から借りてきた、赤いバイクをシンは意気揚々に乗り回していた。海沿いの道を走り、風が吹きぬけ、低音のエンジン音が

鳴り響く。バイクに乗るのも久しぶりだ。思えば、アーモリーワンで乗ってからずっと戦闘ばかりだったなあ。

「つと・・・」

シンはバイクから降りると、波の打ち寄せる崖の上から海を眺める。潮の香りがする。いい匂いだ。

シンは口いっぱいに、それを吸い込むと、気持ちがいい気分になる。

「・・・ん？」

崖の近くで小さな少女がクルリクルリと踊りながら歌を歌っている。少女は笑顔で踊っていて、シンはそれに魅せられた。

世界はこんなにも美しいのに、何故、争いが起きるのだろう。理屈は分かるけど、酷すぎる。

でも、あの女の子どこかで会った気がする。

シンは、アーモリーワンの繁華街で胸を触った女の子を思い出した。

そうだ！あのときの女の子・・・！

「ねえ、君！」

「あつ・・・」

「えっ・・・？」

あどけない声がすると、少女は消えた。

シンはびっくりして、まさかと思う。

案の定、彼女は崖から落ちていた。

「ええ！嘘だろ？落ちたあ？」

マジかよ？つうかバカ？

でも、ほうつては置けないよ！

シンはすぐに、少女を助けようと崖から身を躍らせる。

どこに行った？くそ！

シンは必死で水中を探す。

いた。あの子だ。泳げないのか！

シンはもがいてる彼女の体を持ち上げて呼吸をさせようとするが彼女は突然の事で暴れて、シンの顔を引っ掻く。

シンの頬に三本の傷が出来る。痛い。けど、今はこの子を助けるのが先だ。

「落ち着けつて！」

シンの顔に無数の傷が出来る。引つ掻き傷とほとんどは打撲だ。彼女は普通の女の子よりも力が強いのか、肘が顔面に飛んでくるとクラクラするほど痛い。彼女を助けるよりも先にこっちが参ってしまう。

数分してやっと彼女は落ち着いた。

落ち着いたので彼女を、浅瀬まで運ぶと、これまで溜めていた怒りを一気に  
出して、怒鳴りつけた。

「死ぬ気かこのバカ！」

少女はビクッと体を縮み上げる。

「泳げもしないのに！あんなトコ！なに、ぼーっとして・・・」

言いながら、シンは彼女の異変に気づいて、怒鳴るのをやめた。ものすごく怯えた顔で彼女は体を縮めている。

「い・・・や・・・嫌・・・い・・・死ぬのは・・・嫌あ・・・」

そして、急に立ち上がり

「いやああああ！！！」

彼女は叫ぶと、海に向かって走り出す。

シンは彼女の行動に戸惑うが、このままだとまた溺れるかもしれない

いと

思って、彼女の後を追う。

「ちょっと、待ってって!」

「死ぬのは嫌あ!嫌ああああ!」

「だから、待てって!行くなって!!」

少女は今、この場から逃げ出したくなった。

だが、皮肉にも海が足に絡んで、いつこうに前に進まない。

彼女は足がもつれて、ヨロヨロとこける。

必死に彼女は言う事を聞かない足で、前に進もうとする。

「死ぬのお・・・!撃たれたら・・・死ぬのお!」

シンは彼女の言葉を聞くと、この少女も戦争の被害者なんだと分かる。

自分と同じだ。彼女もきつと戦争で酷い目にあつたんだ。

シンは唇をかみ締めると、彼女の体を抱き上げた。

「大丈夫!君は、死なない。」

ぴくり、と少女の体が動く。

「君は、君はちゃんと俺が守るから。」

少女のこわばった体からゆっくりと力が抜けていく。

その紅の瞳は嘘ではなさそうだ。やっとシンの顔を見れたと思うと彼女の目から涙がこぼれ落ちていく。

「ごめん。俺が悪かったよ・・・」

少女はシンにすがり付いて、そして思いっきり泣いた。

「大丈夫。もう大丈夫だから・・・君は俺が守るから・・・」

「まも・・・る？」

シンはたどたどしく答える彼女の顔を見た。

全てを任せきっている子犬のような彼女。

今にも壊れそうな命を守った感覚。

シンはそんな彼女を好きになった。

「うん。・・・だから。もう、大丈夫だよ」

少女は両手でシンの手をとり、その感触を確かめる。

暖かくて、優しい手。

彼女の体は次第に彼になついて行く。

「守る・・・？」

シンは微笑んだ。

「うん。守る・・・。」

ディオキアの繁華街で食事を取っている、アウルとルナマリア。

アウル自身、こういう場所に来るのは少ないが、何よりステラのよ  
うな

『妹分』以外の女性と来るのは初めてであった。  
ルナマリアの好みに合わせたのか、二人はパスタ店に入る。  
さっそく、席に座って注文をとる。

注文をとってる間、二人はやつとゆつくり会話を始めた。

「そういえば・・・君の名前、聞いてなかったよね？」

あ、私はルナマリア。ルナマリア・ホークよ」

「僕は、アウル・ニーダ。アウルでいいよ。ニーダって呼ばれんの  
嫌いだし。」

「じゃあ、アウル。・・・私も、ルナでいいよ。」

「ふうん・・・」

二人はしばらく会話を楽しんだ。

家族の事や、年齢。プライベートなど・・・色々。

アウルが身寄りの無い子供だと、彼女は分かった

少しだけ暗くなる。そんな、彼女をアウルは見ると

笑って元気をださせる。

「なーに、暗くなってんだよ？だっせ」

「な、何よ！べ、別にあんたなんか・・・」

彼女は何かを言いそうになったが、そこで注文したパスタが来た。

アウルは、ニコニコしながらパスタを見つめて

フォークを持ち、食べる。

アウルはポリウムがあり、肉がたくさん入っているパスタだった。彼女は驚いた。パスタの量もあるけど、以外にもアウルがテーブルマナーを知っていたのだった。

「あんだ、マナー分かるんだ・・・へえ、以外。」

パスタをチウルチウルと音を立てずに食べているアウル。

ちょうど、ルナマリアが食べ終わる頃にはアウルの皿も空になる。そして、支払いを済ませて店を出た。

二人は適当に繁華街をぶらつく。

すると、近くで銃声が響いた。

何？銃声？

ディオキアは中立の町であるからコーディネーターとナチュラルの争いが絶えない。それぞれの反対派が争いあうのも無理は無い。

ルナマリアは一樣、護身用に持ってきたピストルをバックの中から出す。

（早く、ここから逃げなきゃ・・・）

「アウル、行こ？・・・アウル？」

アウルはニヤニヤと銃声がするほうを見つめていた。そして、彼も懷からピストルを取り出して



「ちょっと、見てくる」

ルナマリアはギョっとした。見に行く？何で？危ないよ。

「駄目！行っちゃ駄目だよ！死んじゃうんだよ！？」

アウルは引かなかった、むしろワクワクしながら走り出す。

一般人を死なせるわけには行かない。それが軍人としての勤め。

ルナマリアは少なからず、そう思う。

アウルの後についていかなければならなかった。

ルナマリアは吹き飛ばされたテーブル破片の後ろに盾を作るように隠れる。

が、そんな慎重な行動をするルナマリアではあったが、ただ一人無謀に突っ込んでいく少年がいた。

アウルだ。

彼女は再びギョっとする。

この子はずいぶんバカなのか？何があるかわからない場所に平気で突っ込むなんて、神経がイカれているのではないか？  
そもそも、何でピストルを持っているのだろうか？

頭の中に疑問が駆け巡っていたが、数十秒立つと銃声が鳴り響いた。  
アウルが仕掛けた。一発、二発。適当に撃つてると思うが  
実は全部、命中している。足や体。正確な射撃だ。

アウルは弾が切れたのか、ルナマリアの方までローリングして戻る。

「ちよい数が多いけど、僕の敵じゃないね」

笑いながらアウルはルナマリアに言った。

アウルは銃弾を装填し終わると、今度は欠けたテーブルの破片を胸を守るようにして

持って、再び突っ込む。

ダダダダ・・

マシンガンの音が鳴り響く。

アウルは一旦、物陰に隠れてマシンガンが撃ち終わるのを確認すると横にローリングしながらパンパン、と連射する。

アウルの得意な撃ち方だ。

しばらくして、アウルとルナマリア以外に銃を持っている人間はいなくなつた。

アウルの出現に、他の奴は逃げ出したのだろう。

ルナマリアが物陰から出てきた。

「あなた・・一体・・何者なの？」

その身体能力、射撃能力。どれをとっても特A級だ。

ザフトでもそこまで出来るは少ないだろう。

シンと互角・・いや、それ以上かもしれない。

とにかく只者じゃないのは確かだ。

アウルは一瞬、ルナマリアの方を見る。

すぐに、ルナマリアの方へものすごいスピードで走り出してルナマリアをかばう様に倒れこむ。

残兵だ。アウルの肩と背中に銃弾がかすめた。

彼はすぐに振り返り、右手に持つピストルで反撃する。

見事に相手の胸に命中して、残兵は倒れこんだ。

「う・・・撃たれたの？」

「かすり傷だよ。気にすんな」

「気にするわよ！！何なのよ一体、あなたは！

急にこんな事に巻き込んで、それでもって鎮圧しちゃって・・・私を助けるために・・・こんな傷まで・・・」

最後まで言い切った時にはルナマリアの瞳に涙が溜まっていた。

「ごめん」

アウルの一言でついにルナマリアが号泣した。  
彼の胸の中で思いつきり泣いた。

回りはもう、夕方だった。二人は公園にいた。  
アウルの背中と肩の傷は、すでに血も止まり、傷もふさがりかかっていた。

すごい回復力だ。

ルナマリアは水のみ場でハンカチを濡らし、アウルの背中と肩に付着した

血を拭く。

「痛！」

「沁みる？それもそうよね。撃たれたのだもの。」

「かつこ悪い・・・」

アウルが呟いた。まさか自分が撃たれるなんて。たとえ、それがどんな形であつても。そんな自分が、かつこ悪いと思つた。

「そんな事無いよ。アウルはカッコよかった。・・・あたしを守ってくれた・・・」

ルナマリアは微笑む。

しばらく、ベンチでボーツと座る二人。数分経つて、アウルが口を開く。

「帰らねえと。」

「そつか・・・」

ルナマリアが黙り込む。

「また・・・会えるかな？」

「分からねー・・・」

ルナマリアはから元気で笑顔になつてアウルに応える。

「今日は楽しかったわ。・・・ありがとう・・・」

精一杯の気持ちだった。

彼女の精一杯の。

アウルにはそれが分かった。

ありがとう。

アウルは二度と忘れられなくなった。

その後、二人は公園を後にし、ルナマリアが手を振って別れた。

また・会えるかな？

彼女の言葉がふと、リピートされる。

アウルは恥ずかしいような気持ちになる。

忘れない。絶対に。

アウルは思った。

アウルは停泊している屋敷に戻ると、血相を掻いた二人がいた。  
彼が戻ってきたのを確認すると

「ステラがいなくなった！」

と一言言って、3人でステラを探しに行く。

ステラは出かける前に何も言っていなかったから手がかりが何も無い。  
3人はステラが行きそうな場所をしらみつぶしに探す。

「ステラの奴・・・どこに行っちゃったんだ・・・！」

ステイングは責任を感じていた。

俺が少し目を離れたばかりに・・・。

3人は崖の上に来ていた。彼等にはわかっていないがここがステラが落ちた場所なのだ。

「まさか・・・落ちたんじゃ・・・？」

クロトが呟く。

ステイングは少し驚く。

「くそっ・・・ステラーーー！！！」

「どこだーーー！！この馬鹿ーーー！！！」

アウルも一緒になって叫ぶ。

もし、ステラが溺れでもして死んだら・・・

いつも一緒になってやってきた、いわば家族みたいなもの。

ステラが居なくなったら・・・

いや、そんなことは考えたくない。

生きている。絶対に生きている。

「他の場所を探そう。」

ジープに乗り込んで、叫びながら探す3人。

すると、ザフト製のジープが3人が乗るジープの前に停車した。

そして、見覚えのある少女が駆け出して、クロトに飛び込んできた。

「ステラ！」

ステイングとアウルはホッと胸をおろす。

そして、ステイングの一声がステラにとんだ。

「馬鹿！勝手に表に出るなってあれほど言っただろうが！  
どうしたんだ・・・？お前・・・？」

そこで黒髪の少年がステイングに事情を説明した。

「海に落ちたんです。俺、ちょうどそばにいて。

ああ、でも良かった。この子のこと全然分からなくて・・・  
どうしようかと思ったんです。」

少年の背後に立っている赤服。間違いないザフト軍人だ。

俺達の事をただの民間人だと思っているらしい。

「そうですか・・・それはすみませんでした。ありがとうございます」

ステイングは自分たちの緊張を抑えながら、ニコヤカにお礼を言う。

「ザフトの方々には色々お世話になって・・・」

皮肉気に喋るステイング。

「何で・・・？」

ステイングの背後でアウルが呟いた。

その声色は何かに絶望したようだった。  
何で・・・？

その目に映るのは、ステラが乗っていたジープの後部座席に乗った  
ハネっ毛で赤いザフト制服に身を包まれた少女だった。

「る・・・な・・・」

だんだんと小さくなっていく声。

アウルにとって、最悪な再会。

まさか・・・ザフトだったなんて。僕たちの敵だなんて。

アウルの存在にルナマリアも気づいて、笑顔をとり戻す。

彼女はアウルの前に来て

「アウル！また会えたね・・・」

アウルは淡々と言う。

「ザフトだったのかよ・・・！」

「えっ？」

アウルは怒りの形相でジープに戻った。

ルナマリアは何が何だか分からなかった。

一方、旧友との出会いに浸る二人が居た。  
クロトとアスラン。



「ザフトに戻ってたのか・・・お前。」

アスランは申し訳なさそうな顔で頷いた。  
今では後悔している。

「すまない・・・でも、仕方が無かったんだ。こうするしか・・・」

「じゃあ、今度は敵どうしで、お前と撃ち合うんだな・・・」

お前を撃つ。

なんて重くて、心にのしかかる言葉なのだろう。

自分自身が悪い。分かってるからこそ、その言葉の重みが分かる。

「シン、行っちゃうの？」

「え？あつ・・・ごめんね」

ステラは酷く悲しげな顔で聞いたので、シンは少し戸惑った。

「でも、ほら。お兄さん達が来ただろ？」

「ん・・・」

「えと・・・また、会えるから・・・きつと・・・」

シンはアスランが乗るジープの後部座席に乗る。  
ジープが走り出すと同時に

「ごめんね、ステラ！また、会えるから！つてか、会いに行く！！」

シンが見えなくなるまで、ずっと路上に立ち尽くしたままの彼女。

「シン・・・」

彼女の頭には彼の顔しか浮かんでいなかった。

クロトはステラの頭をぼん、と手を置いてステラに聞いた。

「あのシンって子が好きなんだろ？ステラ」

ステラが思っている好きは、ネオやステイング達に抱いている好きではなくて

一人の異性としての好き、なのだろう。

「また、会えるといいな」

「うん・・・きつと・・・会えるよね」

## 第七話『鬼さん捕まえた』（ステラ編）

地球軍空母J・P・ジョーンズ

「マジかよ・・・ネオ・・・」

曇った表情のクロト。それに淡々と答えるネオ。

「ああ・・・。軍からの結論は『処分』だそうだ」

クロトは思わず、持っていた紙コップをグシャリと握りつぶす。しばし、その空間に沈黙が出来た。

彼の曇った顔は次第に、悲しみのあふれた顔へと変わっていく。

ロドニア研究所

思えば彼の育った唯一の場所。いわば、故郷のような場所だ。それが壊される。守れなかった自分に、彼は腹が立つ。

「いずれは・・・彼等に伝えないとならないな」

ネオは冷ややかにそう言った。

クロトはコクと首をうなずき、その場を去った。

フリールーム近くの自動販売機。そこに腰掛ける。

彼はうつむきながら事の重大性を考えた。

（あそこにはまだ・・・たくさんの『犠牲者』がいるんだ・・・）

ネオの言葉が胸に突き刺さる。

『処分』

きつと、機密保持のために・・・彼等も・・・

クロトの目から熱いものがこみ上げてくる。

また、守れなかった。

“あいつ”のように・・・守れなかった。

後悔と悲しみの思い。クロトにはそれで一杯だった。

そんな中、突如アラームが鳴り響く。

「何だ！？」

彼はすぐにネオの元へ向かった。

「どうした！？」

クロトが罵声を飛ばす。

連合の士官は困惑した顔で答える

「ステラ・ルーシェが『ガイア』に・・・」

「えっ・・・？」

クロトの目に、怯えきったアウルの姿が入った。

アウルは数人の研究員とネオに囲まれ

一言、「母さん・・しんじやう・・」と言って泣いている。

クロトはまさかと思い、自らもハンガーに向かった。

「何で『ガイア』を出した!？」

「い・・いえ・・ですが・・」

彼は左を向くと、大きな穴が開いたハッチが目に映った。

ビーム系の武器で壊されて、まだ少し熱が残っている。

「クソ・・!俺も出る!『ノワール』は?」

「ま・・まだ修理中でした・・」

ノワールはこの間の戦闘で壊された。

オーブとの同盟でザフトの新型艦“ミネルヴァ”を叩く。

が、予期せぬ別勢力が現れ、その際に“ノワール”を大破させてしまったのだ。

招かれざる客・・“フリーダム”と“アーク・エンジェル”

「ウイングダムを出す!」

黒色に塗られたウイングダム。クロトのパーソナルカラーだ。

すぐにコクピットに座ると慣れた手つきでシステムを立ち上げていく。

ウイングダムの瞳が光ると、壊れたハッチから黒色のウイングダムが飛び出した。

「連合のエクステンデット（強化人間）あなただって・・・知っているでしょ？」

タリアが初めてその単語を口にした。

回りは実験に使われたと思われる、脳や骨格などがずらりと並べられていた。

画面には、ここで『強化』を行われた子供の記録が載っている。記録の中に見覚えのある顔をアスランは見た。

G A T - X 3 7 0 『レイダー』

「クロト？」

彼自身何度も戦った事があるし、何よりも強かったので覚えていた。何度も彼等を苦しめた機体。そして、今では親友のパイロット。

「遺伝子操作を忌み嫌うブルーコスモスが、薬やその他様々な手段を使って

作り上げる生きた兵器。」

タリアは淡白な調子で話し続ける。

「そしてここは、それを作り出す生産施設って事よ」

「ステラ！戻れ！」

“ガイア”は変形してある地点を目指している。

クロトは彼女がどこを目指しているのかはすぐに分かった。

先ほどから無線連絡をしているのに彼女はそれに応えようとしない。

「ステラ！ちっ・・・」

“ガイア”のスピードに“ウインダム”が追いつかない。

着いていくのが精一杯だった。

クロトは齒軋りしながら“ガイア”を追った。

ついに目的地とも言える『ロドニア研究所』まで来てしまった。

目の前には“インパルス”とこの間の戦闘でアスランが搭乗していた赤い機体もある。

クロトは冷や汗が出た。

“ウインダム”じゃ話にならない。

“ガイア”は地を蹴って“インパルス”に向かっていく。

“インパルス”はとっさにシールドを構え、“ガイア”を受け止める。

「うああああ！」

“ガイア”はMS形態に戻して、シールドでなぎ払う形で

“インパルス”を地面に叩きつけようとする。

そして、ビームサーベルを構え、“インパルス”に猛攻を仕掛けた。

“インパルス”もそれに反応し、自らもサーベルを抜き放つ。

二機の機体はサーベルで互いの剣を受け止めあう。

その中、割り込んで来たのは、アスランが乗る“セイバー”だった。  
“セイバー”は両肩に装備されている大型のプラズマ砲『アムフォ  
ルタス』

を構え、“ガイア”に放つ。

“ガイア”はバックステップしそのビームをかわした。

こうなつた以上仕方が無い。

クロトも応戦する。

“ウインダム”の背部のミサイルが2機の機体めがけて発射される。  
そして、シールドで機体を守りながら、“セイバー”に突進する。

“セイバー”はシールドでそれを守るも、密着状態から

“ウインダム”のサーベルを抜き放たれ、シールドを破壊される。

だが、“ウインダム”は背後から迫ってきた“インパルス”には  
対応できず、“インパルス”のサーベルで両腕を切られて  
そのまま地面へと落下する。

「呆気なさすぎるううう!!」

クロトの悲痛な叫び。

シンは次に、“ガイア”に目を向ける。

先にアスランから言われた言葉を脳裏に浮かべて  
サーベルを構える。

「爆散させるな・・・か」

シンは操縦桿を握る手に汗を浮かべて  
一気に“ガイア”に突進する。  
コクピットにサーベルが一閃する。



今の衝撃で、ステラは気を失い、そのまま“ガイア”は地面へと落下していく。

彼は“ガイア”のパイロットの顔を一目見ようと、一閃したコクピットの隙間から、拡大してパイロットの顔をコクピット画面いっぱいに映し出す。

まだ幼さが残る顔の女性。

シンは蒼白な顔で呟いた。

「す・・・てら？」

今まで戦っていた“ガイア”のパイロットがステラ？

嘘だ。嘘だ。嘘であってくれ。

目の前の現実から逃げ出したシン。

だがこれは、事実なのだ。

だって今、俺・・・ステラを殺そうと・・・していた

そんな・・・

シンは額から血が出ている彼女の顔を見ると、  
いてもたってもいられなくなる。

“インパルス”を動かして、“ガイア”の近くまで行くと  
コクピットを開いて、“ガイア”に飛び移る。

すかさず、彼はコクピットハッチの隙間から彼女を出して

“ミネルヴァ”の医療ルームに向かった。

「おい！シン！？」

アスランは呼び戻そうとするが、この黒色の“ウィングダム”のパイロットも

連れて行かなければならないと思った。

タリアに事情を説明して、“ウィンダム”のハッチをこじ開ける。アスランは右手に銃を構えて、“ウィンダム”のパイロットに突きつけた。

彼は驚き戸惑う。

「クロト・・・！」

そこには、血を流して微笑する青年がいた。彼はかすれた声でアスランに話す。

「よう・・・アスラン・・・」

割れたバイザーからクロトの顔が目映るとアスランもシンと同じに行動をとる。

彼の体を担いだ。

「歩けるか？」

「体中が痛え・・・」

彼等は“セイバー”のコクピットに移ると、“ミネルヴァ”の医療ルームへと向かう。

「先生！この子を早くっ！」

軍医とナースは驚いた顔で振り返る。

「一体、何だね？」

軍医はシンが抱いている傷を負った少女の制服に気づいた。

「その軍服・・・連合の・・・！」

「でもケガしてるんですっ！だからっ・・・！」

シンは苛立ちを覚えながら、軍医を急かした。

その苛立ちは、自分の言っている事を聞いてくれず早く行動に移してくれない

軍医にもあるし、シン自身がステラを殺そうとしていたと自分自身の苛立ちもあった。

「だが・・・敵兵の治療など、艦長の許可なしで出来るか！」

「そんなもんはすぐとる！」

シンがついに怒りを爆発させて軍医に罵声した。

「俺からもお願いします・・・」

シンの背後でアスランが言った。

彼が担いでいたのは同じ連合の制服に身を包んだ赤毛の青年だった。アスランは深く頭を下げるが、軍医は聞いてはくれなかった。

「だから早くっ！！死んじやったらどうすんだよ！！！！」

シンの大声のせいか、ステラはハッと目を覚ます。

悲鳴を上げながら、シンに飛びついた。

すさまじい勢いでシンの喉を握る。とっさのことでシンは受身を取れず

勢い良く床に転ぶ。彼女は頭を打ち付けて、彼の喉元から手を離す。

シンはくるしそくに喉を押さえて、咳き込んだ。

彼はクラクラする頭を抑えて、ナースに馬乗りになっているステラを見る。

「やめるんだ、ステラ!!」

シンがあわててステラを引き離すと、ドアが開き

そこから、銃を持った保安要員と、艦長であるタリアが立つ。

状況を見たタリアは「待つて」と保安要員を抑える。

ステラは保安要員を見ると金切り声を上げて、シンの懷で暴れる。

シンは思った。今、ステラを話したら絶対に撃たれる。

彼は必死でステラを『守る』

「ごめんっ！ステラ、俺が悪かった！」

ステラは必死でシンに抵抗するが、彼も必死で彼女を離すまいと体を張る。

彼女をなだめるようにシンが言った。

「もう大丈夫だから・・・落ち着いて!!」

シンは彼女の体を抱き取ると、暴れるのをやめて大人しくなる。

彼はホッとした顔で見上げる。自分を鋭い目で見ているタリアの顔が映った。

「申し訳ありません。」

タリアの厳しい言葉がシンに突き刺さるが後悔はしていない。例え、自分に大きな罰が下ろうと。

とにかく艦長から敵兵の治療許可が下りたので、自分の行った行動に意味はあったと思った。

タリアの厳しい顔はまだ終わらなかった。今度はアスランに目を向けた。

「あなたもよ、アスラン」

大抵の厳罰の事はシンに話したので、アスランには手短な話だった。アスランもシンと同じように敵兵を無断でここにつれてきた。タリアは彼が連れてきた青年を知っていた。

ロドニア研究所のエクステンデットのデータに写っていたGAT370のパイロット。

タリアが彼等に話そうとした瞬間、インターフォンが鳴り彼女の話を通ち切る。そして通信を開いた。

「何？」

呼び出しは医務室からだった。

シンはまさか、と思った。

「わかったわ」

三人は不安に波立つ心を抑えながら医務室へと向かう。  
医務室に入ったシンを迎えたのは、拘束具で包まれた  
愛しいステラの姿だった。

「なっ・・・ステラ！」

シンはあわてて彼女の枕元に顔を寄せる。  
ステラはシンの顔を見上げ、そっと呟いた。

「・・・し・・・ん？」

衰弱しきつた体に鞭をうち、彼女は呟いた。  
先ほどから暗かったシンの顔が、パアッと明るくなると  
シンの目から涙が出てきた。

覚えてくれてたんだ・・・

だが彼女はシンを覚えていたのだが、ここがどこだか分からなくて  
笑顔だった彼女の顔が一気に困惑する。

「ここはっ・・・！！」

彼女は拘束されていることに気がつく

体を思いっきり動かして、拘束具を必死で千切ろうとする。  
ベツトがギシギシと揺れた。

ステラは身をよじり、肌がベルドですれて血が滲み、  
力強く唇を噛むので、血が吹き出る。

「ステラ！大丈夫だよ！ステラ！僕がいるから！！」

ステラはシンの言葉にも反応するが、すぐに元の行動に戻った。  
彼女は子供のように泣き叫ぶ事しか出来なかった。

「ステラ・・・」

軍医がすかさず鎮静剤を注射すると、ステラの体からゆっくりと力が抜けていき  
ついに動くのをやめた。  
彼女の瞳から涙があふれ出てくる。

「シン・・・いやぁ・・・」

ただ、好きな人の名を呼びながら眠りについていった。

ステラの隣で椅子に座り、後ろに手を回し、手錠を掛けられている青年がいる。

「それで、そっちは？」

タリアがアスランに言った。

彼は彼の関係と事情を説明し始めようとする。

「自分で言えるよ・・・アスラン。」

クロトが口を開いた。

「第81独立機動郡“ファントムペイン”所属、クロト・ブエル少

佐であります」

タリアがピクリと体を動かす。

ファントムペイン？この青年が？

「じゃあ、あなたはエクステンデットなの？」

「いえ・・・違いますよ。確かに昔はそうでしたけど・・・」

まるで尋問のような会話が続けられ、アスランの顔が次第に暗くなっていく。

シンもステラを見つめ、ただ彼女が目覚めるのを待っていた。

クロトとタリアの会話が終わる頃には、医療室の外に

ルナマリアとヴィーノ、そしてハイネの姿があった。

タリアはドアから出ると3人とはったり会い、3人は敬礼した。

彼女はため息をつきながら、自らの部屋に戻っていく。

三人は再び部屋をのぞくと、重苦しい雰囲気だった。場違いと思った彼等は

そこを後にした。

「俺はもう自室に戻るが・・・」

「ああ・・・話し相手になってくれて、嬉しかった」

アスランはクロトに言うと、そのまま医療室を後にする。

自室に戻ると、パソコンを動かしてエクステンデットのデータを吸い上げる。

久しぶりに会ったキラと会った時を思い出した。



勝手な事ばかり言って自分の事は何一つ考えてくれなかった。

現実をまるでわかっていない。

クロトも彼の話に共感してくれた。少し嬉しかった。

（キラは・・・綺麗事ばかり言って、話を逸らすからな・・・）

クロトの言った台詞を思い出すと、アスランは笑っていいのかダメなのか

解らない複雑な気持ちになった。

## 第七話『海』（アウル編）

地球連合空母J・Pジョーンズの甲板で困惑した顔のアウルがそこにいた。

大切な者や物を一気に失って空っぽな気持ち。

自分の故郷のロドニア、ロドニアにいる自分の母。

天然でどこかほおってはおけない、お馬鹿なステラ。頼れる兄貴分だったクロト。

彼はただ哀愁にふけ、遠くをぼんやりと見つめている。

彼を癒してくれるのは『昼寝』と『戦闘』くらいだった。

次の睡眠と戦闘の時間を待つ時間が増えた気がした。

「な〜に黄昏てんだよ！」

ステイングだ。緑色の逆毛は彼のヘアースタイルだと決まっている。今日もワックスをつけてご機嫌が良い感じだ。

ニコニコしたステイングの顔を見ると、アウルはいらだった。

（何でこいつは笑っていられるのだろうか）

大切なものを失ったのはこいつとて同じであろう。

でも、何故わらっていられるのだ？

彼はキツとステイングを睨みつけて罵声を飛ばした。

「何でお前はニコニコ笑ってられんだよ！クロトもステラも俺たちの故郷もなくなっちまったんだぞ！」

アウルが罵声したがスティングは驚いた仕草もせず、冷静な態度でそれに答えた。

「嘆いたって戻りはしない。そうだろ？どうせ“あれ”で眠れば何もかも忘れちまうよ……」

スティングが淡々にアウルに言う。

アウルは怖かった。

つながりが出来たから、失うのが怖い。

自分たちが忘れる事は、ステラやクロトの事も忘れてしまうことだ。やっと出来たつながり。言わば家族だったのに……。

アウルは小さく頷き、再び彼と一緒にぼんやりと沈む夕日を見ていた。

夕日を見ていると彼女を思い出すからだ。

数分するとネオ自身が甲板にやってきた。

『睡眠』の時間だそうだ。

二人はしぶしぶ行く。

眠りにつくまえに、ネオにアウルが頼んだ。

「僕は記憶を消したくない……あいつらを忘れたくないんだ……頼むよ……」

頼むよ、と言うところにはアウルの瞳から涙がこみ上げてくる。

アウルはドーム型のカプセルの上でうつ伏せになると

自らが持っていたペンダントを握り締めて眠りにはいる。

ペンダントにはクロト、ステラ、スティング、ネオ

そしてアウルが写っている集合写真が撮られている。  
ファントムペイン結成時の写真だ。  
彼は大事にペンダントを握りしめて眠った。

明日は絶対に彼等が帰ってくることを願って。

目が覚めると、アウルの瞳から一筋の涙が零れていた。  
自分が何故泣いているのか分からなかった。  
隣にはすでに着替えが終わったスティングが立っていて  
彼の涙を見て笑っていた。  
目をこすり、涙をごまかす。

ガラス越しにネオが申し訳なさそうにこちらを見ている事に気づいた。

仮面越しだったが、それはよく分かった。

「何でネオのやつ、こっち見てるのかな？」

「知らねー」

そっけなくスティングは答えた。

彼は上着を着て、その部屋から出て行った。

「本当に良かったんですか？彼等の・・・」

眼鏡をかけた研究員はネオを見ながら言うと、ネオは淡々と答えた。

「邪魔な記憶が効率を下げるわけには悪いだろう。彼らには記憶が無いほうが幸せなんだよ。」

話が終わるころにはネオの声が少しかすれていた。仮面の内側に悲しさを秘めている感じがした。

二人は格納庫に來ると、違和感を覚えた。ステイングの機体、アウルの機体。だが、その後ろには無駄な空きがあった。

「なーんか大事なことを忘れてる気がするんだよねー」

アウルがつぶやく。

ステイングは苦笑しながらそれに答える。

「気のせいだろ・・・つっても、俺も忘れてるような気がする」

「だよな？何だろう・・・」

疑問に思いがら、二人は自分の機体に乗って発信準備が出来るまで待機する。アウルは深く考えた。

何かが欠けている気がしてならない。

いつからこんなに忘れっぽくなってしまったのだろう。

アウルは不思議でしょうがなかった。

オーブ軍と連合軍が“ミネルヴァ”を沈めるために動き始めると二人の出番がようやく回ってきた。

ステイングが乗る『カオス』は空中を指揮して、アウルの『アビス』は水中から攻めることとなった。

「さあて、暴れるぜ・・・！」

アウルの『アビス』は空中をブースターを使い空中にジャンプするとすかさず変形して、水中に飛び込む。

彼はソナーを使い“ミネルヴァ”の居場所を突き止め、そのまま直進する。

さっそく獲物を見つけた。

例の『インパルス』とか言うやつじゃない。『ザク』だ。だが彼にとってはどうでもいい話だ。

「今日の俺は機嫌が悪いんだ！さっさと藻屑にしてやるぜ！」

アウルはMS形態に変形し、赤いザクに猛攻を仕掛ける。

赤色の鮮やかな『ザク』はスラッシュウィザードと呼ばれるバックパックを装備して

近接戦闘に特化した形になっている。

水中戦闘用に改造されているのか、水中での機動力は『アビス』と並んだ。

「早いじゃん！けど勝つのは・・・僕だよ！」

笑みを浮かべながら、背部にマウントされているビーム・ランスを両手に持って相手に斬りつけると、『ザク』もそれに応戦するようにビームアックスを交差させ、互いの得物が中心でスパークを放つ。

『アビス』を後退させ変形して、動きをかく乱させる。

変形した『アビス』のスピードは『ザク』を凌駕していたため、相手は動きに

ついていくことが出来なかった。

ぐるぐると『ザク』の中心を回る『アビス』

ついに、『アビス』は攻撃を開始する。『アビス』の背部のビーム砲と

誘導魚雷が発射され、『ザク』に迫る。

「こんなので、やられる私じゃないんだから！」

(?!・・女?)

無線から女の声が聞こえた。先ほど、得物が交差したときに

接触回線が開いたのであろう。

『ザク』はビームをかわし、誘導魚雷を両肩の誘導魚雷で相殺するとビームアクスは『アビス』の肩を貫き、そのまま上げるように切り裂いた。

今の一撃でアウルは怒りを感じた。

自分がこんなコーディネーター相手に遅れを取った?しかも女に?ふざけるな!

「ちょっとぐらいダメージを与えたからってふざけるんじゃないねえ!

」

『ザク』のコクピットの中でルナマリアの体をピクッと反応させる。聞き覚えのある少年の声。

あの鮮やかなネイビーブルーの髪の毛に、深海のように深い蒼の瞳。

(・・・・アウル?)

あれに、『アビス』に乗っているのがアウル？

この間、シンが撃破した『ガイア』に乗っていたあの女の子とアウルは同じ・・・？

「！？」

ルナマリアが再び前を見ると、『アビス』の姿はもういなかった  
『ザク』のcockpitでアラームが鳴る。

「下！」

気づいたときにはもう遅かった。

『ザク』の左足を『アビス』のビーム・ランスが貫き切り裂いたのだ。

片足をもがれた『ザク』にはもう、『アビス』と並んだ機動力を保つことは出来ず

次に、右腕を切り裂かれ、得物も破壊される。

ただ彼女は『ザク』のcockpit内でひたすらに恐怖を感じるだけだった。

体を強張らせ、体を縮みこませる。

『アビス』がとどめに入り、ビーム・ランスをcockpitに向かって突きたてようとする。

ルナマリアは声を張り上げて叫んだ。

「アウルーーーーー！！」

奇跡は起こった。『ザク』のcockpitは潰されず  
胴体の前で寸止めされている。



「・・・・・・・・ルナ？」

アウルの頭の中でわけの分からない記憶がフラッシュバックする。  
彼女の困った顔や怒った顔。笑った顔や泣いた顔。

「うああ・・・・・・・・うああああ」

アウルは何故自分が『ルナ』と言ったのかが分からなかった。  
思い出せそうで思い出せないもどかしい気持ち。  
頭が割れるような気分。

彼は頭を抱え込み、悪心を我慢する。

次の瞬間、パツと彼女の顔が映りだすと彼は顔を上げた。  
そこには見覚えのある少女の顔があった。

「・・・・・・・・アウル？分かる？私よ、ルナマリアよ・・・・？」

アウルの頭の中を包んでいた暗闇が一気に晴れる。  
そしてアウルは答えた。

「・・・・・・・・分かるよ・・・・」

アウルに笑顔が戻った。

「アウル・・・・」

しばし二人は静止していた。互いの立場や戦闘を忘れ  
互いの存在感だけを感じていた。

モニター越しだったが彼らはお互いの顔を再び見れて再開の喜びを感じ合う。

「僕は・・・ルナの敵だから・・・」

彼はつぶやき、悲しげな表情を見せる。

（アウル駄目！いつちや駄目・・・！）

『アビス』は『ザク』を通り過ぎて“ミネルヴァ”の方へと向かう。そこで通信を彼は強引に切った。でもこれが普通なのだ。お互いの立場は敵同士だからだ。

「アウル・・・」

「いた・・・！」

アウルは『インパルス』を見つけた。

装備を換装して、大型の砲門を二門装備した姿になっている。

小破した『アビス』を操り、右門と胸部のビーム砲を『インパルス』に

発射する。

『インパルス』はそれにいち早く気づき、盾でガードする。

『アビス』は『インパルス』の前に躍り出て、ビーム・ランスで斬り付ける。

「その首・・・今日こそは！！！！」

空中では例の“アークエンジェル”の『フリーダム』と『カオス』の一騎打ちが繰り広げられていた。

『フリーダム』の機体性能の差をスティングは腕でカバーしようと必死だった。

『カオス』の背部のポッド二つを射出し、『フリーダム』を翻弄する。

「こいつ！墮ちろ！」

スティングはポッドを操作しながら自らの頭を今まで以上に回転させる。

何とか突破口は無いのだろうか。スティングはあらゆる点を模索するも

『フリーダム』の動きはスティングのイメージを遥かに超えていて、なかなか『答え』が出せない。

鬼神のような『フリーダム』は『カオス』のポッド二つをビームライフルで打ち落とした。

「ちっ！」

舌打ちをするスティング。

「まだ負けちゃいねえ！」

彼は腰部のサーベルを構え、『フリーダム』に攻撃を仕掛ける。しかし真正面からは無謀だった。『フリーダム』はそれに反応して

サーベルを構え、カウンターしたのだ。

案の定、『カオス』の左腕と頭部は破壊された。

「くそぉー!!」

そのまま真下に『カオス』は落下していった。

「その首・・・今日こそは!!!!」

目の前に躍り出た『アビス』を見てシンは毒づいた

「そんなボロボロの機体で何を!!」

『インパルス』の頭部と胸部のバルカン砲『CIWS』が起動して  
『アビス』の頭部と左腕の装甲を貫いた。

「うわぁぁぁ!」

後方に下がる『アビス』。シンは今だ、と思い  
自らの得物を思い切り『アビス』めがけて投げつけた。

『アビス』の頭部に吸い込まれるように槍は貫いた。

『アビス』の頭部が爆発して、フラフラと水中に落下する『アビス』  
爆発の影響でコクピット内部は至る所にスパークしていた。  
先の水中での戦いで『アビス』の電力は少なく、『インパルス』の  
バルカン砲を受けた時には、既にPS装甲が切れていたのだ。  
不運が重なり、アウルの体を痛めつける。

「死ぬのかな・・・こんな所で・・・」

アウルは泣き言をこぼした。

せつかくルナと会えたのに、記憶が戻ったのに・・・

そして、吸い込まれるように水中に沈んでいく。

その時、誰かが自分を抱きかかえる感じがしたのだ。

「カオス・・・？」

微かに見えた緑色の機体。

ステイングの奴だ。

こいつもボロボロじゃないか。

彼は痛みのショックが強く、気絶した。

間一髪のところだったかもしれない。

幸運にも沈みかけた『アビス』の上空を『カオス』が落下していたのだ。

近くに『インパルス』の姿もあったが、先の『フリーダム』と戦闘を始め

こちらには気づいていなかった。

そして『カオス』は変形して『アビス』を抱き上げると、そのまま母艦に

向かう。

「俺たちの完敗だ・・・」

大破した灰色の『アビス』を見て、ステイニングが悔しそうに言った。

## 第八話『願い』

彼女が再び目が覚めたときは、明るい部屋だった。

目を開けると、明るい天井が見える。

体中に違和感を感じる。呼吸がしづらい。

定期的に聞こえる機会音は彼女の耳に障った。

全身に力が入りにくい事がわかると、苦しさを覚えた。

思うように動かず、筋肉を動かそうとしても力が抜けていく感覚。要するに、嫌な気分だ。

「まったく、どうかしているよ」

誰か男の人の声が聞こえる。知らない声だ。

彼女は首をかしげると、白衣を着た中年の男が見えた。

誰と話しているかは知らないが、デスクに向かって執拗に話す。

「・・・この二人を生きたまま本国に移送するなんて」

（い・・・そう？）

「議長は何をお考えなのか知らないが、早くここから離れたいよ」

入り口の扉が開く。

黒髪に紅色の瞳をした少年。

彼女は彼の姿を見ると安心した。

先に行っていた医師の言葉が彼女を緊張させたからだ。

「シン・・・怖い・・・」

彼女は体をこわばらせ、震える。

この場所は怖い。安心できない場所。

彼女自身、身も心も限界にあった。

「大丈夫、俺がいるから安心して」

シンは微笑んで、ステラを安心させる。

彼は彼女の震えている手を握って暖めるような仕草をすると

彼女の震えは次第に落ち着き始めた。

やつれた顔に頭部に巻いた包帯が痛々しい。

シンは隣で拘束されている赤毛の青年を見て思いだす。

（ステラは、ある一定の期間に特別な処置を行わないと生きていけない。）

シンはこの事を聞いていてもたってもいらなかった。

すぐにここからステラを出したい。けど、そんな事をすれば重罪だ。

彼は迷いを見せる。

「ステラ・・・」

眠りに落ちた彼女。

シンは決意した。

（俺が守るんだ。死なせない）

拳を握りしめながら彼は部屋を出て行くこととする。



シンはいつの間にか、アスランの部屋の前にいた。

彼がその時何を思っていたか

察しているとおりのことだった。

硬い形相でアスランの部屋の扉を開けると

そこにはやはり彼がいた。

「どうした？シン」

「俺・・・俺は・・・」

泣きそうな顔のシン。アスランには理由がまったくわからない。

どうしてこの少年は泣きそうなのだろうか。

悩み事がありそうな顔だった。

シンはそれから何も言わず、部屋から走って出て行った。

その時、どうして彼の気持ちをわかってやれなかったのかと思うとやるせない。彼はシンの後を追った。

追った先には思っていた事が起きていた。

起きて欲しくなかった事が。

目の前に気絶した女医が倒れている。

「シン・・・お前？」

シンはクロトの縄と手錠をはずしている最中だった。

アスランが入ってきた時、一瞬こちらを見たがすぐに首を戻した。

「死なせたくないから返すんだ・・・！」

シンはクロトに話した。

彼がこの強化人間の少女にそんな思いで接していたことをなぜ気づかなかったんだろう

アスランはどうすればいいかわからなかったが

すぐにクロトが困惑した顔のアスランにアドバイスした。

「自分が思った行動をとることは・・・時にはよい選択だと思うぜ」

（自分が思った行動・・・？）

シンは彼女のベットを動かして走るように廊下を駆け抜ける。  
クロトもアスランもそれに続く。

走りながらシンは彼女にささやくように言った。

「言っただろ？俺はステラを守るって・・・」

「シン・・・」

格納庫まで着くとすでに警報音が鳴り  
銃を構えた兵士が待っていた。

「何をしている、とまれ！」

3人は困惑するが、数人の兵士の後ろから何者かが  
奇襲した。

兵士は一瞬油断して、後ろを狙う。

ブロンドの長い髪の毛、大人びた雰囲気のある少年。  
レイだった。

シンもレイが続いて兵士を殴り倒す。

コーディネーターの動きに反応できず、そのまま気絶していく兵士たち。

だが、生き残った兵士が銃口を向ける。

銃口を向けた先はクロトだった。

それにいち早く気づいたアスランはすぐに走り出し

兵士の銃を蹴り飛ばして、踏みつけ気絶させた。

そしてコアスプレnderに乗るためエレベーターに乗ろうとする。

閉まる直前、レイがエレベーターのドアをとめる。

「返すのか？」

その質問に迷いもなくシンは答えた。

「このままじゃ、死んでしまう！そんなのは俺、嫌だ！」

レイは少し間を空けて再び質問した。

「お前は・・・きつと戻ってくるな？」

シンはアスランを見る。そして答えた。

「ああ・・・！必ず戻ってくる」

レイは「そうか」と短く答えた。

アスランは困惑した顔でクロトを見やった

彼の悲痛な顔は察知できたクロトは小さく微笑む。

「全部捨てて・・・戻って来いよ」

クロトは何も言わなかったが、アスランにはそう言っているように聞こえた。そしてエレベーターのドアが閉まる。

アスランとレイはすぐに管制室に向かい、コアスプレnderの発信を急がせる。

扉から兵士の声やざわつきが聞こえるが、レイは気にしなかった。

「いいぞ。」

“ミネルヴァ”から大空へ向かうハッチが開き始める。

そして、コアスプレnderは羽ばたき優雅に空を舞う。

さらに、ヘッドフライヤー、レッグフライヤーが発射され空中で“インパルス”へと合体する。

ある程度、進むとシンはあらかじめ用意しておいた

“ガイア”の識別コードを入力して連合に入電する。

シンはマイクに話した。

「ネオへ・・・ステラが待っている。」

数回、その作業を繰り返した後、眠っているステラを起こして外を見た。

外は夕日が輝き白い雲を夕日色に染めあげる。

ステラは目を大きく開けてうっとりとした見上げた。

「きれい・・・」

彼女は初めて夕日を見たわけではなかったが

彼と、好きな異性と一緒に見るのはこれが初めてだった。

“インパルス”は小さな孤島に止まる。  
島には白色の機体があった。

形状は“インパルス”に似ている。

それは前大戦使われた伝説の機体。

“ストライク”だ。

その下に、例の『ネオ』と呼ぶ人物が立っていた。

シンは彼の方までステラを連れて行く。

（こいつが、ネオ・・・？）

何を考えているかわからない。

仮面をつけているから表情さもわからない。

「あんたが・・・ネオ・・・？」

「まったく、大胆なことをしてくれるね。坊主君」

シンはむっとした。『坊主君』とは自分のことだろうか  
彼はキツとにらみつける。

「度胸のいい少年は嫌いではない。むしろ好きなほうだ」

その言葉がシンに親交があるとわかった。

シンはネオに近づき、ステラを渡すと

ひとつ約束事を言った。

「約束してくれ、ステラを・・・二度と戦争とか！戦いとか！  
そんな世界から開放するって！！」

ネオは少年の瞳から涙がこみ上げてくるのがわかると  
つばを飲み込む。

（そうか・・・彼がステラの・・・）

「約束・・・する・・・必ず」

そして、ネオは後ろに振り返り愛機のコクピットに向かう。  
ステラはシンが遠くなっていく事がわかって悲しそうな顔した。

シンも彼女の顔が遠くなっていくにつれ泣きそうになるがそれを我慢した。

抑えきれない衝動。もっと話したかった。もっと一緒にいたかった。  
俺のステラ・・・。

「シン！一緒に来い！」

シンは後ろを振り向く。

「俺たちと一緒にやっていこうぜ！」

シンは本当に敵なのか分からなくなってしまった。

なぜ、敵の自分に対してこんなにも優しく声をかけられるのだろうか？

シンの気持ちが揺らいだ。

一緒に行けば元気なステラと一緒にいられる。

信頼してくれるクロトもいる。

でも・・・

不意にレイの言った言葉を思い出す

「お前は・・・きつと戻ってくるな?」

あそこには『仲間』がいる。

守りたい『仲間』や『艦』がある。

だからいけない!

「俺は・・・行けません!俺にはまだ、守るものがありますから!」

シンは走りだし、“インパルス”のコクピットに座るとすぐに機体を動かして“ミネルヴァ”へと帰還する。  
ただ瞳からこぼれる涙だけは止められなかった。

「いい目をした坊主だったな。名前はなんて言うんだ?」

「確か・・・シン。シン・アスカだったかな」

ネオは遠くを見つめ、黒髪の少年を思い出す。  
まっすぐな目をした勝気な少年。

「シン・・・アスカ・・・か・・・」

## 第九話『梅干』

「医療班は速やかに負傷したパイロットの治療を・・・」

艦の中でアナウンスが流れる。

台車の上で、呼吸器や心拍数を示す機器をつけてぐったりしている  
アウルがいた。

体には無数の包帯を巻いていて、目では見えないが包帯の下は  
たくさん傷が出来て、出血をしていた。

多量の血液が流れ、彼の意識はほとんど無かった。

その光景を痛々しく、スティングは見ていた。

自分もやられ、アウルもやられ。

お互い、苦汁をなめた。

先の戦いで急に出現したあの白い機体、『フリーダム』

彼は手も足も出なかった。

スティングは悔しくてたまらなかった。

その事を思い出すと彼は、壁に向かって拳を突き立てる。

鈍い音が伝わった。

彼は静かにその場を去って行った。

あの戦いから数日経った。

アウルとスティングは自室でトランプで遊んでいた。  
ポーカードだ。



もちろん勝っているのはステイング。

アウルは先ほどから彼に、何回も負けて腹が立っていた。

しかしこの回、初めてアウルがほくそ笑んだ。

手札の役は『フルハウス』だった。

これならステイングに勝てる。

アウルの手札のクイーンが、彼に初めて微笑んだ。

しかし、ステイングはそれをさらに上回った。

彼は『フォー・カード』で勝負をしかけてきたのだ。

見事にアウルは彼女に裏切られ、再び彼に苦汁をなめさせられる。だが、アウルは変なことに気がついた。

彼の手札をよく見ると、自分の手札と同じカードが一枚、入っているではないか。

「スピードの12・・・!!」

アウルはすぐに彼がイカサマをしていることに気づくとステイングに飛び掛った。

「てめえ！こんなずるい勝ち方して楽しいかよ！！！」

ステイングは笑いながら謝った。

と、後ろでドアがプシューと音を立てて開いた。

二人は振り向くと、そこには見覚えのある青年の顔と少しやつれたブロンド髪の少女が立っている。

「クロト、ステラ！」

アウルが思い切り立ち上がり、歓声の音が部屋に轟く。

しかし、ステイングだけは彼等が誰なのか全く分からなかった。

「誰だ・・・あんたら？」

クロトは状況をすぐに把握して、

「俺はクロト、こっちはステラだ」

簡単な自己紹介をした。ステイングは今までの記憶が『無い』のだ。ステイングは二人の手をとり軽く握手をして、部屋を出て行った。

「ステイング・・・」

ステラは悲しげに彼の名前を発した。

彼は妹分であったステラさえ忘れてしまった。

どこか見たことのある少女。

誰だっけ？

忘れた。

ステラ。

知らない・・・？

いや・・・知ってる？

また・・・『あいつら』に記憶を消された。

知ってるんだ・・・いや、知ってたんだ。

あの子を、そしてあの青年を。

「俺は・・・どうなっちまったんだ・・・」

ただぼんやり、あの三人を頭に浮かべた。

「また・・・楽しいことになりそうだ。」

食事の時間になって4人は食堂にいた。

「今日のおかずは何かな」

アウルがウキウキとした気分でおぼんを持って回る。

ステラはぼーっと立って食べ物を取ろうとしないのでしかたがないと思ったのか、ステイングが彼女の分も回った。

「はいよ」

ステイングは彼女の前にトレイを置くと、彼女は笑顔で笑った。

「ありがと・・・ステイング」

（何か昔もこんなことがあった気がする）

「ステラ・・・ブロッコリー・・・嫌い」

ステラがブロッコリーを一生懸命、端に寄せる。  
ステイングはそれを見て、無意識にステラに言った。

「ちゃんとブロッコリー食べる！ステラ！」

「うえーい・・・」

元気なさそうに彼女はブロッコリーを口に寄せ、そのまま放り込みあまり噛まず、一気に水で流し込んだ。

（何で今・・・こいつに言っただろう・・・？）

彼の脳裏に記憶の断片がよぎる。

お馬鹿なステラにナプキンで前掛けを作った記憶。

お馬鹿なステラがいなくなった記憶。

お馬鹿なステラがコーディーネーターの野郎に惚れた記憶。

（何なんだよこれは！？）

今までずっと二人でやってきたじゃないか。

アウルと俺の二人で・・・。

なのになんで・・・？

「ステイングー！！」

アウルの罵声にハッと我に返る。

「何ぼっーとしてんだよ！ボケ！」

「あ・・・ああ」

クロトがアウルに続いて彼を馬鹿にする。

「こいつのをお猿さんって言っんじゃない?」

(お・お猿さん?何言ってるんだこいつ?)

「ほら、早くこれ食べてよ!いつもスティングの仕事だろ!」

「あ?」

(そうだ!俺はいつも残飯処理をやらされてたんだ。こいつらに!)

スティングは3人のお皿に残された食べ物をみて身震いした。

彼がもつとも嫌いな食べ物。

何故、地球上にこんなものがあるのか?疑問に思うほどその食べ物は彼は嫌いだった。

「い・嫌だ!」

アウルがニヤニヤしながらスティングにじりじりと迫る。

「何言ってるんだよ。スティング、好きだろ。これ」

クロトも言う。

「そうだそうだ。いつも『最高』とかいいながら食べてただろう」

拳句の果てにはステラまでもがスティングに言った。

「スティング、これ美味しいって、パクパク、食べてた」

スティングには3人の微笑が、悪魔の微笑みに見えた。

それが刺さったフォークが彼の口に迫り、彼は涙目になっていく。そして、『それ』はついに口の中に入った。

「梅干は嫌だあああああ！！！！」

干した梅はそのまま彼の体内に入る。

強烈な酸っぱさが彼の口内を破壊し、喉も焼かれた。

彼はそのまま、後ろに大きく仰け反って

大きな音を立てて倒れた。

口からは泡を吹き、白目をむいて、涙も出ていた。

すぐに医療班が来て、スティングを運んでいった。

彼等三人は少し、やりすぎたと反省し食堂を後にした。

そして、スティングはその日、三人の事を全て思い出した。

## 第九話『梅干』（後書き）

アホな小説で本当に申し訳ありません。

シリアスも糞も無いですね。

内容的は金色のガッシュ で清 がアンサーターカーの能力をバ  
カな夢を見て失う・といった感じであります。

## 第十話『ベルリン』

辺り一面の雪景色。

白い雪が激しい雨のように降る。

現在、クロト達5人は新たな命令を受け、ロシアに向かっていた。

「けっ・・・まったく、今度はえらく辺鄙な所へ連れてきてくれたじやねえか」

白い息を吐きながら吐き捨てたのはステイングだった。

「しょーがないよ。これも命令だし」

軽口をたたくアウルに、ステイングはため息をついた。  
体を擦るような仕草を見せる彼は、どうやら寒いのが苦手らしい。

「わー！ステイング、クロト！外、真っ白だよ！」

ニコニコしながらステラは戦艦『ボナパルト』の窓をのぞく。  
彼女に呼ばれ二人も、揃って彼女に続いて窓をのぞいた。

「って俺は？！呼べよー！」

アウルも遅れて窓をのぞいた。

雪は、まるで踊るようにふわりふわりと舞う。

その景色は今までとは違った雰囲気をもたらした。  
神秘的だった。

「なんつうか、不思議な感じがするよなー。」



アウルが感想を述べる。

「んじゃ、俺はネオの所行ってくるわ」

クロトは廊下を曲がり、ネオがいる場所へと向かった。

「まーた、ジブリールのおっさんの奴に言われたねえ・・・」

クロトは下を向いてため息をつく

ネオは、皮肉気に笑って彼の肩をポン、とたたいた。

「ま、あの『ミネルヴァ』を何度も逃してるのは事実だしなあ。」

「『アーク・エンジェル』も出てきて散々だしね。」

今まで、何度も『ミネルヴァ』を追いつめているのに  
何故、落とすことが出来ないのだろう。

ザフトの奴らの底力も舐めたものではない。

そして不確定要素の『アーク・エンジェル』。

奴らの動向も探りたいところだ。

「なあ、ネオ。俺の新しい機体って・・・何のことだ？」

ネオは少し間をおいて、クロトに返した。

「今までの戦闘の結果を見て、『ノワール』だと機体が思うように動かなかったはずだ。」

「ああ。『ノワール』が俺の反応速度についていけないし、どうしようと思っていた所だったんだ。正直」

いつの間にか、二人は『ボナパルト』の格納庫の扉の前に足を止めた。

二人は中に入ると、そこには妙に黒光りした巨大なMAとMSが目の前にあった。

「こいつは・・・！」

ネオは少し冷めた声で機体について話し始める。

「G F A S - X 1『デストロイ』戦略装脚兵装要塞と言われるほどのバケモノだ。」

「バケモノ・・・！」

クロトは少し驚いた様子を見せるが、再び『デストロイ』を見上げた。

「まさか・・・ネオ・・・。こいつで『ベルリン』を？」

彼は冷淡になって、クロトに頷いた。

「大量虐殺兵器じゃねえか・・・こんなの！」

ガツとネオの襟首を強く掴み罵声を飛ばすクロト。

彼も真の平和を望むもの、こんなバケモノでベルリンの町を焼き払うの

あまりにも残虐だ。

「お前の気持ちも分かる！」

クロトの手を思いきり振りほどいて、乱れた服を直す。  
そして、冷淡にクロトに言った。

「これも任務なんだ・・・役割を果たせ。」

クロトは舌打ちをして、もう一方の機体を見上げた。  
彼は目を大きくした。

見覚えのある機体。PS装甲の電力が供給してないから暗灰色であるが

その機体の風格が伝わってきた。

ガンダムタイプの頭に、両腰に装着されているサーベルとレールガン。

翼が生えたその機体はまさしく

「フリーダム・・・！」

「そう！」

これが彼の新しい機体なのだ。全大戦で最強、最凶と呼ばれた機体はまさしく今の彼にはふさわしい機体であろう。

「GAT-X410A『ブリュナーク』。条約違反ではあるが、核エンジン搭載型MSだ。

『フリーダム』の性能とほとんど大差無い。」

「すげえ・・・！」

ネオは彼の輝かせた目がまるで、新しい玩具をもらった子供のように微笑した。

「気に入ってくれたかな？」

「ああ！それにしても、よく『フリーダム』のデータなんか取れたよな？」

「ま、お偉いさん達が何をしているかは知らないけどな・・・」

彼は二つの機体を見ながら、クロトに囁くような小さな声で言った。

「これがステラの新しい機体だよ」

ネオは優しく、ステラに言い放った。

彼女はこの巨大な機体を少し不気味に思う。

「これが・・・ステラの？」

「ステラもこれでまた・・・戦わないとな・・・」

ネオの台詞に、クロトは不安気な顔でステラの意気揚々の顔をのぞいた。

本当は彼女にはもう戦って欲しいと思ってもらえなかったし、それにあのザフトのエース、シン・アスカとの約束も破ってしまったとも思った。

彼があんな危険な事を犯してまで、彼女を助けたのに、それに対して自分達はまた、この少女を兵器として扱う。

「でも・・・シンは、シンは戦っちゃ駄目だって・・・言ってたよ・・・」

ステラはネオの顔を不思議そうに見ながら、そう言った。彼は申し訳なさそうに、下を向いて、ステラに話した。

「戦わないと、また敵が来て私達を殺す・・・」

殺す・・・そう彼は言った。

その言葉に反応したステラは、不安につぶやいた。

「こ・ろ・す・・・ステラも？」

「そう・・・私も、クロトも、アウルも、ステイングもだ・・・」

「駄目・・・！死ぬのは・・・駄目！！」

泣きそうになったステラの頬を優しくなでるように触るネオ。そして、笑った顔をしてステラを落ち着かせる。

「なら・・・戦わないとな。心配するな。私達を守るよ。」

「ま・・・も・・・る・・・」

あどけなく彼女はつぶやくと、その言葉でシン・アスカと過ごした時間を思い出す。彼女の嫌いな瞳をしているのに、彼女を守る、といった。

その真剣なまなざしに彼女は甘え、安らぎを覚えたのだ。ネオも同じだと彼女は思い、黙って頷いた。

ついに発信準備が整い、四機のMSと一機のMAは低いうなり声をあげながら

雪上を進んでいく。

『ストライク』に乗るネオに、スティングは不満そうな顔で通信を入れた。

「何で“アレ”俺にくれなかったんだ？」

“アレ”とはステラが乗る“化け物”の事だろうか。

スティングは少なからず彼女のことを心配しているのだろうか？

それとも純粹にあの機体が欲しかったのか。

何にせよ、ネオは淡々とその質問に答えた。

「適正なんだ・・・！ステラのほうが効率が良いと・・・データ上でな！」

「けどよ・・・ステラはさっきまで瀕死だったんだぜ！」

それ以上、ネオは言葉を交わさなかった。

ステイングは彼女のことを少なからず心配しているみたいだ。

『デストロイ』を護衛するかのように上下左右に4機のMSがついた。

左右には『ストライク』と『カオス』。後ろにはアウルの『アビス』前には新型の黒と白に分けられた『ブリュナーク』。

だが、『ブリュナーク』は背部に装備されている羽型のブースターを起動させ

一気にベルリンの都市まで駆け抜ける。

「すげえ早さだ！これが『フリーダム』かよ！通りで『レイダー』が勝てないわけだ」

2年前の大戦の断片を思い出すクロト。

単機で『フリーダム』に挑んでいた頃が懐かしと思う。

ベルリンに到着すると、生活を営んでいる人々がそこにいた。

これから戦闘など起こるはずも無いと思わせるような平和そうな街。

『ブリュナーク』の機体がベルリンの街の上空に現れるのが分かった住民はギョツとした顔で『ブリュナーク』を見つめた。

<これより5分後、ここは火の海と化す！市民は出来るだけ遠くに逃げろ！

これは脅しじゃない！>

クロトは通信を切って街の住民が逃げていくのを確認して、『デストロイ』の到着

を待った。

数秒たつと、多数のザフトMSが『ブリュナーク』に攻撃をしかけてくる。

「『バクウ』タイプ4、『ジン』タイプ3、『シグー』タイプ2」

どれもこれも近接戦を重視した格闘タイプらしく、『ジン』、『シグー』に

おいては対艦刀に酷似した大剣を装備している。

「対デストロイ戦を想定した機体・・・か！」

クロトは唇を軽くなめる。

「遊びにはちょうどいい・・・新型の性能を試すかね・・・！」

『ブリユナーク』は複数の機体に飛び込んでいく。

『ジン』の攻撃をかくぐり、懷に飛び込んで両足に装備しているアーマーシュナイダーと呼ばれるコンバットナイフを頭部に突き立てて、再起不能にする。

残りの一機の『ジン』も腰部にマウントしてあるビームライフルで両腕を撃ち落とし、落下させる。

「すげえ・・・！」

自らの機体の性能に舌を巻く。

『バクウ』が地を蹴り上げ、頭部の口に装備されているサーベルを抜き放つと

そのまま『ブリユナーク』に向かって突進する。

『ブリユナーク』はもう一方の手でもう一本のサーベルを抜いて、左の手、右の手の順番で『バクウ』の両腕両足を切り裂く。

次に三機の『バクウ』が最初の『バクウ』が落ちると同時に四方から『ブリユナーク』を襲うが、逆に返り討ちする。



ついに2機の『シグー』がコンビネーションを組んで『ブリュナーク』に  
対艦刀を突き刺そうとするが、『ブリュナーク』はすばやくビーム  
ライフルに手を  
伸ばして、装備を換え、『シグー』の対艦刀を持っている腕に撃つ。  
あまりにも素早い攻撃に、一機の『シグー』は右腕を無残に破壊さ  
れ、  
慣性の方向に落下する。  
しかし、もう一機はかわして、『ブリュナーク』にそれを振り下ろ  
した。

「あぶねえよ！」

シールドで攻撃を防ぎ、ビームライフルで両足を破壊して、落下す  
る『シグー』  
わずか3分弱で9機のMSを撃破した。

「昔は17秒でMSを3機も落としたのになー・・・。」

5分丁度に『デストロイ』は街に到着した。  
到着した頃には住民は既にシェルターに避難した所だった。

「クロト・・・まさかお前・・・！」

「ジブリールのオッサンに言われたことは一つ。都市を破壊しろだ。  
住民を殺せまで言われていないってね」

「・・・後でジブリール氏に何を言われても知らんからな！」

ネオが笑うと、5機の機体はベルリンの都市を破壊する。

『デストロイ』の蟹のような甲羅に装備された四門の砲門から強烈なビームが発射する。そして、半回転させ周辺のビルを一気に焼き払う。

『デストロイ』が来て数十秒で街は壊滅状態に陥る。街を守るように、ザフトのMSが『デストロイ』向かっていくが『カオス』と『アビス』の攻撃で届かず、散っていった。

「はぁあああああ！」

ステラが声をあげると同時に、ビームを発射する。

「はぁ・・・はぁ・・・」

怖いもの・・・コワイモノ・・・怖いもの皆・・・壊す！  
壊さなきゃ、死んじゃう・・・死んじゃうの！

「あれは・・・！」

ネオがリーダーを見て息を呑む。

「大型艦の接近を確認、二つだ！『AA』と『ミネルヴァ』！」

『ミネルヴァ』は『デストロイ』を確認すると、『ミネルヴァ』に積まれている

最高の威力を誇る砲門を起動させる。タンホイザーだ。

肉眼でエネルギーが収束されるのが見えると、次の瞬間それは一気に解き放たれ

『デストロイ』に発射された。

だが、『デストロイ』に直撃はせず、『デストロイ』の手前で弾かれた。

『デストロイ』が攻撃されてきたほうに砲身の狙いを定めると、今度は上空から

ビームが一発撃たれた。

白い天使の守護神、『フリーダム』だ。

「あれは！気おつけるステラ！そいつはフリーダムだ！手ごわいぞ！」

ネオが彼女に言い放つ。

「何だ・・・！お前はああああ！！！」

『フリーダム』は瞬時に『デストロイ』のリフレクターの特性を理解したかのように

ビームサーベルを抜き放つ。

クロトはすぐにそれに気づいて、『フリーダム』をとめる。

「止めるお！！！」

『フリーダム』と『ブリュナーク』はお互いの盾で体当たりし、しのぎあう。

「『フリーダム』？これは・・・！」

『フリーダム』のパイロットであるキラは自分と酷似した機体を見て驚いた。

「ここは一旦引け！キラ！」

「クロト?!」

（あの黒い機体に乗っているのはクロト？）

『ブリュナーク』は思い切り盾を弾いて距離を置く。

離れ際に『フリーダム』に胸部に内蔵されているマシンキャノンを連射して視界を弾の雨で一瞬だけ奪う。

クロトはその一瞬を見逃さず、『フリーダム』の胸部に思い切り蹴りをいれ、『フリーダム』を後方へと飛ばした。

「『フリーダム』！」

『フリーダム』をにらみつけたのはステイングだった。

「てめえは・・・俺が!!」

恨みを込めた台詞を吐くと背部のドラグーンを2個飛ばして『フリーダム』を攻める。

キラはこのパイロットが以前よりも格段に成長しているのが分かった。

「ドラグーンの配置が上手だ・・・常に死角を取ってる！」

ステイングが『フリーダム』の戦闘シミュレーションを念入りにやっていたの

は確かだ。『フリーダム』のような高性能MSに対抗するには

『カオス』の特色であるこのドラグーン・システムをフルに使った攻撃を

しなければいけない。だからステイングは、ネオにドラグーンの使い方を

学び、空間間知能力を育んだのだ。

「あのポイント”に入れば・・・！」

『カオス』を限界まで動かし、『フリーダム』を徐々に圧倒していく。

「入った！！！」

『カオス』が誘導したのは、背後に動けなくなる場所、つまり背後にビルがあるポイントだ。

『フリーダム』の背後にはビルが立ちばかり、背後には移動できない。

「止めだ！！！」

ステイングは内心、歓喜の声をあげてトリガーを引いた。

ドラグーンと『カオス』のビームライフルの砲門が火を吹き

三つのビームは『フリーダム』に集中した。

だが、『フリーダム』はその上を行った。

ビームが収束する瞬間を狙い、その一点を盾で防いだのだ。

「何！」

ステイングの悲痛な声を上げる間もなく、キラの容赦ない攻撃が

『カオス』を打ちのめした。

サーベルで両腕を斬られ、落下していった。



## 第十話『ベルリン』（後書き）

スティングは自前の頭（IQ180上）を駆使して戦っていますが、キラの前では無謀に終わってしまいました。彼はこの戦闘の後、一気にその能力を開花させる・・・予定です。

## 第十一話『ステラ』

「くそ・・・！やらせはせん！！」

『フリーダム』に迫るネオ。

こんな所でステラを落とさせるわけには行かない・・・！

そのとき、彼の死角を突いて『ストライク』に迫るMSがいた。

青と白と赤のその色はまっすぐに『ストライク』の背後を捉えていた。

「あれは・・・！」

『インパルス』・・・あの時の坊主。

ネオは愕然として、『フリーダム』をおいて『インパルス』身を返す。

「止める坊主！」

ネオは叫びながら『インパルス』に飛び込む。

互いに盾で押し合いながら『インパルス』に搭乗しているシンはネオに叫んだ。

「くそ！どうして約束を破った！！」

「何！？」

ネオはシンが既に『デストロイ』にステラが乗っていることを知っているようだ。



「分かるのか?!」

それ以上、シンは答えようとはしなかった。

ネオは盾をゆつくりと戻すと、『インパルス』はフラフラと『デストロイ』に向かっていく。

（そうか、お前も俺と同じように・・・）

ネオと同じような人間。しかも、“血のつながり”が無くてもしっかりそれは“わかる”のだ。

鋭い勘でもなければエスパーでもない。

そこに誰がいるのかも、何をしようとするのかも分かる。誰かがいる感覚。

「やらせねえええ!!」

ネイビーブルーの『アビス』は『デストロイ』に近づく『インパルス』にビームランスを突き立てる。

「五月蠅い!!」

シンは吐きすてると、『インパルス』のバーニアペダルをベツタリと踏み、

バーニアを全開にして『アビス』に突撃すると、『アビス』の両足を切断し、一閃した。

青髪の少年が乗っているとすぐに感じ取ったから、彼がステラの仲間と分かった。

コクピットをはずしたのは彼なりの配慮なのだろう。

「うあああああー!!」

アウルが悲鳴を上げて、落下していく。

俺がステラを返したから・・・？

全部、自分のせいだ・・・!

俺がステラを返さなかったらこんな事にはならなかったんだ!

ふと、彼の脳裏にあるイメージが浮かんだ。

それは突然の出来事だった。

コクピットの中で悲鳴をあげる少女。

まさしくその姿は、ステラだった。

「ステラが泣いている・・・!」

そのとき、『デストロイ』は蟹のような形状から変形を始める。

人間型になったそれは、『インパルス』の有に3倍はある大きさで頭部は人間の目を連想させるかのようなカメラアイを持っている。

「ガンダム・・・!」

変形した『デストロイ』に『フリーダム』が迫っていた。

シンは齒軋りしながら『フリーダム』を追撃する。

(何も知らないくせに・・・!いつもでしゃばって!)

シンは『フリーダム』にビームライフルを放ち、『デストロイ』に近づけさせないようけん制する。

だが、決して『フリーダム』に攻撃しようとしているわけではない。

立場は違うが、同じ意思の元で戦っているからだ。

「あんたは下がってればいいんだ！」

シンは『フリーダム』に乗るキラに対して威圧的な態度を示す。  
通信越しではあったが、キラにはそれが分かるくらいだった。

キラはそれに従い、少し様子見をしようと、『インパルス』の背後に回って

後方に下がった。

「ステラ・・・俺だよ！シンだよ！」

『インパルス』のコクピットを開いて、彼女の乗る悪魔の機体にゆ  
っくり近づいていった。

『デストロイ』のコクピット内で聞き覚えのある声がステラの耳に  
伝わってきた。

「し・・・ん・・・？」

「ステラ・・・！」

「シン！シン！」

ステラはコクピット内で歓喜に満ちた声でシンの名前を呼んだ。そ  
して、彼女は

自分を守ってくれる存在が近くにいるのが分かると、全身を安堵が  
包み込んだ。

暖かく、希望が胸から溢れるのがわかると、自然と笑顔と暖かい涙  
がこぼれた。

「ステラ！会いにきたんだ！俺、言つたろ？守るって！ステラを守るって！」

「うん！」

「だから！ステラ！降りるんだ！」それ“から降りるんだ！”

「でも！ネオは！これに乗ってないと”死んじゃうって！”」

ステラはビクつと体を強張らせた。自らが言つた言葉があるうことが、彼女自身の

”禁句“であつた。ステラが包んでいた安堵は一瞬にして、緊張に変わる。

心の中で死への恐怖をとどめていたダムが崩壊したのである。土石流のように彼女の全身に恐怖が流れ出した。

「だ・・・だめ・・・」

急に彼女の様子が一変したのをシンは不思議に思った。

「ステラ？どうしたの？早くそれから・・・」

「駄目・・・死んじゃうは駄目・・・！怖いものは皆・・・！」

ふと、ステラの脳裏に信頼する上官のネオの言葉が浮かんだ。

（ステラも・・・これでまた戦わないとな。）

（また、私達を殺しに来る）

「怖いものは皆・・・！皆、無くす！！」

シンはギョツとした。何故？上手くいったのに。ステラを開放できると

思ってたのに・・・！どうして？

そして、『デストロイ』は再び攻撃を開始する。『デストロイ』の胸部の

スーパースキュラがエネルギーを溜めるのがシンは分かった。

「す・・・ステラ！止めるんだ！もう！」

だが、シンの言葉は、今の錯乱している彼女には届かなかった。

「ステラあああ！」

悲痛の叫びを出すも、今のステラには何も見えていない。涙がとめどなく流れ

視界を覆っているのだ。

「イヤア嗚呼ああああああああああああ！！」

もう彼女に目に映るのは自らが体験してきた、恐怖と、死のイメージだけだった。

自分が死ぬのは嫌だ。絶対に嫌だ。もう誰一人が死ぬのは嫌だ。絶対に・・・。

「何で・・・こんな事に！」

シンは自分がステラをここまで追い込んでしまったと思うと、絶望

した。

自分をもっと上手く説得すれば……。自己嫌悪に陥ってる最中、彼の後ろに

存在する『フリーダム』が『インパルス』の前に躍り出た。

「もう止めるお！」

キラはビームサーベルで『デストロイ』の胸部を貫こうとする。これ以上、『デストロイ』に街を破壊させてはいけない！

だが、その思いの込めたサーベルは『デストロイ』には届かずその前に、黒色の自分の同係機に体当たりで止められ、吹き飛ばされた。

『デストロイ』のコクピットが皮一枚えぐれた。

「く……。クロト？」

「キラ！待ってくれ！」アレ“には！”

「っ……。！！」

いくらクロトが相手でも、この巨大なMSに街を破壊させる訳には・

・！  
そうキラは思うと、『フリーダム』は『ブリュナーク』にターゲットを移し

武装を破壊するために、ビームライフルを連射した。

「き……。キラ！！」

「たとえば、君が相手でも僕は！！！」

キラも2年前の大戦の時に、守るべきものを無くした。  
それ故に、彼はもう大切なものを失わない為に、武器を振るった。

「僕は君を討つ！！！」

「こっの・・・分らず屋！！」

「分らず屋は君だ！！」

そう言うと、二人の機体は高速で動き始める。

互いに接近戦へと移行し、サーベルを構えるとその得物が互いの機体の中心で交差した。

そして、お互いに隙を見つけては、サーベルを叩き込むが盾で受け止める。

互いに翼を持つ機体が交戦している内に、シンはステラを再び説得しようと

試み始めた。

「嫌ああああ！！」

『デストロイ』の胸部から発射されたビームは都市を再び焼き払う。  
悲痛な彼女の心がまるで投影されているかのような悲しい攻撃だった。

シン自身もその彼女の悲しみが、彼の心に伝わってくる。

「俺が・・・分からないなら・・・」

シンは『インパルス』を空中に停滞させながら機体のコクピットを開く。

「ステラ・・・分かるだろ。これならよく見えるだろ。」

彼女は『デストロイ』のえぐれたコクピットからシンの姿を見た。肉眼で確認できるくらい近くで見える彼の顔。

すると、彼女はシンと過ごした浜辺を思い出す。

互いに服が濡れて裸になって互いの体を温めた事。

そして、あの時もらった貝殻を。

「っは・・・はあ・・・はあ・・・」

発作が治まったかように興奮状態が解ける。

彼女は自分の胸に冷たい何かが当たっているのが分かった。

胸に当たっていたものは貝殻だった。彼女はその貝殻をギュッと掴むと、唇を噛み締めた。

心臓がドキドキしているのが分かり、辛かったが我慢した。

「ステラ！分かる？」

「ううう・・・」

「ステラ！！ステラ！」

「シン・・・」

「ステラ・・・」

だが『デストロイ』の内部で突然アラート音が鳴り始めた。

ステラはビクつとし、コンソールの画面を見る。

そこには彼女の嫌いな色で危険としっかり移しだされていた。



先ほどの『フリーダム』の攻撃が、ここまで響いていたのだ。  
このままでは『デストロイ』はシンを巻き込んで爆発してしまう。  
彼女は、急いでシンに向かって言い放った。

「シン！機体に！」

「え．．？」

「デストロイが．．！爆発．．！」

「じゃあ！ステラも一緒に．．！」

ステラは横に首を振った。

彼が心配すると思つて、彼女は出来る限りの笑顔でシンに言った。

「ステラ．．殺したから．．」

「何を．．．？！」

『デストロイ』のコクピットの中が次第にスパークし始める。  
いたるところからスパークを起こし、彼女は体を強張らせて、  
シンに自分が覚えた異性への愛情表現を静かに言った。

「シン．．好き．．．」

「す．．ステラ！！」

急いで『インパルス』を動かし、コクピットに手を伸ばす。  
だが、それは間に合わず、『デストロイ』の口部と胸部の砲口から  
煙が出て、そして次の瞬間に空中に光を放ち、そして爆発した。

『インパルス』の中でシンは呆然とその光景を見た。  
燃える『デストロイ』。

シンは声にならない声で叫んだ。

悲しむ彼のその声は獣の叫びのようだった。

## 第十二話『決着』

『デストロイ』が爆発後、『インパルス』は空中で停滞し続けた。

その他にも、『お仲間』の撃墜されたシグナル音がファントムペインそれぞれの

機体の中に静かに鳴り響く。ステイングやアウルはもちろん、ネオもクロトも

その事実をすんなりと受け止める事ができず、ただ息を呑んだ。

燃える『デストロイ』を前に、ただ1人、怒りを打ち震えるシン。

自分もてる力で操縦桿を握り締め、そこから半回転して、『フリーダム』が

いる方向へ、『インパルス』を回頭させた。

シンは今の自分が思っている事を静かに、そして冷やかに呟いた。

「ステラは・・・ただ怖かっただけなんだ・・・」

涙声が混じったシンの言葉。

「ただ・・・助かろうとしたかったんだ・・・だから・・・!」

シンの語気はだんだんと強くなっていく。それは、自分自身が彼女を守れなかった事実、

そしてその約束を守れなかった事にやりようのない怒りと悲しみが、だんだんと

彼を蝕み始めたのだ。

「殺す必要なんかなかった・・・っ!」

『インパルス』はビームライフルを『フリーダム』に構える。

「俺は・・・あんたを討つ・・・今日！ここで！！」

彼の赤く染まった瞳にはうつすら涙がにじんでいる。

怒りが頂点へと達したシンは、ステラを殺した張本人である『フリーダム』へ猛攻する。

ビームライフルを連射して、『フリーダム』に接近し始める。

「あんたがステラを殺したああああ！！」

シンの形相はまさに鬼神のようで、『フリーダム』を睨み、恨みと怒りを込めた指でトリガーを引きつづける。

その怒りと殺気を感じた『フリーダム』のキラは、背筋が凍るような感覚に襲われた。この感じは一度、キラ自身味わったことがあり、自らも

実行した事がある感覚。

（トールが殺された時と同じ・・・！）

自分の友が親友に殺された時に、この感覚に陥った事がある。今、自分を殺そうとしているパイロットも昔の自分と同じだ。

「くっ・・・！」

キラは『インパルス』の攻撃を自らが持てる最大の技量で交わすも、先の戦いより

急成長してる『インパルス』の動きに戸惑った。

何故なら、彼の動きはまさしく”自分“そのものであるからだ。

ステップしつつ、ビームライフルを『インパルス』の頭部、そして

ライフルを所持する右腕めがけ発射するが、『インパルス』はその攻撃を

読んでいたのか、すんなりと回避した。

シンは『インパルス』のシールドを投げつける、回転するそれにめがけ

ビームライフルを発射した。ビームはビームコーティングされた盾に命中し

反射、反射したビームは『フリーダム』の頭部をかすめる。

キラは今の攻撃に驚く。

（あ・・・当てられた?!）

一瞬パニック状態になったキラ。

その隙について、『インパルス』はサーベルを引き抜いて『フリーダム』の

コクピットにつきたてようとする。

キラは『フリーダム』を後ろにステップさせ、それを交わし、今の攻撃で

体制が崩れた『インパルス』の胸部を一閃する。

だが、『インパルス』は驚きの方法で、その攻撃を交わしたのだ。

「まだだあああ!!」

シンは胸部と脚部を切り離し、『フリーダム』のサーベルを回避したのだ。

考えていたわけではなかったが体が先に行動を起こした。

そして、残った胸部で『フリーダム』をがっちりと捕まえて、頭部と胸部のバルカン砲が火を吹く。

『フリーダム』は速射砲の雨を近距離で直撃して、キラの視界を奪う。

『インパルス』の特徴であるコアブロックシステムを上手く活用した戦法で

キラの乗る『フリーダム』を翻弄するシン。

『インパルス』の胸部とコアファイターをも切り離し、戦闘機のみとなった『インパルス』。

『フリーダム』は必死に胸部のみとなった『インパルス』の抜け殻を離そうとするも

その腕は、ガッチリと掴まれているから離れない。

「・・・くっ！」

キラは苦渋する。

とどめと言わんばかりに、シンは切り離した胸部とバックパックめがけて

戦闘機のバルカン砲を連射する。

本体を切り離された胸部は、VPS装甲が切れ灰色の装甲は一瞬で穴だらけになった。

そして、爆発し『フリーダム』は後方への吹き飛ぶ。

今の動きを見て『ミネルヴァ』でその光景を見ていたルナマリアは驚愕した。

「す・・・すごいシン！あんな戦い方・・・」

「ミネルヴァ！チェストフライヤーを！それと、フォースシルエットとソードも！！」

ワンテンポ遅れて、『ミネルヴァ』からフォースシルエットとソードシルエットが

発射され、『インパルス』と合体する。

後方へ吹き飛んでいる『フリーダム』を猛スピードで追いかける。

「うおおおおおー!!」

『インパルス』はエクスカリバーを『フリーダム』の胸部へとめがける。

『フリーダム』もそれにあわせ、『インパルス』にビームライフルを撃つ。

『インパルス』は頭部や肩装甲を打ち抜かれるが、止まらず、次の瞬間

『フリーダム』の胸にそれは刺さり、巨大な爆発を巻き起こした。

『インパルス』は至る所がボロボロになっていたものの、宿敵であった

『フリーダム』を撃破し、シンは歓喜に打ち震えた。

俺が、あの『フリーダム』を討ったんだ! ステラの仇をとったんだ!

「は・・・はは・・・ははは!」

虚しく何かぼつかりと胸に穴が開いたような感覚。

必死で自分の中で正当化する。

自分の行動は間違っていないかったんだ。正しかったんだ。

俺は・・・俺は・・・

・・・あれだけ燃えてるんだ、遺体は無い。ステラはもう居ないんだ。シンは虚ろな瞳から一筋の涙をこぼすと、『デストロイ』を見送り中破した『インパルス』を回頭させ『ミネルヴァ』へ着艦させた。

「そ・・・そんな・・・嘘だろ・・・」

クロトはこの事実をさらに受け止め切れなかった。

ステラの死、ましてや予想もしていなかった最強のコーディネータ

ーの死亡。

一度に二人の大切な者を失ったクロトも、ただ撃破された『デストロイ』を見つめるだけ。

何故、自分は今のシンの行動をとめられなかったのか？

自分の中でキラは最強だと認知していた故の誤算だったのだ。

行き場のない虚無感が彼の中でとどまり、『ブリュナーク』を『デストロイ』の

近くで止めた。

それに続いてか、『ストライク』に乗るネオも来る。

「せめて、遺体だけでも確認させてくれ・・・」

静かにネオは言った。

無駄だと分かっていたとしても、これまでわが子のように一緒に戦ってきた少女。

その最後を見届ける事が、彼の親御心に似た感情だったであろう。涙は自然と出なかった。ネオは『ストライク』を使って、『デストロイ』のコクピットを

こじ開ける。

「・・・！」

ネオは驚愕した。

そこには、擦り傷や、パイロットスーツは焦げているものの、重傷ではない

ステラの姿がそこにあった。

遺体にしては綺麗な形で残っていた。ネオは『ストライク』の手の中に

ステラをのせて、ネオはコクピットから出ると、ストライクの掌に



飛び乗る。

そしてステラの遺体を抱きかかえた。

「綺麗な顔だ。もう戦わなくて済むんだ。お休み・・・ステラ」

仮面越しだったが、クロトにはネオの気持ちがいほど伝わった。  
俺は馬鹿者だ。あの坊主の約束を破って、結局死なせちゃった大馬鹿者だ。

トクン。

誰かの鼓動が聞こえた。ネオはハッとしてステラに視線を移す。

「ケホツ・・・ハア・・・はぁ・・・」

ステラの口から息を吹き返すと共に、少量の血液が吹き出された。  
ネオは諦めて乾いていた自分の心が再び潤う。

奇跡が起きたのだ。彼女が再び息を吹き返したのだ。

「ステラ！！・・・クロト！生きてるぞ！」

クロトは急いで『ブリユナーク』から躍り出て、ネオからステラを抱きかかえると  
いたわりながら彼女をコクピットに連れて、『ブリユナーク』を出す。

まだ間に合う。もう『お仲間』を死なせはしない。  
クロトは彼女の体につけながら、『ブリユナーク』を母艦に連れて帰るのであった。

「頼んだぞ。クロト・・・！死なせないでくれ・・・！」

こころの中、必死に彼女の安否を気にする。  
もう後は祈るしか残されていない。

「頼む神様。一生に一度のお願いだ。ステラの命を救ってくれ・・・」  
呟くと、『ストライク』を使い、『アビス』、『カオス』を回収するのだった・・・

## 第十二話『決着』（後書き）

キラとシンの決着がやけに、さりと終わってしまったので、シンだけでなく

他のキャラクターの描写をそのうち書きます。

### 第十三話『天国』

母艦である『ボナパルト』に帰還したクロトはパイロットスーツを脱がず

すぐさま、ステラを医療室へ運ぶ。

衰弱しきった彼女の体は血液が循環してないのか酷く冷たく、それはパイロットスーツ越しからでも分かるほどだ。

そのせいか、彼女の顔はやつれて、雪のように透き通った肌。青白く寒そうな表情。

医療室の扉を乱暴に開くと、眼鏡をかけ、カルテを見ていた医師は扉の開く音に反応し、

驚いた顔でクロトに顔を向ける。

「な・・なんだ？」

「怪我人だ。すぐに手術をしないと死んでしまう」

「・・・『デストロイ』の生体CPUか・・・任務は失敗したのかな？」

「そんな事はどうでもいいだろっ!!」

悠長な医師に頭に血が上るクロト。ブルーコスモスに賛同する者にとって

強化人間の扱いなど、MSの部品の一部でしかない事を、改めて自覚する。

彼らにとってコーディネーターと強化人間は紙一重の存在なのだ。

（どっちが人間だ馬鹿野郎）

今まで命がけで戦ってきた者を気にかけるような言葉を言わない医師を

クロトは内心毒づいた。

「いいだろう。その『生体CPU』を治そう。」

「早くしろっ!!」

「おお・・怖い怖い。」

医師はクロトの焦り様を陰で見えない場所で笑うと看護婦を内部無線でよびかけ、集中治療室へと向かう。

集中治療室はガラス張りの部屋で、医務室からでも見る事が出来る。

中は、ベッドが一つあり、さまざまな治療機械が存在する。

集中治療室の扉が開かれると、彼女は担架の上で応急処置されていて人口呼吸器をつけた痛々しい姿がクロトの目に映る。

集中治療室の中央のベッドの上にステラが置かれ、先ほどの医師と数人の助手が

彼女の周りを囲み、メスを使い体を切開し始める。

数分経つごとに、ステラの体から『デストロイ』のコクピットの破片が

摘出されたりする。

それから、数時間すると集中治療室の赤く光るランプが緑に変わった。

どうやら手術が終わったのであろう。

終わる頃には、ステイングとアウル、そしてネオの3人がクロトの背後に立っていた。

「どうだ？容態のほうは？」

ネオがクロトに訊いた。

「成功したみたい。今はぐっすり眠ってるよ。一、二週間もすれば復帰出来るって」

「そうか」

ネオは少し喜びつつ、返した。

ステイングとアウルも彼女の様子を見て安心したようで、ため息をついた。

「次はヘヴンズベースで仕事だそうだ。」

ネオはステラから話題を切り替えて、次の任務内容を軽く3人に伝えると、

医療室を1人後にした。

アウルはステラの安否が分かって、どっと疲れが押し寄せてきたので先に寝ると二人に伝えると自室へ走る。

「ふん・・・やれやれっ・・・」

ステイングはアウルの後姿を鼻で笑うと、クロト共に『ボナパルト』の廊下を歩く。

「忙しいやつら・・・ですよね」

「・・・あ・・・ああ。そうだな。」

「・・・ん？どうしたんです？隊長？」

「いや・・・少し疲れたみたいで・・・な。」

クロトは蒼白した顔でスティングに答える。

スティングも彼の異変に気付いたのか、しつこく医療室へ戻るよう促す。

「ほんつとに・・・大丈夫ですか？」

「ああ・・・だからっ・・・！」

言い終わる途中、急に猛スピードでトイレへと駆け込むクロト。

洗面所の前でビチャビチャと水が流れるような音と共に、排水溝がおびただしい量の

血で埋め尽くされる。クロトの口から血液が流れ落ち、必死で口を抑え

吐血を隠す。その姿を見たスティングは目を見開き、驚きを隠せない表情だ。

「どうしたんです！？どこか、やらたんですか！？」

クロトはすぐにパイロットスーツの腰にあるポケットから薬ビンを取り出し、

無造作に手のひらに薬を落とし、それを一気に口の中へ放り込み飲み込んだ。

口に付着した血をスーツを着た腕で拭くと、多量の血がスーツに付いた。

「……このことは、黙ってるよ。アウルにもネオにも、そしてステラにも」

自分の死期が近い事を悟った表情でステイングに告白した。

「内臓やら、脳やら、至るところ全部、ボロボロになってるらしいんだ。」

壁にドッと寄りかかり、ステイングの方へ体を向ける。

クロトは、ステイングに薬ビンを見せるように手の平へ乗せる。

彼の手の平は震えていて、なんとも痛々しい。

「こいつで延命してたのさ……。もって後、数ヶ月らしい。」

「……」

ステイングは何もいえなかった。彼がそんな体で戦って来たなんて事も知らず

その上、残りの寿命のことも聞かされ、どう答えればいいか分からなかった。

逃げ場のない立場に立たされ、その責任の重大さに押しつぶされるような感覚。

「……すこし使っちゃったけど、『ブリュナーク』、お前に預けるよう申請しとくは。」

「あっ……俺、どうす……」



ただたどしく、口を開くステイングの肩に手を置いて、クロトは柔らかな表情で答えた。

「お前に・・・まかせたかな。」

そうすると、クロトは出て行った。ステイングはしばらく、洗面所の前で

ぼうぜんと立っていた。自分が彼から伝えられた心。

全てを任せられた重み。クロトの言葉は、彼の全てをステイングにまるまる預けると

言った意味だったということ。ステイングはその意味を深く考え、そして自分の中に

消化した。目をつぶりながら、その意味の重大さと責任を噛み締めると、彼はまた一歩

大人に近づいたのだった。

それから、まもなく、国内回線を使いザフト本国からギルバート・デュランダル議長

直々に演説が行われた。その演説はブルーコスモスの権力を握る賢人会、”ロゴス“

を撲滅するといった内容だった。放送は、まるで連合は悪者、ザフトは正義の味方といった

図式で語られた。まんまと、デュランダルの政策にはまってしまったのだ。

民衆からも嫌われていた、ロゴスやロゴス側の連合は世界の大半以上の人間を

敵に回したのである。

それを契機に、ザフト軍ジブラルタルでは、一時的にザフトと反ロゴス側連合軍との同盟が

行われ、その大量の戦力を用いてヘヴンズベースにかくまわれてい

るロゴスを叩きつぶすのが  
次に行われる任務だった。

そんな中、ヘヴンズベースにて新たな任務を下られた。  
内容はもちろん、ヘヴンズベースにて連合の総戦力の大半を用いた  
防衛戦、

そう、ロード・ジブリール氏所属のロゴス護衛である。

その中には、ネオ達5人のファントムペインの姿もあった。

ヘヴンズベースは、大西洋北部アイスランドに位置する場所に存在  
する最高軍司令部であり、

そしてザフト軍地上部隊の最大拠点のひとつである、ジブラルタル  
と目と鼻の先に存在する。

流石に、地球連合が誇る最大の拠点であるから迎撃体制は完璧であ  
った。

それは、多数のMAが配備され、さらに5機の『デストロイ』もあ  
るから鉄壁に近いものだ。

彼ら五人はつかの間を休息を取りながら、次の戦闘の準備を整えて  
いた。

「つーか俺らなんで収集されたわけ？『デストロイ』も『カオス』  
も『アビス』も

みーんな壊れちゃったから、俺たち乗るもんねぜ？」

アウルはネオにぼやいた。

これだけ面白い祭りが行われようとしてるのに、肝心の機体が無い  
のでは

楽しむ事なんてできないじゃないか

「機体ならちゃんとあるぞ。」

「え・・・？」

「まだお前だけには見せてないけどな。」

「何でえ？」

子供がクリスマスに玩具をもらえずに苛立っている、そんな表情でアウルはネオを睨む。

「何でえ？つて・・・言わなかったじゃない。アウル」

「ちえっ・・・！」

舌打ちをして、キョロキョロと周りを見渡すアウル。

ステイングとステラ、クロトの姿がさつきから見えないと思うとネオに居場所を聞いた。

「ネオー。あいつらどこいったの？」

「確か、新型の調整をしに出ていったぞ。」

「んー・・・じゃあ格納庫にいの？」

「たぶんな。」

アウルはブリーフィングルームから出ると、すぐに走って格納庫へと向かう。

自分の新しい機体と仲間の姿を拝みに。意気揚々と廊下を走り抜けて、格納庫に到着した。

格納庫は少し暗く、左右に機体が横一列にあり、それぞれ3機ずつ

合計6機あるのが見える。

一つは『ブリュナーク』、その隣から端まで2機のMSがあつて、見慣れない機体である。どうやらネオが言っていた新型っていうのはこの事であろう。

『ブリュナーク』の向かい側にはダガータイプが2機とネオの愛機『ストライク』がある。

『ブリュナーク』とその隣の新型2機は灰色に近い黒色で静かにたたずんでいた。

どうやら『カオス』や『アビス』と同系統のMSなのだろう。

『ブリュナーク』のコクピット内で忙しそうにクロトがパソコンのキーを叩いている。

「クロトー。何してんのー？」

言われると、クロトはやっとアウル存在に気付き、アウルに向かって答えた。

「OSを書き換えてんの。」

「ステイングとステラ知らねー？」

クロトは『ブリュナーク』の隣の新型機を親指で指し示した。

指した方向の一番端の灰色の機体のコクピットに二人の姿が見えるのが分かった。

「おおーい！ステイング、ステラっ！」

ステラは顔にバイザーをつけていて、ステイングが彼女の隣でうるさく指導していた。

ステイングは彼女に少し席をはずすと囁くと、アウルがいる場所へ、クレーンを使って移動する。

「どうした？」

苛立った形相でステイングがアウルに尋ねた。

「ヒマだからバスケでもしよーぜって思ったら誰もいないからさー。探しに来たってわけ。」

「悪いな。今、ステラにドラグーンの使い方を教えてたところだ。後にしてくれ。」

「へいへい。」

「そうそう。お前のは真ん中の”そいつ”だから。」

ステイングが指で真ん中の機体を指し、アウルに教える。

彼は新しい自分の玩具を前にし、目を輝かせる少年のように機体をみつめ、

3人が早く終わらないかな　ぼんやりと考えて、じっと待っていることにした。

## オリジナル機体設定

ここでは第13話までのMS設定を出させていただきます。  
が、1話から読まずにここを読むのはネタバレが含まれますのであ  
まりオススメはしません。

GATX-410A 『ブリュナーク』

新型GATシリーズ、400系統MS。100系統は汎用型。200系統は最新装備搭載。300系統は航空能力、変形機構、といった様々な能力がある中、新型である400系統には極秘裏に核を標準搭載したMSである。ニュートロンジャーマーキャンセラーを搭載し、核エンジンを扱える機体が400系統なのであるが、その記念すべき初の機体がこの『ブリュナーク』である。

『ブリュナーク』はムルタ・アズラエルがCE71年次に入手した、『フリーダム』、『ジャスティス』の設計データを元に開発を行われていて、その原型となった『フリーダム』の連合製である。『フリーダム』のフォームはそのまま、カラーリングは爽快な青から灰色系統の黒が特徴。武装等は特に変更はされていない。

マルチロックオン搭載型全周囲モニターを搭載し、PS装甲も採用。元々、イレギュラー（敵の新型兵器等）に対応する為にほぼ専用機として開発されている。

本機は第81部隊ファントムペイン所属、クロト・ブエル少佐の手に渡り、ベルリンでの戦闘で『フリーダム』と対決している。後に、同所属である生体CPU、スティング・オークレーの手に渡る。その性能は『フリーダム』と同等でパイロットの技量によって機体の潜在能力は開花されるであろう。一樣、『フリーダム』とフレームは同じに近いので『ミィティア』と連結することもできる。名前の由来はブリュナーク（Brunac）で、ケルト神話に登場する魔槍。「貫くもの」の意。

武装・ルプス・ビームライフル×1

ラケルタ・ビームサーベル×2

クスフィアス・レールガン×2

バラエーナ・レールガン×2

ピクウス76MM機関砲×4

アーマー・シュナイダー×2

GAT-411A 『フラガラツハ』

GAT400系統シリーズの記念すべき、2機目のMS。『フリーダム』と対をなす『ジャステイス』

を元開発されている。『ブリュナーク』同様、全周囲モニターとマルチロックオンシステムを搭載している。

本機は『ジャステイス』と同様、接近戦闘を得意としたMSである。しかし、『ブリュナーク』と違い、『ジャステイス』とは武装が異なり、

背部に装備されているファトゥム00は脱着することは不可能になっている。

そのため、ファトゥム00はほぼ背部ブースターの役割が強い。

『ジャステイス』と武装が同じなのは唯一、両肩に装備されているフラッシュエッジのみで

他は『ジャステイス』より『デステイニー』に近い。

例えば、『ジャステイス』の腰部に搭載されていたラケルタ・ビームサーベルは廃止。

折りたたみ式のシュベルトゲベルを装備。ファトゥム00の側面に装着する形に。

次に、折りたたみ式の超高インパルス砲アグニ。これもファトゥム00の側面に装着。



さらに、胸部には『カラミティ』と同じスキュラを装備。  
近、中、遠全てに対応した機体に仕上がっている。

核エンジンの搭載でエネルギー切れを起こす事もない本機ならではの豊富な武装である。

この機体も、『ブリュナーク』と同様、対イレギュラー戦に着眼しており並みのパイロット

では扱えない機体のせい、ほぼ専用機として開発されている。

機体色は赤紫。名前の由来であるフラガラツハ（Fragarach）は、ケルト神話に登場する剣。「回答者」「報復者」という意味。

パイロットはアウル・ニード

## 武装

ルプス・ビームライフル×1

対艦刀シュベルトゲベル×1

超高インパルス砲アグニ×1

フラッシュエッジ・ビームブーメラン×2

580mm複列位相エネルギー砲スキュラ×1

ファトゥム00ブースター×1

GAT-413A 『タスラム』

GAT-400シリーズの三機目。

ZGMF-X13A『プロヴィデンス』を元に開発されたMS。連合軍では初のオールレンジ攻撃を

標準搭載したMSである（デストロイはMSというよりMA、スト

ライク、ダガーの  
メビウスパックは標準搭載とはいえない） 本機の特徴は『プロヴ  
イデンス』と同様

背部に搭載されているドラグーンシステムである。

ドラグーンシステムとは量子通信による無線通信を用いて、本機か  
ら脱着し

パイロットの精神コントロールにより自立攻撃する、いわばUCシ  
リーズにおける

『ファンネル』のことである。全部で13基、計43門、ビーム砲  
を搭載。

『プロヴィデンス』とは異なり13基中4基は防御用に展開、フォ  
ーメーションする

ことで、連合の月面基地『アルテミス』のモノフェーズ光波防御シ  
ールド

『アルミューレ・リュミエール』を使用できる。（簡単に言っ  
てしまふとビームで覆われた

膜の中から攻撃する事が出来る）が、アルミューレ・リュミエ  
ールの性質上、

他機に展開し援護することは出来ない（アカツキ・シラヌイ装備と  
は異なる）。

本機は対イレギュラー戦用に開発されているため、並みのパイロット  
では扱う事が出来ず

ほぼ専用機として開発されている。カラーリングは『プロヴィデ  
ンス』とは異なり白色。

パイロットは空間感知能力がファントムペイン中、最も高かったス  
テラ・ルーシエに

渡される。名前の由来はタスラムは、ケルト神話の光の神ルーが持  
つ武器の1つで、

魔弾とも呼ばれている。その名が示すとおりドラグーンこそ、魔弾  
の名に相応しいとも

いえる。

## 武装

ピクウス76MM機関砲×4

ユーディキウス・ビームライフル×1

防盾ビーム・サーベル×1

ドラグーンシステム（ビーム砲×43）

アルミューレ・リユミューエル（フォーメーションに応じて）

他、後々更新予定。

## 第十四話『黄昏』（前書き）

学校が忙しく、眠い日々が続きますが、頑張っています。

## 第十四話『黄昏』

「俺は今回、『ノワール』で出るぞ。」

クレタ沖での戦闘で中破した『ノワール』はその後、修復されネオ・ロアノーク大佐の

搭乗機として使われていた。しかし今回、ヘヴンズベースの指揮をネオ自身が行う事なので

『ノワール』をまわす事になったのだ。先に『ブリュナーク』は、ベルリン戦で大破した

『カオス』を失ったステイング・オークレーに搭乗させる事に。

「しかし・・・俺が扱えるんですか？こんな機体」

すこし不安な顔を見せるステイングであった。

確かに、最新鋭機といった『カオス』ではあっても、『ブリュナーク』の性能は

群を抜いている。だから、『カオス』からいきなり性能が跳ね上がったこの機体を

扱う事は本当に出来るのであろうか。しかし、クロト自身の病を思うと、そうも言うてられない。

「今更、何を不安になってんだよっ！」

「・・・」

「ううつ・・・」

アウルは彼のあまり見ない一面を見て、元氣づけようと茶化すも、逆効果に終わったようだ。

だが、彼の言うとおり、今更何を不安になるのであるうものか。戦闘が始まるまで残りあとわずかになったのだから。

先に、ヘヴンズベースに国際チャネルを使いギルバート・デュラ  
ンダル議長自ら降伏勧告を

伝令したのだ。その要求をのむか否かは別だが、回答時間として出された6時間はもうすぐ尽きる。

「デュランダルめ……目にものを見せてくれようぞっ！」

猫のように鋭い目をし、眉を細め苛ただしそうに吐き捨てた。

ログスマンバーの1人のジブリールである。彼は士官に顔を向け無言で頷く。

攻撃の合図が落とされたのだ。

合図と共に士官はザフト軍に向けて、ミサイルの発射を促す。

すると、ヘブンズベースからミサイルは次々と発射され、白い尾を引くそれは

なめるように孤を描き、雨のようにザフト軍団に命中していく。

その光景を遠目から見ていた『ミネルヴァ』のブリッジにいる全員が息をのみ、

背筋が凍りつく。

やっとその状況を飲み込むことが出来たクルーであつたが、その中、騒がしく

声を上げたのが『ミネルヴァ』の副艦長であるアーサーだった。

「ええええええええええ！！！」

すっとんきょんな声をだす。思わずデュランダルも「なんだと!？」

と顔をこわばらせた。

しかし、それは彼らだけでなかったであろう。『ミネルヴァ』のクルーだけではなく

他の戦艦やMSに搭乗している者たちも同じ気持ちだ。

陸から発射されていったミサイルの雨は『ミネルヴァ』の周りの艦隊に次々と命中し始め

やっと『ミネルヴァ』も行動を起こす。

「アーサー！こちらでも攻撃を開始するわ！」

「はっ・・・はい！！」

タリアは思わず歯噛みした。言葉の通じる相手ではなかったと。

時同じくして、ファントムペインの四人組はすでに戦闘態勢にはいつていた。

全員機体のコンソールのキーボードを激しく叩く。次第にシステムが立ち上がり

それぞれの機体の特徴であるガンタムタイプのメインモニター、人間で言うところと

フェイスソフト

目の部分に光がともし、PS装甲に電力が伝わり次第に鉄灰色の装甲は

それぞれ色鮮やかに変わる。

そして機体の真上のハッチが次第に、音を立てながら開いていく。そこから見える空は一面が白色で、その中を爆発や爆発音、ビームやミサイルが飛び交っている。ハッチが完全に開放されると、クロトラ四人の機体が徐々にハッチからその姿を見せていく。

「準備はいいか？お前ら！？」

クロトは荒ただしい語気で三人に向かって言い放つと、三人は完全に戦闘モードに整う。

「じゃあ、発・進！」

意気揚々に昔の口調に戻るクロト。すると、白と黒の機体は背部のブースターを思いつきり噴かし、一度空中にフワリと浮かぶと、そのまま敵艦隊に向かって吹っ飛んでいく。

「アウル、ステラ、準備はいいな？」

「OK、いつでもいいよ」

「…いいよ」

ステイングは二人の答えが返ってくると、皮肉気に笑みを浮かべた。

「さあ、パーティーの始まりだっ！」

彼は今のやりとりに満足する。あの時も新型の3機に乗っていた。

そして今回も新型か。へっ！笑いが込み上げてくるぜっ！

三人の機体もクロトの後に続き、機体を急加速させるのであった。



「勝たねばならんのだっ……！勝たねば……！」

ジブリールは悠然たる笑みを浮かべる。

「古の時代から我らの勝利は必然、確定事項……！糾弾も理想も良  
いが……」

デュランダルよ、それらは全て勝った者が得られるのだっ……！」

卑怯者とののしり上げれば罵るが良い！だが、果たして私が勝った  
時、貴様は立っているか？

否。立つてはいない。暗く、何者も感じない墓の中にいるのだ！そ  
うすれば汚い綺麗など

関係ない。勝てばもみ消しひねり潰せるのだ！

「ニーベルング、発射体制が整いました」

ジブリールはほくそ笑むうちに、ニーベルングの発射シークエンス  
は徐々に進んでいく。

「偽装シャッター開放」

いきなり基地のはずれに位置する白い山が動き始める。振動に連れ  
て斜面を雪がすべり

落ちる。雪煙を上げる山が、真つ二つに割れ、地下から巨大な目を  
思わせるミラーの  
集合体が覗く。

驚く事に、上に木まで立ち並ぶ小山は、この巨大兵器を隠す為の偽  
装シャッターだったのだ。

そして地下から目覚めた、直径10kmにも及ぶパラボラ状のミラ  
ーこそ、

対空掃射砲『ニーベルング』だ。ヘヴンズベース基地の守護神ともいえる兵器だ。

巨大なそれがゆっくり目を開く。すると上空に降下するザフト軍の増援部隊をゆっくりとらえる。

上空でいくつものポッドが開き始め、なかから大量のMS群が現れる。

「発射！」

ニーベルングから閃光が発せられると、閃光の中に捉えられたMS群はたちまち

爆発を起こしていく。この巨大兵器はレーザー発生装置だったのだ。空に埋め尽くされていたポッドやMS群は一瞬にして真っ白な空間からその姿を消していった。

「ひょうつ！派手にやるねえ！」

『フラガラッハ』のコクピット内でアウルは、ザフト軍のMSが一瞬で花火になっていく様を見て、うれしそうに言った。

「こいつは派手だな！中々楽しくなってきたじゃねえか・・・！アウル、左だ！！」

わかってるよっ！そう言うと、アウルは『フラガラッハ』を瞬時に左へ旋回させ、  
胸部のビーム砲スキュラを発射し、敵のコクピットデインを貫く。

「はっはあ！ごめんね！強くてさあ！」

再び彼らの機体の目の前に新たに『デイン』や『ジン』が数機迫る。アウルは両肩のブーメランを抜き放ち、すかさず投げる。

投刃されたそれは、一機の『デイン』のそれぞれの脚部に命中しなすすべもなく撃ち落される。そして、脚部を破壊されひよるひよると落ちる『デイン』にさらに追い討ちをかけ、

超高インパルス砲を腰部にどつしりと構え、胸部めがけ発射する。

七色に光る閃光が砲門から放たれると胸部の中央に命中し、貫通すると同時に『デイン』は

大爆発を起こす。

アウルはそれぞれの武器の性能や威力を堪能するとスーツ越しに自分の“物”が悦になっ  
ているのが分かった。

最高だ！これは！僕の物だ！

「へ・・・アウルに負けねえぜ！！」

ステイングは『ブリユナーク』のマルチロックオンシステムを起動させ、敵のMS部隊を瞬く間にロックして、ためらいなくトリガーを指にかける。『ブリユナーク』の全砲門から火が噴くと多量の爆発が起きていく。

「ヒヤッーハッハ！最高だぜこりゃあ！」

『ブリユナーク』の性能に舌を巻く。マルチロックオンシステムを器用に使いこなせるにはそうは時間は掛からなかったのは彼の才能が伺える。

二人は互いの機体の性能に舌を巻くが、こいつにだけは絶対に負けない、そう思う。もはや彼らはMSの戦闘は撃破数の競争になり変

わっていた。

クロトは自軍の巨大兵器が放った光に飲み込まれたザフト軍のMS群が爆発する様子を見て絶句した。

何故、人は互いを認めず闘うのだ？俺は、こんなことを止めたくてここに戻ってきたのではないのか？

自分の無力さを噛み締める。所詮は自分もチェス盤の一つの駒にすぎないのだ。

「ちっばけな存在だな…俺は…」

避けたかった事態。だが、それでも、まだやるべき事がある。大切な『お仲間』を命をかけて守る事だ。

もう、ロドニアの失敗は繰り返さない。

クロトは、『ブリュナーク』がマルチロックオンシステムでMS部隊を撃破している様子を横目で確認し、きびすを返す。

パイロットスーツのポケットから管を一つ取り出す。それをパイロットスーツの首筋部分の穴に差し込む。黄色の液体がゆっくりと、クロトの体内へ流し込まれる。

霧がかかったような頭の中がすうっと晴れる。その中で種が割れるような音が彼の中で

響いた。クロトの目が白色に変わる。『ノワール』は地面を思い切り蹴り上げ、

そのまま飛行モードで上空を華麗に舞う。

戦場は未だ混沌とし、倒しても倒しても終わりが無いようなくらい、MSが増え続ける。

彼は目の前から接近する数機の『ディン』を装備されている小型拳銃型ビームライフルで、一瞬にして数機の『ディン』の背翼を撃ち

貫き海面へ叩きつける。

「くそ・・・切りがないぜ！」

『ノワール』の背部に装備されているフラガラツハ3で、海面に浮いている

戦艦に近づいていく。『ノワール』が近づいてくるのが分かると、戦艦を守るために再び『デイン』がマシンガンを連射して『ノワール』へ猛スピードで近づいてくる。

『ノワール』は一度、ブレードをしまい両掌に内蔵されている、アンカーを発射し、2機の『デイン』はそのアンカーに足を絡め取られる。『ノワール』は思い切り、両腕を交差すると、

『デイン』は互いに慣性の方向へ勢いよく振られ、強くぶつかる。大きな衝撃が起こり、『デイン』は中破した。

『デイン』がやられ、海面へ落ちていくと、すかさず戦艦が迎撃するためCIWSを起動させ

『ノワール』を近づかせない。

「ああああああ!!瞬殺!!」

『ノワール』は空中から思い切り片手のブレードを投げ飛ばし、戦艦の甲板にブレードが

突き刺さる。そして、一気に近づき、甲板へ機体を乱暴に着地させると、

戦艦は一瞬ぐらつく。『ノワール』は突き刺さったブレードを引き抜き、小型拳銃型ビームライフルに切り替えると、突き刺さった甲板の亀裂に向かって、シューティを連射する。

戦艦は煙を吹きながら、真つ二つに割れていき、水しぶきを上げる。

水しぶきの中から

華麗にジャンプし、『ノワール』は新たにヘヴンズベースへ向かってくる敵軍を確認する。

その最中、クロトの後方から攻撃を合図<sup>シグナル</sup>させる警報音が鳴り響く。

「なんだあ?!」

クロトは機体を回頭させると、ヘヴンズベースの中央から黒光りする禍々しい巨大な機体を

目にする。その巨大な機体は先行する味方部隊に関係無く、容赦なく背部に装備されている

四門の高エネルギー<sup>アウフフラール</sup>砲<sup>ドライツェン</sup>を発射する。

クロトはとつさに、機体を思い切り上昇させそれを回避するも、射線上にいた

味方部隊<sup>ウィングダム</sup>が次々に爆発を起こしていく。

「あ・・め・・滅茶苦茶やりやがる!それに・・まだ“あんな物”があつたのかよ!」

クロトには聞かされていなかったエクステンデット部隊と『デストロイ』。

彼の行動が前々から気に入らなかった軍上層部による配慮で、クロトやネオには

聞かされていなかったのだ。

彼は機体の中で、歯軋りをする。

死なせたくない!

あんな化け物に乗せたまま死なせるか!

だが、『デストロイ』が出てきてから急に姿を見せた機体が彼の横

を猛スピードで

突っ込んでいく。青と赤と白のその機体は背部から光の翼のような光を出しながら

『デストロイ』へ向かっていく。

「なんだありやあ・・・！新型か！」

青と赤と白の機体の後ろには、同じ新型の機体と『インパルス』が続いている。

もう一方の新型は、全体的に黒系統で、背部には巨大な物を背負った重量感のある機体で

クロトには何だかすぐに分かった。そう、そのフォルムはまさしく『タスラム』の後継機だ。

正確には『タスラム』の原型機『プロヴィデンス』の。

「まさかあいつら！」

クロトは彼等が『デストロイ』へ向かう意図が分かると、自分の機体もヘヴンズベースへ

吹っ飛ばす。

もう『お仲間』の死は見たくない。間に合え！

ステイング達は前方から赤と青と白の機体と、ステラの乗る『タスラム』に似た機体、

そしていつもの『インパルス』が猛スピードで接近していくのを確認すると、彼等は

目的が『デストロイ』の撃破であることがわかった。

このヘヴンズベースをかうじて守っている要が、先ほど打たれた

『ニーベルング』と

『デストロイ』の高火力であるからだ。

だが、『ニーベルング』は放たれ、再受電しているが、もう一発をすぐには撃てない。

『デストロイ』に至っては、ベルリン戦ですでに接近戦に弱いのは網羅されている。

しかし、そのためにステイング等機動性の高いMSが防衛を張っているのだ。

「アウル、ステラ！『デストロイ』を守るぞ、いいな！」

<へっ！またあいつらか・・・性懲りもなく！！！>

アウルは『インパルス』の姿を確認すると、もう一方の新型2機が目障りな

『ミネルヴァ』所属だと理解する。

今日こそ決着をつけてやる。

彼は背部ブースターフットウムのバーニアを噴かし、青と赤と白の機体へ急接近していく。

「あの馬鹿！フォーメーションを！」

遅れてステイングも『フラガラツハ』に続く。

『ブリュナーク』が続くとその後ろに『タスラム』が続いた。

「シン・・・？」

ステラは『インパルス』の姿が目に入ると、あの機体にザフトのシ



ン・アスカが  
乗っているのだと思うと、喜ぶ。

また会えたっ！

「シン。いいな。目標はあの『デストロイ』だ。あれを破壊すれば、  
この基地の  
攻撃の要は無力化される」

<ああっ！分かってるよレイ！>

<だ・・大丈夫かしら？私達だけで>

ルナマリアは初めて、あの禍々しい機体を目の前にし、威圧感を感じる。

先ほどの強力な攻撃でたじろぎしたので、恐怖を感じていた。

<ルナ！あれは接近戦に弱い！ソードインパルスに換装するんだ！>

「え！あ・・うん！分かった！」

ルナマリアは『インパルス』に乗ってからまだ日が浅い。

そのためか、まだ『インパルス』の合体システムを最大限に扱えず、  
どの状況で装備を換装すればいいのかまだ、分かっていない。

なので、『インパルス』を熟知しているシンの指示をよく聞いた。  
指示を聞いてから素早く、『ミネルヴァ』にソードシルエットの換  
装を要請する。

すると、『ミネルヴァ』からシルエットが射出され、戦場へ淡々と

現れる。

そして、背部のフォースシルエットを脱着し、代わりにソードシルエットが背部に

装備される。すると、鮮やかな蒼色の装甲は真紅の装甲へ変わる。  
ヴァリアブルフェイスシフト  
VPS装甲の効果だ。

<くん？新型か・・・？・・・！あれは・・・『フリーダム』>

レイは内心、驚きを見せた。あの形状はまさしくベルリン戦闘でシンが撃破したはずの『フリーダム』。馬鹿なっ！何故っ！

<それに・・・『ジャスティス』！そんな・・・『プロヴィデンス』まで！>

シンもコクピット内で驚きの声を上げた。  
ベルリン戦で破壊したはずの亡霊『フリーダム』が目の前に存在する。

全大戦で消えたはずの『ジャスティス』、そしてレイの乗る『レジエンド』の前機

『プロヴィデンス』まで。

それに『ジャスティス』の姿を見ると、口の中に苦いものがこみ上げてくる。

## アスラン

そつ、『ジャスティス』は元々、全大戦の英雄、アスラン・ザラの愛機だ。

その『ジャスティス』が今目の前にいる。  
自分の手で討ったアスランの亡霊がいる。

<シン！動揺するな！くるぞっ！>

「分かってる！あれには、アスランは乗ってない！」

<どうゆう経緯であの機体のデータを奪ったかは知らんが、とにかくやるしかない>

<覚悟を決めるしかないわね・・・！>

「うおおおお！！こんのおおおお！」

シンは気合の咆哮を上げ、英雄を模した機体へ飛び込んでいった。

「例の合体野郎もいるぞ！アウル、ステラ、気をつけろよ！」

スティングは飛び込んできた青と赤と白の機体が『ブリュナーク』  
に対艦刀を振り下ろす。

彼は左手のアンチ・ビームシールドを掲げ、対艦刀を防ぎ、ビーム  
ライフルを

放つ。だが、それは呆気なくかわされる。

「動きが早い！」

青と赤と白の機体は、『ブリュナーク』にビームライフルを連射し  
つつ、

背部ウェポンクラックに装備されている、高エネルギー長距離射程  
ビーム砲を放つ。

『ブリュナーク』は連射されるビームライフルはローリングしながら

らかわすも、

長距離射程ビーム砲まではかわせず、アンチ・ビームシールドでなんとか受ける。

<あの『フリーダム』より遅いぞ！偽者！>

『ブリュナーク』のスピーカーから聞き覚えのある声を聴いた。

あの時のザフト野郎か！  
ディオキア

「『フリーダム』より遅いだとお？なめるなあっ！！」

ステイングは半ば切れ気味で、『デイスティニー』ヘビームサーベルを二本構えながら

飛び込む。そして、その二つの得物を同時に振り下ろす。

だが、サーベルは『デイスティニー』には届かず、その前に、『デイスティニー』の

バルマフィオキーナ

掌でとめられる。掌はビームの膜で覆われており、サーベルをいとも簡単に抑えられたのだ。シンの類まらない技量における神業である。

<はっはあ！死ねよ！てめえ！>

『フラガラッハ』が『デイスティニー』に躍り出る。『フラガラッ

ハ』は背部ブースターの

アクニ

ウェポントラックから超高エネルギー砲を腰部に構え、放つ。

『デイスティニー』は急いで、高く上昇してビームを絶妙なタイミングで回避した。

<ちっ！逃げんなよ！ごらあ！>

<『デイスティニー』と『ジャスティス』の中間みたいなもんかつ>

『フラガラッハ』の胸部にエネルギーが込められ、回避した『デステイニー』に

放たれる。シンはそのビームをシールドで難なく弾く。

そして『デステイニー』のウェポントラックから今度は、対艦刀を構える。『フラガラッハ』もそれに応じて対艦刀を構える。

「はああああ！」

互いに、機体はぶつかり合い、剣と剣が交差して凌ぎを削る。その中心はものすごいスパークを起こし、アウルとシンの闘争心を駆り立てる。

僕が最強だ

亡霊め消えろ！

やっとの思いで、クロトは3体の機体に追いついた。

案の定、新型機は、『ブリュナーク』等3体の機体と交戦して、3対3の状況に。

『デストロイ』は遠距離から飛来するザフト軍を叩くのが精一杯でステイング等

三人に援護はしていないようだ。そもそも、彼等は援護など考えてはいないかもしれない。

だが、ステイング達3人がシン達に気を取られている隙に、海上から現れた『ゾノ』部隊が

『デストロイ』に接近し、5機あるうちの一機のコクピットをやすやすと潰された。

「あああ！！」

クロトは急いで、『ゾノ』へ接近して両腕両足を小型拳銃型ビームライフルで破壊する。

「『デストロイ』 4号機撃破を確認！」

ジブリールがいる司令室のオペレーターが、淡々と答える。  
彼は、一瞬で憤怒に満ちる。

「一体、奴等は何をやっている！何の為の『デストロイ』防衛につかせてると思っている！！」

ジブリールは怒りの形相で立ち上がり、背後のネオに罵声を飛ばす。

「も・・・申し訳ありません」

「宇宙へいく準備を整えろ！貴様等に私の身は任せられん！」

ジブリールは、『ミネルヴァ』の出現に焦りを感じていて、5機ある『デストロイ』が一機破壊された事でそれは爆発した。

このままではここが陥落するのも時間の問題だ！

彼は、隣にあるグラスに入ったワインを飲み干すと、苛立ちながら乱暴に椅子へ座る。

ネオは彼の行動を呆れながら内心愚痴をこぼす。

（元々はあんた達<sup>ロコス</sup>が招いた不祥事じゃないか・なんで俺たちまで  
駆りだたせにやなんのだ・・・？・・・連合も潮時か・・・）

ステラは半ばフワフワした気持ちで、『インパルス』へ向かっていく。

君は俺が守る！

ステラ！言ったる？会いにいくって！

彼女はシンとの事を思い出すと、うずうずしていた。  
自分が生きていたなんて知ったら、驚くだろうな。

シンに会いたい。そうぼんやり考える。

フラフラと『インパルス』へ近づくが、『インパルス』は容赦なく、  
<sup>エクスカリバー</sup>長刀を『タスラム』へ振り下ろす。

ステラは、ビクッと驚く。

何故？どうして？シンなら分かってくれるはずなのに

ステラはとっさに、『タスラム』の防盾ビームサーベル<sup>エクスカリバー</sup>で長刀を防ぐ。

その際に、機体のキーボードを左手で急いで叩き、接触回路をつなげる。

「シン！ステラ、会いに来たよ！」

『インパルス』のコクピットから、あどけない少女の声が聞こえる。  
ルナマリアはすこし驚く。

（誰よ？この子！）

ルナマリアは焦る。シン？何故、『デステイニー』のパイロットを知っているのか？

連合のパイロットのくせに。・・・連合・・・まさか！

ルナマリアはハツとした。

まさか、シンが厳罰を受けてまで返したあの時のエクステンデットの女の子？

確か、シンは“ステラ”って・・・！

彼女はやり辛い雰囲気押し殺し、『タスラム』の右肩にビームライフルを撃ち込む。

ステラは、シンの事で頭が一杯で、ライフルをかわせず直撃する。右肩をやられ、強い衝撃が彼女を襲った。

ごめん！

ルナマリアは内心で彼女に謝罪する。

『お仲間』のステラの『タスラム』が上空から陸へ落ちていく様を見たステイング。

「あの馬鹿！肩をやられたぐらいでっ！ステラ！！無事か！？」

ステイングはステラに呼びかけるも、答えは返ってこない。

彼の真横から強い衝撃が襲う。『レジェンド』と呼ばれた、『タスラム』のようなフォルム

の機体が、『ブリュナーク』の横腹に蹴りを入れたのだ。

慣性の方向へ吹き飛び、すばやく宙返りして受身を取る。

「ちい！」



<貴様の相手は俺だ>

(す・・ステラ!?)

シンは先ほど、『ブリューナク』とぶつかりあった時に接触回路が開いたので

今のスティングの言った事がスピーカーを通して伝わってきた。

ステラ? だって・・ステラは死んで・・!

確かに彼女の遺体は確認しなかった。だが彼女が生きているはずが無い。

今でも覚えている。

『デストロイ』の胴体のコクピットの亀裂から見えた美しいブロンズの髪色。

雪のように透き通った白い肌。そして、守ってやりたいと思わせるあどけない顔と

女の子と感じさせてくれる華奢な体。

もし・・今のことが本当なら・・!

シンはいても立っても居られなくなり、急いで地上に落ちた『タスラム』へと接近する。

「何をする気だ!?’

クロトは『デスティニー』が、『タスラム』に接近していくのを見る。

このままではステラがやられる！  
そう思った次の瞬間、『ノワール』の背後に警報音が鳴り響いた。

「何だ！？」

空中から猛スピードで接近していくのは、オレンジ色の機体でそのフォルムは

『インパルス』そのもの。フォースシルエットを装備したそれは、『ノワール』にサーベル

を振り下ろす。『ノワール』もそれに対応してフラガツハ3で凌ぎあい、

離れ際に二連装リニアガンを放つ。

リニアガンから放たれた弾は、オレンジ色の『インパルス』が掲げたシールドで防御された。

「面倒臭いやつが出てきたなっ！」

<ふんっ！ストライクとはなっ！こんどはこっちからやらせてもらうぜえ！>

オレンジ色の『インパルス』にオレンジのパイロットスーツ。

そう。彼こそハイネ・ヴェステンフルスだ。

『ガイア』にコクピットを破壊されたと思ったが、実は生きていものの、

重症をおい、これまでの戦闘はずっと『ミネルヴァ』で養成していたのだ。

議長からもらった新たな剣は、今までの『グフ』や『ザク』を上回り、

ヴァリアブルフェイスシフト

VPS装甲も彼のパーソナルカラーに変更されている。

<黄昏の魔弾は1人だけじゃないってね！いつちょやらせてもらうぜ！>

<ステラ！>

シンは『タスラム』へ駆け寄り、『ディステイニー』のコクピット内で『タスラム』との接触回路を開いて、応じた。

<ステラ！ステラア！>

シンは必死に叫ぶ。  
愛する人が生きていた喜びが強く、ここが戦場だと忘れ去られていた。

彼女の姿を見たい。声を聴きたい。会ってこの手で抱きしめたい。すると、ステラもようやく気付いた。

シンの声がする！

彼女も『タスラム』の内線を『ディステイニー』から発した信号をつなぎ合わせ、互いのメインモニターの上にお互いの顔が映る。

生きてた！

お互い、再び会えた事が嬉しく、ほとんど同時にコクピットのハッチを開いて

機体から躍り出る。

会えた！絶対に合えないと思ってたのに！

シンはヘルメットを投げ捨てて、ステラに駆け寄る。彼女もヘルメットを

外してシンに駆け寄っていった。

互いに強く抱きしめる。お互いの体の硬さや柔らかさを深く味わう。

彼女は少し長い黒髪で隠れている紅い瞳をまっすぐに捉える。

会えた喜びが強く、彼女の赤紫の瞳に涙が溜まっていく。

シン自身も彼女が生きて今ここにいることが嬉しく、なんともいえない感情が胸にこみ上げていく。

彼女の匂い。彼女の髪。彼女の柔らかさ。それら全て、シンの体に伝わる。

「ステラ！良かった！生きてたんだ！俺・・・君がいなくなっでずっと・・・！」

「シンにずっと会いたくて・・・ステラ、ずっと会いたくて・・・」

シンは抱きしめながら彼女の顔を見下ろすと、歓喜に満ちて、彼女のすみれ色の瞳から

涙が零れるのが見えると、どうしようもなく感情を抑えられなかった。

彼は思わず、彼女の可愛い唇に自分の唇を強引にくっつける。

ステラは目を丸くさせ一瞬驚くも、口の中に好きな人の舌が入ってくるのが分かり、

彼に全て身をゆだねた。互いの舌が絡み合い、互いの体温を強く感じる。

すこしずつだが、お互いの体が熱くなっていく。

シンとステラは、その幸福の時間が長く続けばいいのに、と思う。

「っはぁ・・・」

シンとステラは互いの唇を離し、一呼吸いれる。

今までずっと戦闘ばかりで、『フリーダム』を怨みつづけて尊敬していたアスランまでもこの手にかけた。

切羽詰った状況だったから、シンはいつも不機嫌そうな顔だったが、今やっとなんだ幸福を感じて、彼の本来の優しい顔が戻っていく。

シンは申し訳なそうに言う。

「ごめん・・・我慢できなくて・・・」

「ううん、ステラ嬉しかった！何だか気持ち良かった・・・」

「え・・・っ！ステラ・・・！」

初めてのキスだったが、どうやら上手く行ったようだ。

彼はコーディネーターであるから、初めてのナチュラルのように下手ではない。

初めてでも上達したナチュラルくらいの技はある。

頬を染め、ステラの言葉に顔が熱くなる。

彼女もやっとな落ち着き、彼に笑顔を向むけた。

「シン・・・？」

「ステラ・・・」

もう、絶対に離さない。離すものか。大切な者を失ってたまるか！

（守るんだ・・・俺が・・・ステラを・・・！）

シンは堅く誓い、ステラと再び唇を交わすのであった。

#### 第十四話『黄昏』（後書き）

スパロボKでハイネが隠しユニットとして手に入ります。もし、本編でも生きていたなら、こんな感じで最終決戦でアスラン達と共に戦うんだなあ・・・と思いました。

## 第十五話『黄昏ノ弐』（前書き）

何も浮かばず、そのばそのばでキーを打ってます。

文章になってないと分かっているながらも書いてしまった・：。プロットからやり直すべきかも・：。



## 第十五話『黄昏／＼』

「シンは一体何をやっている!？」

『レジェンド』のコクピットから、シンとステラがキスをしている光景を見て腹が立つ。

いつも冷静なレイが珍しくも、苛立っていた。

その理由はやはり、『ブリユナーク』のことであろう。

互いの技量が同じであるか、致命傷を与える事が出来ない。

『ブリユナーク』はビームサーベルで、『レジェンド』は対艦刀<sup>エクスカリバー</sup>で互いの得物を交差させ、しのぎを削る。

「こいつ！落ちやがれ！」

『ブリユナーク』は一度後方へ機体をステップさせ、『レジェンド』から離れ、

両肩の2連装<sup>バラエーナ</sup>レールガンの砲頭を起こし、『レジェンド』めがけ発射した。

「ちっ！」

『レジェンド』は左腕のビーム・シールドでそれを、防ぐも、その防いだ瞬間の隙を狙い

『ブリユナーク』の接近を許してしまう。

「もらったぜっ！」

『ブリユナーク』のビームサーベルが『レジェンド』の左腕を斬りおとす。

このままでは、完全にこちらが不利。レイは息をのむ。

まだ、この機体を扱うには早すぎた。いくらエース級の腕前とはいえ元々この『レジェンド』はアスラン・ザラ用に作られている。

最初からシン用に開発されている『デイスティニー』とは違うのだ。しかも、宇宙空間ではないため、『レジェンド』の持ち味であるドラグーンさえ使えない。

「ならばっ！」

レイは『ブリュナーク』から背を向け『デストロイ』に狙いを定める。

<てめえ！逃げんな！！>

レイは舞うように『デストロイ』に接近して、コクピットへ対艦刀エクスカリバーをコクピットへ突き立てる。蟹の甲羅のような形状の黒光の化け物は爆炎と共に散る。

その中、『レジェンド』は背部のドラグーン・ユニットを展開させ、『ブリュナーク』へ

10本のビームが飛ぶ。だが、スティングはそのビームを、ビームサーベルで全て弾く。

<何！>

レイは『ブリュナーク』の動きが、一瞬だけ『フリーダム』と重なり、驚愕した。

奇襲のつもりで仕掛けた攻撃を意図も簡単に弾かれたのだ。しかも、ビームサーベルだけで。

連合にまだこれだけの兵士が残っていたとは。レイは齒噛みした。

<野郎・・・!>

迂闊だった!『デストロイ』をまた一つ落としちまった!

完全な油断。

ステイングは自嘲した。

時、同じくして『フラガラツハ』は『インパルス』と交戦していた。

『フラガラツハ』は両肩ブローメンを二刀投げつけるが、  
『インパルス』の対艦刀で弾かれ破壊される。  
フラッシュエッジ  
エクスカリバー

<へえ!やるじゃん!>

<これでも私、“赤”なのよ!>

<・・・あつ!>

アウルは息詰まる。“アレ”から聞こえた声。  
聞き覚えのある声。間違いない。

ルナか!

アウルはインパルスに向かって言った。

<それに乗ってるのルナなんだろう!?>

<あ・・・アウル!>

ルナマリアは驚愕した。

あの『ジャスティスもどき』に乗っているのがアウル?

<アウル！止めて！あなたと戦いたくないの！>

彼女は叫ぶが彼は聞かない。『フラガラッハ』が胸部のビーム砲を  
『インパルス』へと放ち、『インパルス』は盾で防ぐ。  
それでも彼女はアウルに向かって言った。

<どうして私達が殺しあわなきゃいけないの？！>

『インパルス』は後ろへスライドしながら、『フラガラッハ』の射  
程外から逃げる。

<知るかつ！>

ようやくアウルが彼女の問いに答えた。

<お前がザフトだからだろうが！だから、何だってやってやるさ！  
！>

<・・・っ！>

アウルはそう言い放つと、ウェポントラックから超高インパルス砲  
を構える。  
アグニ

その砲口が『インパルス』を捉えるが、アウルはトリガーを引かな  
かった。

正確には引けなかった。トリガーを引く指が震える。

今、撃てば相手は確実に死ぬのに・・・！コクピットを貫けるのに・・・  
！

こんな感情は初めてだ。数え切れないほどのMSを破壊してきた僕

なのに・・・。

<クソ・・・！>

思わず操縦桿を握る手をコクピットの機器に、思い切り叩きつけた。

とんだ甘ちゃんだ・・・僕は・・・。

空中で停滞する『フラガラッハ』にゆっくりと近づいていく『インパルス』。

<アウル・・・>

<・・・ハハ！笑えよ！兵器として作られた僕が、感情に左右されただからさあ！>

アウルの言葉にルナマリアは思い出した。

ロドニアの研究所で無残に転がっていた子供の死体。

遺伝子を操作されたコーディネーターを嫌うブルーコスモスが作り上げた兵器。

強化人間。彼もそのうちの一人。でも・・・。

アウルは兵器なんかじゃない！

「ああ。俺は約束は守るさ。ステラを守る」

「シン・・・守る？」

「ステラ・・・」

こうしてお互いの目を見ているだけで幸せになれる。

ここが戦場だという事を忘れられる。

守る。その言葉がどれほど彼女を救えるのだろう。

いや、彼女だけじゃない。この言葉で守られるのは俺もなんだ。彼女を守る。だから俺は死ねない。

そのとき、『デイスティニー』のコクピットから通信が入った。

<シン！何をしている！『デストロイ』を破壊するんだ！>

<レイ・・・！>

<彼女との再会を喜ぶのは後にしろ！ここは戦場だぞ！>

戦場。そうだ。ここは戦場。

夢から現実叩き落とされるようだった。

「ごめん・・・ステラ。もう行かなきゃ」

ステラは彼が悲しそうな目をしたので、悲しくなった。

また行っちゃう。ステラから離れる・・・。

「シン・・・もっと一緒に居たい」

彼女が悲しい顔で彼の体をギュッと掴んだ。

そして胸の中でポロポロと泣き始めた。

そんな彼女の気持ちを察してはやれたが、シンはどうしようも出来なかった。

本当はこのままずっとこうしていたい。出来れば戦争とかない世界で一緒に暮らしたい。

センソウノナイセカイ・

シンはハツとする。

そうだ。俺がやってている事は戦争の無い世界を作る為の戦いなんだ。その世界を作る為なら俺は・・・！

「ステラ・・・ごめんっ！」

シンは彼女の腕を振り解き彼女を背にし、『デステイニー』の cockpit へ走っていく。

ステラは彼に強く腕を解かれたので、嫌われたと思うと、その場にペタリと座り込み

大泣きした。『デステイニー』はゆっくりと立ち上がり、彼女の体を『デステイニー』の

陰が包み込んだ。シンは cockpit から彼女の姿を見下ろすと、彼女の大泣きしている姿が目に見え込んだ。

傷つけてしまった・・・でも、待っててステラ。

もうすぐ俺が、戦争の無い新しい未来へ連れて行くから。そして・・・そこで暮そう！

『デステイニー』を飛翔させ、『デストロイ』へ向かっていった。

「シンとステラ・・・！あんな大胆な事を・・・！」

クロトは彼等が戦場のど真ん中でキスをしている光景をコクピットから見て、せせら笑う。

二人の姿を大きくズームアップさせると、二人が幸せそうな顔をしているのが分かった。

「良かったじゃん。シンの奴」

<余所見するんじゃない！>

オレンジ色の『インパルス』が『ノワール』に向かってビームライフルを連射する。

だが『ノワール』はフラガラッハ3でそのビームを弾き、『インパルス』へ接近していく。

<悪かったな！だがこれで終・劇！！>

クロトは啖呵を切つて、『インパルス』の懐へ潜り込み、頭部のC IWSを連射する。

ヴァリアブルフェイスシフト

『インパルス』のVPS装甲があるのにも関わらず、

そんな攻撃を！ハイネの視界を速射砲が包むが、逆にハイネの怒りを買っただけだった。

<ちっ・こんのおお！目障りだぜ！消えろ！>

『インパルス』はビームサーベルを『ノワール』へ向かって一閃するが、

『ノワール』はとつさに背部の『ノワールストライカー』を脱着し『インパルス』の真下へ

潜り込むように交わす。



< 何い！！>

ハインは驚いた。想定していなかった事をされて戸惑い、そして脱着された

『ノワールストライカー』はビームサーベルに一闪され爆発し、『インパルス』を後方へ吹き飛ばす。

< うわぁ ああ！>

< これでええええええええええ！！>

『ノワールストライカー』を脱着させた『ストライクE』は元の白色に戻り、吹き飛ばされた

『インパルス』に猛スピードで接近していった。

そして、両腕に持っているフラガラツハ3で『インパルス』の四肢を一瞬で切り裂いた。

< なっ・・・に・・・！？>

< 瞬・殺！！>

頭部と胸部だけのダルマになった『インパルス』は海上へ向かって落下していく。

それを見下ろしながら、『ストライクE』は残り少なくなった『デストロイ』の防衛に向かった。

「クソ・・・まだまだだな・・・俺も！」

まるで、あの時のアスランのようだな俺は。  
ハインは内心で、苦笑した。

こりゃあ、『ミネルヴァ』に戻るしかないかね・・

海上に落ちる前に、素早く胸部とコアファイターを切り離し、  
機だけとなった

『インパルス』は母艦に帰っていった。

<アウルは兵器なんかじゃないよ・・>

<え・・?>

<だって、兵器だったら今頃あたしは死んでるじゃない?>

ルナマリアは笑った。

そう。何度も何度も彼に助けられた。

彼は本当は優しい子なんだ。

<ルナ・・>

彼女は笑ってくれた。

彼女の同胞を何人も殺してきた僕に彼女は笑いかけてくれた。  
何か懐かしい感じがする。

そうだ。

母さんに似てるんだ。

ルナを見るとあの場所の“母さん”を思い出すんだ。  
僕にとって唯一の安らぎの場所。

僕も、ルナとしたい。

あのお馬鹿ステラがあの野郎としてしてるみたいに、僕もルナとキスしたい。  
あ・・そうか。これが“恋”ってんだ。

<ルナ・・僕も・・>

アウルが言おうとした瞬間と同時に、ついに最後の『デストロイ』  
が撃墜されたシグナルが  
コクピットに鳴り響いた。

<え・・?>

アウルは最後に撃墜された『デストロイ』の近くにいるMSをズ  
ムさせる。  
青と赤と白の新型機だ。  
トリコロール デステイニー

<あの野郎!>

『フラガラツハ』が『デステイニー』に体を向けようとした瞬間、  
『インパルス』に  
制止させられた。

<止めて!もう戦わないで!>

いくらアウルが強くても、『デステイニー』に乗っているシンに敵  
うわけが無い。

今行ったら、確実に殺されてしまう。ただでさえ私のせいで混乱しているのに！

<シン、ルナマリア、聞こえるな。新型機はいい。撤退するぞ。>

レイの指示を聞き、シンとルナマリアは、燃える『デストロイ』達を後にし

『ミネルヴァ』へと向かった。

遠くなる、『フラガラツハ』をルナマリアは横目で確認しきびすを返す。

さよなら。アウル。

「待て！まだ決着は付いてねえ！！」

「よせ！追っんじゃない！・・・『デストロイ』を全機破壊された時点で、俺達は負けたんだ。」

クロトが淡々と言い放つ。それを聞きスティングは押し黙った。

結局、あの中で唯一敵を落としたのはクロトのみ。

彼はまだまだ、クロトの足元に及ばない事がわかり、釈然としない様子だ。

アウルは未だ、遠くへ行ってしまったルナマリアが乗る『インパルス』を見つめていた。

彼女が小さくなるたびに、彼になんともいえない寂しさが入ってくる。

ステラはさっきからずっと、『タスラム』のコクピット内で泣いていた。

目は真っ赤になり、まぶたは赤く腫れ、頬は垂れ流した涙で濡れて赤くなっている。

自分達の不注意が、ここを落とした事実は隠せない。

だから、間違いなく『廃棄処分』される。

その前に逃げなくては。

クロトは前々から実行しようとしてた計画を実行させようと決意する。

大天使に会いに・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5384c/>

---

機動戦士ガンダムSEEDブリュナーク

2010年10月9日20時49分発行